

あらぐすくしちやばるだいにいせき
新城下原第二遺跡

—キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告—

平成18（2006）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序 文

本報告書は、沖縄県在沖米軍海兵隊基地キャンプ瑞慶覧内におけるガソリンスタンド及び車両整備工場の建設に伴い、那覇防衛施設局の委託を受けて平成11（1999）年度から平成16（2005）年度にかけて沖縄県教育委員会が主体となり、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した『新城下原第二遺跡』の発掘調査成果をまとめたものです。長期間にわたる事業のため、平成12（2000）年度の沖縄県立埋蔵文化財センターの開所に伴い、事業実施機関が沖縄県教育庁文化課から当センターに変わり、担当者も3代にわたるなど調査体制変動の影響を受けた困難なものとなりましたが、多大な成果を得て終えることができました。

遺跡は宜野湾市から北谷町にまたがり、後背に多数の豊富な泉が湧き出す丘陵を擁し、前面には美しいサンゴ礁と東シナ海が広がる広大な沖積地に立地する、貝塚時代早期から近世・近代に至る複合遺跡です。今回の発掘調査は6カ年にわたりて実施し、延べ面積は2,762.5m²を測り、最も深い場所では現地表面から-8m程の掘削を行うものとなりました。その結果、様々な時期の多数の遺構や遺物が出土し、自然科学分析を導入した古環境の変化にまで迫る成果を得ることができました。

主な成果としては、近世・近代においては、基地造成直前のキャタピラ痕・道路跡等の遺構や水田遺構とそれに伴う遺物があります。グスク時代においては、方形の区画を持った遺構とそれに伴う多数の木杭が検出され、当該時期の沖積地における水田の存在を示す重要な発見となりました。貝塚時代後期においては、川跡が検出され多数の土器群を始めとした遺物が出土しました。特にイモガイ集積遺構が川底から2基検出された事例は、県内では初めてで注目されます。貝塚時代早期については当初は確認されておらず、調査終了前の最下層確認掘削によって宜野湾市では初めての例となる爪形文土器包含層が発見され、急遽調査を実施することになりました。その結果、多数の爪形文土器や無文土器に伴って石器や貝製品・骨製品、多種多量の貝類遺体やイノシシを中心とした動物遺体が出土しました。

また、県内でも希少な遺物としてはグスク時代においては完形の滑石製のバレン状製品、先史時代においては開元通宝やイモガイを縦に切り取った腕輪、装飾的・呪術的な要素をもつ石製品が出土しております。爪形文土器包含層においては、柄を有する貝鏃を始め、背面に火を受けた痕跡が残るヤコウガイや規則的に割られているサザエ等の食料残渣、動物遺体では鶴の骨が確認されていることも、当時の沖縄に鶴が飛来していたことを裏付ける希少な例と考えられます。

このように、今回の発掘調査の成果は、宜野湾市及び北谷町の境界にある沖積地における人類の長い歴史と生産活動の一端を解き明かすための重要な資料となりました。また、この調査によって得られた多くの記録や出土品は過去から現在、そして未来への架け橋として広く普及していくために役立てたいと思います。

本報告書が多くの方々に活用されますとともに、埋蔵文化財の保護と活用についてさらなる关心を持っていただければ幸いに存じます。

末尾ながら、長期間にわたる発掘調査及び資料整理にあたり、御指導・御助言を賜った多くの諸先生や地元の方々、並びに事業の実施にあたり御協力を賜った関係各位に深く感謝申し上げます。

平成18（2006）年 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 田場 清志



巻頭図版1 新城下原第二遺跡全景（上空より）



新城下原第二遺跡遠景

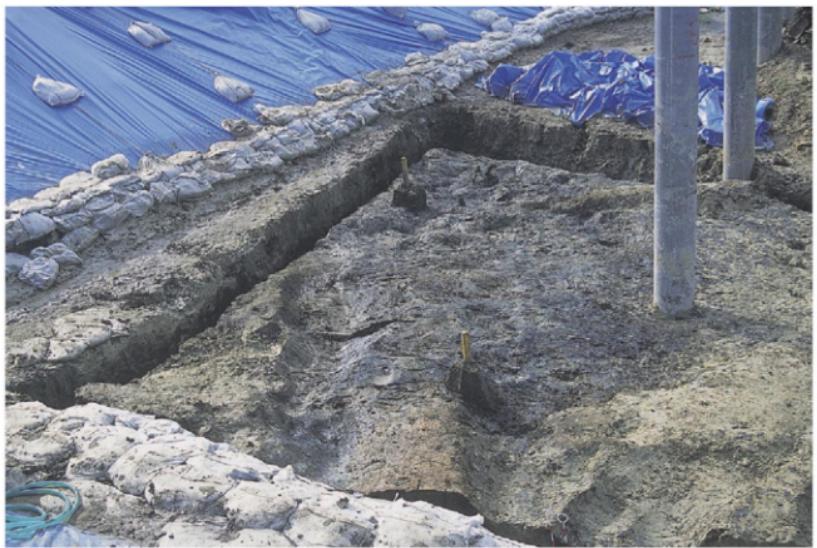


調査区遠景（Ⅱ・Ⅲ地区）

巻頭図版2 遺跡の景観



瓦検出状況（I地区）



瓦遺構（I地区）



疑似吐畔検出状況1（Ⅲ地区）



疑似吐畔検出状況2（Ⅲ地区）

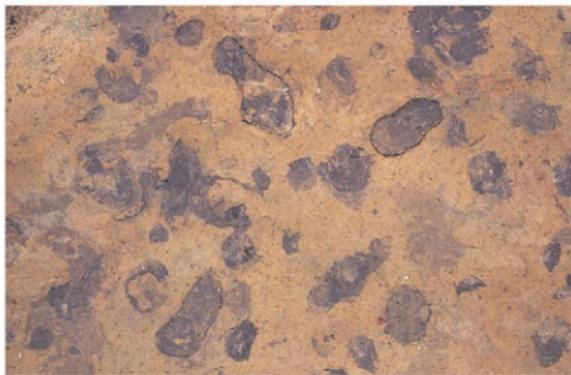
巻頭図版4 グスク時代の遺構①



疑似珪片と木杭（Ⅲ地区）



搅拌状況（Ⅲ地区）



足跡検出状況（Ⅲ地区）



バレン状製品



木杭



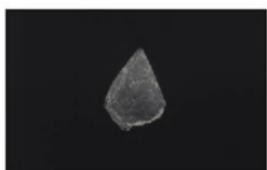
土器検出状況（I地区）



イモガイ集積検出状況（II地区）



卷頭図版7の復元土器



貝製品



貝製品



土器及び石器

卷頭図版8 貝塚時代後期の遺物



室川下層式・伊波式・仲原式土器



石製品（縄文時代後期）



開元通寶



石鏃

卷頭図版 9 貝塚時代前・後期の遺物



調査区（II地区）



遺物検出状況

卷頭図版10 貝塚時代早期（縄文時代早期）

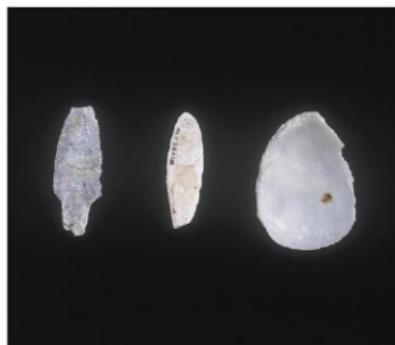


貝・獸骨出土状況

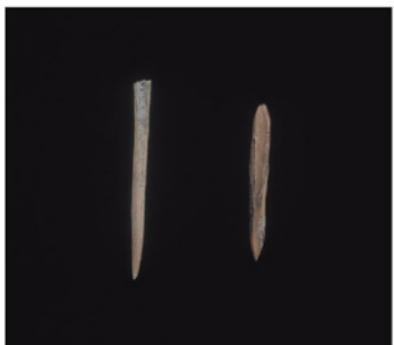


爪形文土器と石器群

巻頭図版11 貝塚時代早期（縄文時代早期）の遺物



貝製品



骨製品



シカ類



トリ類・ネズミ類



ウミガメ類



リュウキュウイノシシ

巻頭図版12 貝塚時代早期（縄文時代早期）の遺物と動物遺体



卷頭図版13 ヤコウガイ

例　　言

1. 本報告書は那覇防衛施設局からの受託事業として、沖縄県教育委員会が主体となり、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施したキャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る新城下原第二遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。

2. 調査対象地は沖縄県宜野湾及び市北谷町にまたがる。

3. 発掘調査は平成11年度～平成16年度まで、資料整理は平成16年度～平成17年度を中心として実施した。

4. 事業の実施にあたっては、宜野湾市教育委員会・北谷町教育委員会・在沖米海兵隊基地環境保全課・沖縄県教育庁施設課の協力を得た。

5. 現地調査の実施、出土遺物の同定・資料整理にあたっては次の方々から御指導や貴重な助言をいただいた（敬称略、所持五十音順）。記して感謝申し上げます。

現地調査・・・佐伯　信之・安和　吉則（浦添市教育委員会）、

井上　智博・江浦　洋（大阪府文化財センター）、

呉屋　義勝・城間　肇（宜野湾市教育委員会）、

エリック・ウィリアムズ・與那覇　政之（在沖米軍海兵隊基地環境保全課）、

中村　恩・東門　研治（北谷町教育委員会）、

山崎　純男（福岡市教育委員会）

坂井　秀弥（文化庁）

後期土器・・・新里　貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）、西銘　章（嘉手納高校）、

安座間　充（金武町教育委員会）、宮城　弘樹（今帰仁村教育委員会）

石質・・・神谷　厚昭（元県立真和志高校教諭）

貝類遺体・・・黒住　耐二（千葉県立中央博物館）、島袋　春美（北谷町教育委員会）

矢敷　彩子（琉球大学大学院博士課程）

動物遺体・・・金子　浩昌（東京国立博物館特別研究員）

植物遺体・・・高宮　広土（札幌大学）

設計・工事・與儀　孝永（沖縄県教育庁施設課）

6. 本報告書の時代名称は現行編年（沖縄考古学会1978）を中心とし、詳細な時期に関しては高宮暫定編年（高宮1991）を使用した。

7. 本報告書で使用した地図は次の機関から発行されているもの、または提供していただいたものを使用し、複製・転用した。

第2図 Global Reference Geodata (MicroImages)、第3図 TDM2500 (トロピカルテクノセンター)

第4図 国土地理院1/25,000、第5図 那覇防衛施設局

8. 本報告書は片桐千亜紀が編集し、又吉純子ほかが携わった。執筆者は次のとおりで、詳細は目次に示す。島袋春美氏、金子浩昌氏、高宮広土氏には貴重な玉稿を賜った。

片桐 千亜紀、久貝 弥嗣、崎原 恒寿（沖縄県立埋蔵文化財センター）

島袋 春美（北谷町教育委員会）

金子 浩昌（東京国立博物館特別研究員）

高宮 広土（札幌大学）

9. 第6章第1節は株式会社古環境研究所の業務委託報告書、第2節はパリノサーウェイ株式会社の業務委託報告書を掲載した。

10. 引用・参考文献は第7章の末尾に一括して記載したが、玉稿を賜った第5章第18節～20節及び第6章についてはそれぞれの節に掲載している。

11. 本報告書に掲載された出土遺物の撮影及び現像・焼付は矢舟章浩・光嶋香が行った。

12. 貝類は沖縄県立埋蔵文化財センター保管のサンプルを照合した。

13. 発掘調査で出土した遺物・現場の実測図・写真及び資料整理で作成した実測図や写真等の記録は沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

序文

卷頭図版

例言

第1章 調査に至る経緯	(片桐)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 調査体制		1
第3節 調査経過		6
第2章 遺跡の位置と環境	(片桐)	12
第1節 地理的環境		12
第2節 歴史的環境		12
第3章 調査区と基本層序	(片桐)	16
第1節 調査区とグリッドの設定		16
第2節 基本層序と遺跡の概要		16
第4章 遺構		25
第1節 戦後・近世～近代	(片桐)	25
第2節 グスク時代	(片桐)	40
第3節 貝塚時代後期	(片桐)	59
第4節 貝塚時代早期	(崎原)	80
第5章 遺物		
第1節 鏡	(片桐)	115
第2節 陶質土器	(片桐)	115
第3節 青花	(片桐)	119
第4節 青磁	(片桐)	120
第5節 木杭	(崎原)	122
第6節 カムィヤキ	(崎原)	128
第7節 銭貨	(久貝)	128
第8節 グスク土器	(片桐)	128
第9節 貝塚時代後期土器・弥生土器		
第10節	(片桐)	129
第11節 貝塚時代中期土器	(片桐)	166
第12節 貝塚時代前期土器	(崎原)	167
第13節 石器・石製品	(崎原)	189
第14節 バレン状製品	(崎原)	208
第15節 貝製品	(久貝)	209
第16節 骨製品	(久貝)	212
第17節 土製品	(崎原)	212
第18節 貝類遺体	(島袋)	215
第19節 動物遺体	(金子・久貝)	261
第20節 植物遺体	(高宮)	287
第6章 自然科学分析		295
第1節 新城下原第二遺跡（Ⅲ地区）の自然科学分析	(古環境研究所)	295
第2節 新城下原第二遺跡（Ⅱ地区下層）の自然科学分析	(パリノ・サーヴェイ)	311
第7章 結語	(片桐)	329

参考文献

報告書抄録

図 目 次

第1図 年度別調査区域.....	11	第34図 簪	115
第2図 沖縄本島の位置.....	13	第35図 陶質土器	118
第3図 周辺の遺跡分布.....	14	第36図 青花	120
第4図 調査区位置.....	15	第37図 青磁	120
第5図 調査範囲とグリッド設定.....	19	第38図 木杭	126
第6図 基本層序模式図 i (I 地区～III地区)	20	第39図 カムィヤキ	128
第7図 基本層序模式図 ii (川跡及びテストピット 3・4)	21	第40図 錢貨	128
第8図 近代～戦前の遺構 (II 地区)	28	第41図 グスク土器	128
第9図 近世・近代 本田遺構・跡跡検出状況 (I 地区・II 地区)	30	第42図 後期土器 1	152
第10図 近世・近代 本田遺構詳細検出状況.....	31	第43図 後期土器 2	154
第11図 近世・近代 本田遺構詳細検出状況 (I 地区)	32	第44図 後期土器 3	156
第12図 近世・近代 本田・溝状遺構詳細検出状況 (II 地区)	33	第45図 後期土器 4	158
第13図 I 層の出土遺物.....	34	第46図 後期土器 5	160
第14図 疑似畦畔成立模式図 (III 地区)	42	第47図 後期土器 6	162
第15図 グスク時代 本田遺構検出状況 (III 地区)	43	第48図 後期土器 7・弥生土器	164
第16図 グスク時代 本田遺構詳細検出状況 (III 地区)	45	第49図 中期土器	167
第17図 グスク時代 溝状遺構詳細検出状況 (III 地区)	47	第50図 前期 (前 II・IV 期) 土器	170
第18図 II 層・III 層・III e 層の出土遺物.....	48	第51図 早期土器 1	180
第19図 貝塚時代後期 遺構検出状況 (I 地区～III 地区)	63	第52図 早期土器 2	182
第20図 貝塚時代後期 川跡 1 検出状況 (I 地区)	65	第53図 早期土器 3	184
第21図 V 層・川跡 1～2 層・川跡 1～3 層の出土遺物	66	第54図 早期土器 4	186
第22図 川跡 1～3 層の出土遺物	67	第55図 早期土器 5	188
第23図 貝塚時代後期 川跡 2・土坑検出状況 (II 地区)	68	第56図 石器 1	194
第24図 IV 層・V 層・川跡 2～2 層の出土遺物	69	第57図 石器 2	196
第25図 川跡 2～2 層・川跡 2～3 層の出土遺物	70	第58図 石器 3	198
第26図 貝塚時代後期 川跡 3 検出状況 (III 地区)	71	第59図 石器 4	200
第27図 IV 層・V 層・川跡 3～2 層・川跡 3～3 層の出土遺物	72	第60図 石器 5	202
第28図 基本層序 (貝塚時代早期)	82	第61図 石器 6	204
第29図 堆積層序及び遺物分布図	83	第62図 石製品	206
第30図 貝塚時代早期 遺物散布状況 (II 地区)	85	第63図 バレン状製品	208
第31図 IX b 層の出土遺物	87	第64図 貝製品 1	210
第32図 IX a 層・IX b 層の出土遺物	88	第65図 貝製品 2	211
第33図 IX b 層・IX c 層・IX 層不明・X I 層の出土遺物	89	第66図 骨製品	212
		第67図 土製品	212
		第68図 地区分別出土状況	216
		第69図 層序別出土状況	218
		第70図 キバウミニナ (殻径)	222
		第71図 センニンガイ (殻径)	222
		第72図 カンギクガイ (殻径)	222
		第73図 クマノコガイ (殻径)	222
		第74図 マガキガイ (殻径)	222
		第75図 マドモチウミニナ (殻径)	222
		第76図 ヒメジャコガイ (殻長) 右	223
		第77図 ヒメジャコガイ (殻長) 左	223
		第78図 ヘラサキガイ (殻長) 右	224

第79図	ヘラサキガイ（殻長）左	224
第80図	シレナシジミ（殻長）右	225
第81図	シレナシジミ（殻長）左	225
第82図	アラスジケマンガイ（殻長）右	226
第83図	アラスジケマンガイ（殻長）左	226
第84図	ノ-24グリッドにおける植物珪酸体分析結果	
		301
第85図	ラ-34グリッドにおける植物珪酸体分析結果	
		302

図版目次

卷頭図版1	新城下原第二遺跡全景（上空より）
卷頭図版2	遺跡の景観
卷頭図版3	近代遺構
卷頭図版4	グスク時代の遺構①
卷頭図版5	グスク時代の遺構②
卷頭図版6	グスク時代の遺物
卷頭図版7	貝塚時代後期の遺構
卷頭図版8	貝塚時代後期の遺物
卷頭図版9	貝塚時代前・後期の遺物
卷頭図版10	貝塚時代早期（縄文時代早期）
卷頭図版11	貝塚時代早期（縄文時代早期）の遺物
卷頭図版12	貝塚時代早期（縄文時代早期）の遺物と動物遺体
卷頭図版13	ヤコウガイ

図版1	調査区遠景	9
図版2	基本層序i	22
図版3	基本層序ii	23
図版4	近世・近代の調査i	29
図版5	切跡検出状況	30
図版6	開い石除去後	30
図版7	畦畔検出状況	32
図版8	畦畔完掘状況	32
図版9	近世・近代の調査ii	35
図版10	近世・近代の調査iii	36
図版11	近世・近代の調査iv	37
図版12	近世・近代の調査v	38
図版13	近世・近代の調査vi	39
図版14	搅拌状況	43
図版15	木杭（大）検出状況	43
図版16	B～B' 木杭検出状況	43
図版17	C～C' 木杭検出状況	43
図版18	溝状遺構	45
図版19	足跡2	45
図版20	上：疑似畦畔上の石 下：疑似畦畔検出状況	45
図版21	溝状遺構	47
図版22	溝内堆積状況	47
図版23	グスク時代の調査（Ⅲ地区）i	49
図版24	グスク時代の調査（Ⅲ地区）ii	50
図版25	グスク時代の調査（Ⅲ地区）iii	51
図版26	グスク時代の調査（Ⅲ地区）iv	52
図版27	グスク時代の調査（Ⅲ地区）v	53
図版28	グスク時代の調査（Ⅲ地区）vi	54
図版29	グスク時代の調査（Ⅲ地区）vii	55
図版30	グスク時代の調査（Ⅲ地区）viii	56
図版31	グスク時代の調査（Ⅲ地区）ix	57
図版32	グスク時代の調査（Ⅲ地区）x	58
図版33	イモガイ集積2	63
図版34	イモガイ集積2	63
図版35	イモガイ集積1	63
図版36	イモガイ集積1	63
図版37	川跡近景	71
図版38	川跡堆積状況西壁	71
図版39	貝塚時代後期の調査（I地区）i	73
図版40	貝塚時代後期の調査（II地区）ii	74
図版41	貝塚時代後期の調査（II地区）iii	75
図版42	貝塚時代後期の調査（II地区）iv	76
図版43	貝塚時代後期の調査（III地区）v	77

図版44	貝塚時代後期の調査（Ⅲ地区）vi	78
図版45	貝塚時代後期の調査（Ⅲ地区）vii	79
図版46	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）i	90
図版47	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）ii	91
図版48	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）iii	92
図版49	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）iv	93
図版50	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）v	94
図版51	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）vi	95
図版52	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）vii	96
図版53	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）viii	97
図版54	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）ix	98
図版55	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）x	99
図版56	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xi	100
図版57	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xii	101
図版58	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xiii	102
図版59	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xiv	103
図版60	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xv	104
図版61	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xvi	105
図版62	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xvii	106
図版63	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xviii	107
図版64	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xix	108
図版65	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xx	109
図版66	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xxi	110
図版67	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xxii	111
図版68	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xxiii	112
図版69	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xxiv	113
図版70	貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xxv	114
図版71	簪	115
図版72	陶質土器	119
図版73	青花	120
図版74	青磁	121
図版75	木杭	127
図版76	カムィヤキ	128
図版77	錢貨	128
図版78	グスク土器	128
図版79	後期土器1	153
図版80	後期土器2	155
図版81	後期土器3	157
図版82	後期土器4	159
図版83	後期土器5	161
図版84	後期土器6	163
図版85	後期土器7・脊生土器	165
図版86	中期土器	167
図版87	前期（前Ⅱ・Ⅳ期）土器	171
図版88	早期土器1	181
図版89	早期土器2	183
図版90	早期土器3	185
図版91	早期土器4	187
図版92	早期土器5	188
図版93	石器1	195
図版94	石器2	197
図版95	石器3	199
図版96	石器4	201
図版97	石器5	203
図版98	石器6	205
図版99	石製品	207
図版100	パンレン状製品	208
図版101	貝製品1	210
図版102	貝製品2	211
図版103	骨製品	212
図版104	土製品	213
図版105	主な出土遺物	214
図版106	ヤコウガイ貝殻	227
図版107	上：ヤコウガイ螺蓋 中：チョウセンサザエの貝殻表面 下：チョウセンサザエの貝殻裏面	228
図版108	貝類遺体1（巻貝）	253
図版109	貝類遺体2（巻貝）	254
図版110	貝類遺体3（巻貝）	255
図版111	貝類遺体4（巻貝）	256
図版112	貝類遺体5（巻貝）	257
図版113	貝類遺体6（二枚貝）	258
図版114	貝類遺体7（二枚貝）	259
図版115	貝類遺体8（二枚貝）	260
図版116	動物遺体1	277
図版117	動物遺体2	278
図版118	動物遺体3	279
図版119	動物遺体4	280
図版120	動物遺体5	281
図版121	動物遺体6	282
図版122	動物遺体7	283
図版123	動物遺体8	284
図版124	動物遺体9	285
図版125	動物遺体10	286
図版126	植物遺体1	292
図版127	植物遺体2	293
図版128	植物遺体3	294
図版129	植物珪酸体	304
図版130	新城下原第二遺跡の花粉・胞子	310
図版131	花粉化石	325
図版132	種実遺体	326
図版133	木材（1）	327
図版134	木材（2）	328

表 目 次

第1表 経過一覧	10	第32表 リュウキュウイノシシ下顎骨咬耗状況 (L/R別 個数)	266
第2表 遺物出土状況	24	第33表 II層内の雌雄比	269
第3表 III地区木杭(直径幅)比較表	43	第34表 リュウキュウイノシシ雌雄比 (II層)	269
第4表 イモガイ計測一覧(集積1)	61	第35表 リュウキュウイノシシ雌雄比 (野田貝塚例)	269
第5表 イモガイ計測一覧(集積2)	62		
第6表 陶質土器出土状況	116		
第7表 陶質土器観察一覧	117	第36表 上腕骨計測値 (II層)	269
第8表 青花観察一覧	120	第37表 桃骨計測値 (II層)	269
第9表 青磁観察一覧	121	第38表 尺骨計測値 (II層)	269
第10表 木杭(III地区)出土一覧	122	第39表 大腿骨計測値 (II層)	269
第11表 木杭(直径幅)比較表	122	第40表 脊骨計測値 (II層)	269
第12表 木杭(III地区)観察一覧	123	第41表 各成長段階における後臼歯平均サイズ	270
第13表 地区別・層序別出土状況	132	第42表 下顎骨計測値 (野田貝塚例)	270
第14表 貝塚時代後期土器・弥生土器出土状況	133	第43表 魚骨出土一覧	271
第15表 貝塚時代後期土器・弥生土器観察一覧	145	第44表 ウミガメ類出土一覧	271
第16表 貝塚時代中期土器観察一覧	166	第45表 トリ類出土一覧	271
第17表 貝塚時代前期土器出土状況	168	第46表 ケナガネズミ出土一覧	271
第18表 貝塚時代前期土器観察一覧	169	第47表 シカ類出土一覧	271
第19表 貝塚時代早期土器出土状況	174	第48表 種不明出土一覧	271
第20表 貝塚時代早期土器の観察一覧	175	第49表 リュウキュウイノシシ齒出土一覧	272
第21表 石器・石材・石製品出土状況	190	第50表 リュウキュウイノシシ出土量	273
第22表 石器・石製品観察一覧	191	第51表 新城下原第二遺跡(下層)出土の植物遺体	287
第23表 パレン状製品・模造品の県内出土一覧	208	第52表 新城下原第二遺跡(下層)出土の植物遺体	290
第24表 貝製品出土状況	209	第53表 沖縄県、新城下原第二遺跡における植物珪酸体 分析結果	300
第25表 土製品観察一覧	213		
第26表 ヤコウガイ(殻)計測一覧	219	第54表 新城下原第二遺跡における花粉分析結果	307
第27表 ヤコウガイ(蓋)計測一覧	220	第55表 分析試料一覧	314
第28表 貝類遺体出土状況(巻貝)	229	第56表 放射性炭素年代測定結果	315
第29表 貝類遺体出土状況(二枚貝)	241	第57表 历年較正結果	315
第30表 リュウキュウイノシシ下顎骨咬耗状況	265	第58表 花粉分析結果	316
第31表 リュウキュウイノシシ下顎骨咬耗状況グラフ (%)	266	第59表 種実分析結果	321
		第60表 樹種同定結果	321

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

平成9年1月31日、那覇防衛施設局は、キャンプ瑞慶覧内におけるガソリンスタンド及び車両整備工場建設予定地（提供施設）における文化財の有無について宜野湾市教育委員会に照会した。それを受け、同教育委員会が試掘調査を実施した結果、当該予定地が、周知の遺跡である新城下原第二遺跡の範囲に含まれること、また、遺跡の範囲は宜野湾市から北谷町にまでまたがることが判明した。

平成10年4月23日、宜野湾市教育委員会より沖縄県教育庁文化課にその結果について報告があり、那覇防衛施設局・沖縄県教育委員会・宜野湾市教育委員会の3者で事業実施機関に関する協議を行った。その結果、調査範囲が2市町にまたがることから、当該事業は地方自治法第2条第5項の規定『都道府県は、市町村を包括する広域の地方公共団体として、第2項の事務で、広域にわたるもの、市町村に関する連絡調整に関するもの及びその規模又は性質において一般の市町村が処理することが適当でないと認められるものを処理するものとする。』に該当することにより、沖縄県教育委員会の処理事案となった。

その後、那覇防衛施設局と沖縄県教育庁文化課で埋蔵文化財の取扱いに関する協議を行い、沖縄県教育委員会が発掘調査を実施することになった。ガソリンスタンド及び車両整備工場は3箇所の建物によって構成されているため、調査区を便宜上Ⅰ地区～Ⅲ地区に分け、平成11年度はⅠ地区、平成12年度はⅡ地区、平成13年度はⅢ地区の発掘調査を実施し、平成14年度に報告書を刊行する計画を立て、事業を実施することになった。実際の調査はこのような計画通りに進まず、土壤汚染等による設計変更や想定外の遺物包含層の発見等により、追加調査が何度も実施されるなど2倍の時間がかかった。

平成11年度は沖縄県教育庁文化課が発掘調査を実施したが、平成12年度には沖縄県立埋蔵文化財センターが開所し、事業は同センターが引き継ぎ実施することになった。発掘調査は平成11年度に開始し、平成16年度に終了（6ヶ年間）した。資料整理は平成16・17年度を中心として実施し、平成18年3月に報告書を刊行した。

第2節 調査体制

発掘調査及び資料整理に係る業務は、沖縄県教育委員会が主体となり、平成11年度は沖縄県教育庁文化課が、平成12年度～平成17年度にかけては沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。各年度の調査体制は次のとおりである。

【平成11年度】

事業主体者

沖縄県教育委員会

　　教育長　　　　　翁長 良盛

事業所管

沖縄県教育庁文化課

　　課長　　　　　當眞 嗣一

　　課長補佐　　　千木良良範

事業事務

　　文化課管理係主幹　　大浜 節

　　〃 主査　　砂川 邦子

調査総括

　　埋蔵文化財係長　　島袋 洋

調査担当

　　指導主事　　鶴元 寿充

　　専門員　　田里 一寿

　　文化財調査嘱託員　　増 泰隆

　　〃　　宜保 章太

文化財調査嘱託員 安座間 充

発掘調査作業員

城間幸子、知念勝子、仲地トヨ子、石原シゲ子、下地宏美、徳里キミ子、新崎盛輝、城間盛安、
友利久美子、嘉陽美弥子、久手堅千鶴、具志幸姿郎、砂川司、松田裕、知念将光、真志喜千代子、
小瀬信子、高江洲朝三、儀間三枝子、城間かおり、新垣良子、伊良部原新、友利千恵子、名嘉京子、
中山晋、上里京子、仲松倫泰、伊禮しが子

業務委託

キャンプ瑞慶覧内発掘調査に伴う地形測量業務委託

株式会社 大洋土木コンサルタント

【平成12年度】

事業主体者

沖縄県教育委員会

教育長 翁長 良盛

事業所管

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 知念 勇

副所長 知念 康義

事業事務

庶務課長 知念 康義

主任 上原 浩

調査統括

調査課長 島袋 洋

調査担当

指導主事 鶴元 寿充

専門員 中山 晋

文化財調査嘱託員 増 泰隆

〃 天久 朝海

発掘調査作業員

新垣良子、新崎盛輝、石原シゲ子、伊良部原新、上間チエ、儀間三枝子、金城京子、小瀬信子、
下地宏美、城間かおり、城間幸子、城間盛安、高江洲朝三、知念勝子、桃原隆信、徳里キミ子、
名嘉京子、仲地トヨ子、真志喜千代子、松本義光、吉岡育子、岩谷良久、知念将光、照屋高之、
花田健治

業務委託

キャンプ瑞慶覧内発掘調査に伴う土質調査業務委託

株式会社 大洋土木コンサルタント

【平成13年度】

事業主体者

沖縄県教育委員会

教育長 津嘉山朝祥

事業所管

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 知念 勇

副所長 知念 康義

事業事務

庶務課長 知念 廣義
主任 上原 浩

調査総括

調査課長 島袋 洋

調査担当

指導主事 鶴元 寿充
専門員 中山 晋
文化財調査嘱託員 増 泰隆
〃 片桐千亜紀
〃 天久 朝海

発掘調査作業員

石原シゲ子、上間チエ、小濱信子、城間幸子、仲地トヨ子、真志喜千代子、松本義光、嘉陽美弥子、友利久美子、城間正昌、呉屋史彦、城間庄司、上間寿、加島匡哉、野國昌雪、桑江武士、上地正洋、知念良真、喜屋武盛陽、金城京子、城間盛安、山田真也、米須あさみ

【平成14年度】**事業主体者**

沖縄県教育委員会 教育長 津嘉山朝祥

事業所管

沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 安里 翼淳
副所長 安富祖英紀

事業事務

庶務課長 安富祖英紀
主任 城間 千賀

調査総括

調査課長 盛本 熊
調査担当 専門員 中山 晋
文化財調査嘱託員 天久 朝海
〃 又吉 純子
〃 玉城 照美
〃 稲福 恒子

発掘調査作業員

城間盛安、徳里キミ子、城間幸子、真志喜千代子、山畠キミ、小濱信子、伊禮ヒロ子、與那城好子、儀間三枝子、上間チエ、知念勝子、小橋川恵子、本村成子、友利美佐江、友利久美子、嘉陽美弥子、安里亮、知念将光

業務委託

キャンブ瑞慶覧内発掘調査（Ⅱ地区上層及びⅢ地区）に伴う磁気探査委託業務

有限会社 新開技研

キャンブ瑞慶覧内発掘調査（14）に伴う仮設構造物（土留工）設計業務委託

株式会社 大洋土木コンサルタント

【平成15年度】

事業主体者

沖縄県教育委員会

教育長 山内 彰

事業所管

沖縄県立埋蔵文化財センター

所 長 安里 嗣淳

副所長 安富祖英紀

事業事務

庶務課長 安富祖英紀

主任 西江 幸枝

調査総括

調査課長 盛本 煥

調査担当

専門員 片桐千亜紀

〃 崎原 恒寿

文化財調査嘱託員 天久 朝海

〃 久貝 弘嗣

〃 宮城 奈緒

〃 伊集ゆきの

発掘調査作業員

城間盛安、友利成徳、城間明、仲田浩二、宮里光、城間庄司、小濱信子、山畠キミ、知念勝子、
儀間三枝子、上間チエ、小橋川恵子、金城京子、友利久美子、本村成子、友利美佐江、新川智子、
嘉陽美弥子、知念将光、横尾昌樹、上原淳、仲座進、松門孝、渡辺幸夫、登川浩次、西原美草、
新城とよ子

業務委託

土留工事監理業務委託

株式会社 大洋土木コンサルタント

キャンプ瑞慶覧内発掘調査（15）に伴う假設構造物（土留工）修正設計業務委託

株式会社 大洋土木コンサルタント

キャンプ瑞慶覧内発掘調査に伴う土壤分析業務委託

株式会社 古環境研究所

キャンプ瑞慶覧内発掘調査に伴う自然科学分析業務委託

パリノ・サーヴェイ 株式会社

キャンプ瑞慶覧内発掘調査に伴う写真測量業務委託

株式会社 瑞球サーベイ

工事請負

キャンプ瑞慶覧内発掘調査（15）に伴う土留工事

沖縄プラント株式会社

【平成16年度】

事業主体者

沖縄県教育委員会

教育長 山内 彰

事業所管

沖縄県立埋蔵文化財センター

所 長 安里 嗣淳

副所長 赤嶺 正幸

事業事務

庶務課長 赤嶺 正幸

主 査 西江 幸枝

調査総括

調査課長 盛本 熊

調査担当

専門員 片桐千亜紀

文化財調査嘱託員 山田 浩久

〃 仲地 和美

〃 伊集ゆきの

発掘調査作業員

具志堅護、安里信子、本村成子、友利久美子、吉岡徳明、金子聰、仲西盛雄、安里仁男、
仲座進、仲間勝也、八尋心、米須武雄、友利美佐江

資料整理作業員

天久奈美、宮平妃奈子、諸久村泰子、崎原美智子、大村由美子、荻堂さやか、久保田有美、
瑞慶賀尚美、城間千鶴子、藤田奈緒美、金城克子、喜屋武朋子、野村知子、與古田愛、中山由美、
光嶋香、佐藤明美

資料整理協力者

崎原恒寿、久貝弥嗣、又吉純子、平良貴子、比嘉登美子、比嘉孝子、新垣利津代、上原美穂子、
国場のりえ

業務委託

キャンプ瑞慶覧内発掘調査に伴う胎土分析業務委託
バリノ・サーヴェイ 株式会社

【平成17年度】

事業主体者

沖縄県教育委員会

教育長 仲宗根用英

事業所管

沖縄県立埋蔵文化財センター

所 長 田場 清志

副所長 赤嶺 正幸

事業事務

庶務課長 赤嶺 正幸

主 任 城間奈津子

調査総括

調査課長 岸本 義彦

調査担当

専門員 片桐千亜紀

資料整理作業員

當間あきの、喜納ひとみ、伊波まさみ、當山実、城間五百子、比嘉洋子、金城克子、仲地和美、
吉村綾子、石嶺敏子

資料整理協力者

崎原恒寿、久貝弥嗣、又吉純子、平良貴子、比嘉登美子、比嘉孝子、新垣利津代、諸久村泰子、
上原美穂子、久保田有美、国場のりえ、崎原美智子、大村由美子、荻堂さやか

第3節 調査経過

本事業は平成11年度から平成17年度にまたがり、発掘調査は平成11年度から平成16年度までの6ヶ年に及んだ。発掘調査を実施するにあたり、調査区を便宜的にⅠ地区からⅢ地区とした。平成11年度の当初計画と大きく異なり、建設予定地の設計変更やオイル汚染土の検出、当初判明してなかった爪形文土器包含層の発見等の原因によっていくたびもの計画変更や追加調査を繰り返す長期間にわたる事業となった。

さらに、当該地域は地下水が豊富で第Ⅰ層下面の標高になるとすぐに水が湧き出す。そのため、発掘調査にあたっては調査区の周囲に溝を設け、沈砂地を設置して水を1箇所に集め、その水を1日中水中ポンプで抜き取り続けることで地下水位を意図的に下げる必要があった。また、雨が降ると常時使用している水中ポンプでは時間単位で水を抜く容量よりも水量が多くなるため、調査区が必ず水没するという発掘現場であった。そうなると原状回復に多くの時間を費やすこととなり、調査は遅々として進まず困難を極めるものであった。

以下に年度別の調査経過の概要を記し、さらに一覧表にまとめたものを明記する。

【平成11年度】

第1節に記した経緯を経て、平成11年7月6日、「瑞慶覧(11)工場建設に係る文化財発掘調査業務委託」を那嘲防衛施設局と締結し、同年8月9日Ⅰ地区の発掘調査を開始した。グリッド設定はⅡ地区の設計を基準とし、調査区全体を網羅するように4mピッチで北東・南西のラインを「イロハニホヘト…」で表現し、北西・南東ラインを数字で表現した。

重機で基地造成土の掘削を行った後、第Ⅰ層の検出を始めた。基地造成土直下には厚い砂層が堆積しており、その砂層を掘削すると黒色で粘りがある植物遺体層が確認された。この植物遺体層は後に、近世・近代の水田跡に伴うものであることがわかった。植物遺体層の下からは近世の水田跡に伴う畦畔や溝状遺構が確認された。また、調査区の北側では耕跡が確認された。近世・近代の記録保存を終えた後、さらに調査を進め、その下層からは貝塚時代後期の遺物包含層が確認された。貝塚時代後期の包含層では遺構が確認されず、遺物をグリッドで取り上げながら白砂層(第Ⅵ層)まで掘削を進めた。後述するが、平成16年度に実施した追加調査によって、Ⅰ地区にも川跡が含まれていることが判明した。

Ⅰ地区的調査中、Ⅱ地区も重機による基地造成土の掘削を行い、同時にⅡ地区第Ⅰ層の検出を始めた。基地造成土直下の第Ⅰ層上面からは、キャタピラ痕や道路跡と考えられる遺構が確認され、同時に戦時のものと思われる銃身が出土した。この遺構面を第Ⅰ層上面として基地造成直前の遺構と考え、記録保存を行った。この後、さらに調査を進め掘削を開始したところ、Ⅰ地区と同様に近世の水田跡と思われる畦畔が確認された。

平成12年3月31日、Ⅰ地区及びⅡ地区第Ⅰ層の記録保存を終えた。調査面積はⅠ地区372m²、Ⅱ地区495m²である。Ⅱ地区はさらに下層に貝塚時代後期の包含層の存在が確認されていたため、重機によって埋め戻しを行い平成12年度に引き続き調査を実施することとした。

【平成12年度】

平成12年6月12日、「瑞慶覧(12)工場建設に係る文化財発掘調査業務委託」を那嘲防衛施設局と締結し、同年7月10日Ⅱ地区の発掘調査を再開した。平成11年度に埋戻した土を、貝塚時代後期の包含層直上まで重機によって掘削し、遺構の検出を始めた。遺構検出によってカワニナを多量に含む川跡が平面的に確認され、プランの確認を行った後、掘り下げを行った。川跡は大きく2層に分かれていることがわかり、底面からはイモガイ集積遺構が2基確認された。川跡内からイモガイ集積遺構が確認されることは異例であり、周囲の層序との検討を行った結果、この川跡に伴う遺構であると判断した。

同年10月31日、Ⅱ地区貝塚時代後期の記録保存を終えた。貝塚時代後期の包含層は海砂である白砂(第Ⅵ層)の上に堆積していたため、調査は終了したかに思えが、最終確認のため重機によってさらに2.5m以上の試掘を行った。その結果、海砂層のさらに下層、標高0m前後で貝塚時代早期の爪形文土器包含層が新たに発見された。那嘲防衛施設局と調整を行い、その範囲を確認するため、爪形文土器包含層の範囲確認試掘調査(T.P①～T.P④)を実施した。調査面積はT.P①・③・④がそれぞれ144m²で、T.P②が48m²である。その結果、爪形文土器包含層はⅡ地区及びその周辺を中心として広がっており、工場建設に影響を及ぼすのは

Ⅱ地区のみであることがわかった。

平成13年2月15日、爪形文土器の包含層が新たに発見されたことから、Ⅱ地区における工場建設のためにはさらに下層の調査が必要となった旨を那覇防衛施設局に伝え、今年度の調査を終えた。

※ 以後、Ⅱ地区については、近世～貝塚時代後期までの包含層と爪形文土器の包含層とは2m以上の間層（海砂）を挟むため、便宜的に前者を上層、後者を下層と呼称し使用する。

【平成13年度】

平成13年6月29日、「瑞慶覧（13）工場建設に係る文化財発掘調査業務委託」を那覇防衛施設局と締結した。平成12年度に検出された爪形文土器包含層の調査は平成14年度以降に実施することで調整を行い、平成13年度はⅢ地区の発掘調査を実施することになった。

発掘調査の準備を進めていたところ、9月11日アメリカ合衆国でおきた同時多発テロを発端として、沖縄の米軍施設も戒厳体制が敷かれた。このため、予定より調査の開始が大幅に遅れることになった。ようやく基地内において調査が実施できたのが12月になってからであった。12上旬、Ⅲ地区基地造成土及び貝塚時代後期の包含層直上までを目標として重機による掘削を開始した。掘削を開始してすぐに、当該地区的地下水及び包含層がオイルにより汚染されていることが判明した。このままでは発掘調査が実施できないと判断し、急遽調査を中断することになった。

同年12月26日、Ⅲ地区の車両工場建設予定地の地下がオイルによって汚染されており、現場の安全確保のため発掘調査の中止を余儀なくされた旨を防衛施設局に伝えた。このままでは発掘調査とそれに伴う工場建設は不可能であることから、今後の対策と計画についてあらためて那覇防衛施設局との協議を行った。その結果、土壤汚染の範囲を確認して発掘調査が可能な場所へⅢ地区の工場建設予定地を移動させることになった。

平成14年3月、重機によって土壤汚染の範囲を確定するための調査を行った。その結果、土壤汚染は広範囲ではなく、丘陵側は汚染されていないことがわかった。この結果を那覇防衛施設局に伝え、調査計画については再度調整を行うこととして、今年度の調査を終えた。これを受けた那覇防衛施設局はⅢ地区の車両整備工場建設位置を丘陵側へ移動する設計変更を行った。

【平成14年度】

今年度の計画では、平成12年度の発掘調査終了間際に確認された爪形文土器包含層の発掘調査を実施する予定であった。しかし、Ⅱ地区のガソリンスタンド建設位置が設計変更されることになった。そのため、改めて那覇防衛施設局との協議を行い、設計変更によって必要となったⅡ地区未調査箇所について再度発掘調査を実施することとなり、下層の爪形文土器包含層についてはさらに来年の平成15年度に実施することになった。また、平成13年度に土壤汚染が判明し、設計変更を行ったⅢ地区の調査についても、今年度の末から準備を開始し、平成15年度に発掘調査を開始することが決まった。

平成14年9月24日、「瑞慶覧（14）工場建設に係る文化財発掘調査業務委託（その1）」を那覇防衛施設局と締結した。平成14年12月1日から平成15年1月31日の2ヶ月間にわたりⅡ地区の設計変更に伴う追加の発掘調査を実施した。貝塚時代後期の土器群と共に平成12年度に確認された川跡の延長部分が確認された。Ⅱ地区では貝塚時代後期までの包含層の記録保存を終えた。面積119m²である。

平成15年2月28日、「瑞慶覧（14）工場建設に係る文化財発掘調査業務委託（その2）」を那覇防衛施設局と締結した。同年3月からオイル汚染部分を避けるかたちで設計変更を行ったⅢ地区的発掘調査準備を開始した。まず、重機によって基地造成土及び近世・近代の耕作土と考えられる第Ⅰ層を掘削した。第Ⅱ層上面を検出した時点で、重機による掘削をやめた。その後、トータルステーションを使ってグリッド設定を実施し、平成15年4月1日からの発掘調査に備えた。

【平成15年度】

平成15年4月1日、すでに締結している「瑞慶覧（14）工場建設に係る文化財発掘調査業務委託（その2）」をもとにⅢ地区的発掘調査を開始した。当該地域は地下水が豊富で基盤が海砂層であるため、沈砂地を設置し調査区の周間に溝を設けて調査区を干上がらせ調査を実施した。

手堀による掘削は第Ⅱ層から始めた。この層は高密度の植物遺体層で、掘削すると赤褐色を呈するが、すぐに酸化して黒色となる層であった。少量ながら中国産の青磁が出土したことからグスク時代以降の層と理解した。

第Ⅲ層の上面を検出した後、調査区の周囲に掘った水抜溝の断面を観察した。この時、第Ⅲ層の下方が第Ⅳ層の上を粒子状に巻き込んでいることがわかった。前年度までの調査では第Ⅲ層は貝塚時代後期の遺物包含層と考えられていたが、このことによって、水田に伴う耕作土の可能性が高いことがわかった。この見解に至ったのは当センターの専門員である瀬戸哲也氏の所見によるところが大きい。さらに断面の観察を進め畦畔の確認をしようとしたが、明確な畦畔や水田面と思われる層が確認できなかったため、検出を諦めて第Ⅲ層の掘削を開始した。とともに、Ⅲ地区は第Ⅳ・Ⅴ層の遺物包含層の調査を目的としていたため、第Ⅲ層にむやみに時間をかけることができなかった。ただし、断面の観察によって第Ⅴ層と第Ⅲ層の境界は水平ではなく所々に畦畔状の高まりをもつことが確認できたため、この高まりを検出することとした。その結果、方形の区画を持った擬似畦畔が検出された。また、この擬似畦畔に沿って50本弱の木杭や擬似畦畔の交点に石が置かれていることがわかった。この調査段階で福岡市教育委員会の山崎純夫氏や（財）大阪文化財センターの江浦洋氏に現場での指導を仰ぎ、多くの所見をいただいた。そのため、より詳細な調査を実施することができた。今回の成果は彼らの所見によるところが大きい。また、神谷厚昭氏にはこの水田遺構の基盤ともなったと考えられる第Ⅴ層の土壤について所見をいただいた。この水田遺構調査では古環境の復元も目的として各種の自然科学分析も実施した。第Ⅴ層直上までの記録保存を行い、水田遺構の調査を終えた。

第Ⅴ層からの調査では、貝塚時代後期と考えられる川跡が検出された。川跡はⅡ地区でも確認されており（この時点ではⅠ地区でも川跡が検出されていたことはわからなかった）。1本の川となっているのかは不明だが堆積状況等から同時期の川と判断できた。川跡の底面までの掘削及び第Ⅴ層の掘削を終え、第Ⅵ層の白砂まで検出した段階で貝塚時代後期の記録保存を終えた。平成15年9月30日、Ⅲ地区における発掘調査はすべて終了した。調査面積は1,313m²である。

Ⅲ地区的発掘調査中である9月より同時にⅡ地区下層の発掘調査を行うため調査区の周囲に網矢板を巡らし安全対策を行なう土留工事を実施した。9月末日に土留工事が終了し、10月1日よりⅡ地区下層の発掘調査を開始した。地下水位が高く網矢板の隙間から水が浸水するため、Ⅲ地区と同様沈砂地を設置し周囲に溝を設けて調査区を干上がらせて調査を実施した。Ⅱ地区下層の調査では、従来のグリッドでは記録保存に支障をきたすことから、長方形の調査区にそった形で、新しくA～Fのグリッドを設定した。調査区の東側に端から端までを網躍する長い壁（東壁）と各グリッドの境界にベルトを残しつつ慎重に掘削を進めた。その結果、海拔0m前後の第Ⅳ層から爪形文土器の包含層が検出され、野国貝塚B地点に次ぐ量の爪形文土器や無文土器と共に、多種多様の貝類遺体やイノシシを中心とした動物遺体が出土した。試掘調査では跡跡の正確が判断できなかったため、各遺物については可能な限り位置と標高を記録した。また、土壤は層序・グリッドごとに10リットル分のサンプルを採取し、発掘調査と同時にフローテーションを行い、植物遺体の回収に努めた。Ⅲ地区的調査と同様に古環境の復元を目的として、各種の自然科学分析を実施した。

平成16年1月31日、Ⅱ地区下層における記録保存を終えた。調査面積282.5m²である。同年2月1日よりⅡ地区に巡らせた網矢板の引き抜き工事を行い、2月29日まで現地の現場事務所にて遺物洗浄等の資料整理を実施した。

【平成16年度】

平成16年、5月30日「瑞慶覧（15）工場建設に係る文化財発掘調査業務委託」契約を締結した。今年度は資料整理を重点的に実施し、平成17年度に報告書を刊行する予定であった。しかし、Ⅰ地区的建設予定地が設計変更されていることが6月に判明した。那珂防衛施設局との協議の結果、Ⅰ地区的設計変更された面積について、追加調査を実施することとなった。

発掘調査は8月1日～9月30までの2ヶ月間実施した。発掘調査では平成11年度に検出された近世・近代の水田遺構と思われる歟の続き等が検出された。また、平成11年度の調査では確認できなかった川跡が検出された。川跡はⅡ地区的発掘調査で初めて認識され、調査によって川跡内の堆積状況がわかった。さらに、平成15年度に実施したⅢ地区的発掘調査でも同様の堆積状況を呈する川跡が検出されたことで、川跡の認識が深められた。そのため、すでに調査を終えているⅠ地区でも堆積状況が似ている場所があり、川跡であっ

た可能性が高いことがわかった。このことを念頭においてⅠ地区の追加発掘を実施した結果、川跡であることが再確認できた。貝塚時代後期までの発掘調査を行い、9月30日に追加分の記録保存を終えた。調査面積は31.5m²である。

平成11年度から平成16年度までの総合面積は2,762.5m²である。本来ならば、このような長期間の調査の場合は、概報等を刊行すべきであるが、当初計画では発掘調査は3ヶ年の事業であり、様々な不足の事態により長期間にわたって実施されることとなり、報告書の刊行が遅れてしまった。発掘調査終了後に平成17年度の報告書刊行に向け資料整理を開始したが、長期間における発掘調査であったため調査担当者が3代にわたり、過去の調査等を取りまとめるのが困難を極めることとなった。まずは層序の統一から始め、遺構図面の整理、遺物の整理・抜き出し・実測を中心的に実施した。

【平成17年度】

平成17年、6月30日「瑞慶覧（17）工場建設に係る文化財発掘調査業務委託」契約を締結した。前年度に引き続き資料整理を実施した。主に遺構図・実測図のトレース、各種遺物の写真撮影、現場写真の抜き出しを行い、報告書刊行のための構成を実施した。

最後に台帳作りを行って、収蔵庫及び記録保存室に収める。

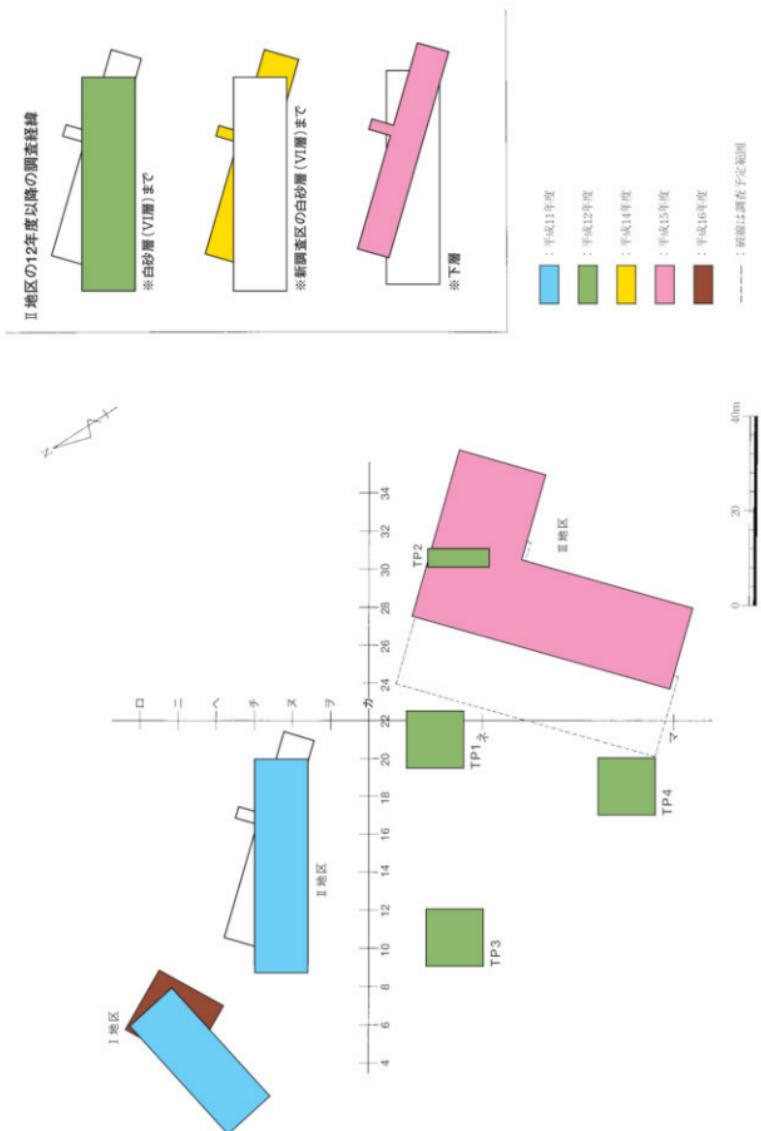


図版1 調査区遠景

第1表 経過一覧

年度	日付	経緯	備考
平成10年度	4月23日	埋蔵文化財包蔵地の保護調整について(報告)	宜教文第16号
		宜野湾市・沖縄県・防衛施設局での協議	
平成11年度	7月6日	「瑞慶覧(11)工場建設に係る文化財発掘調査業務委託」契約締結	
	8月9日	I 地区発掘調査開始	
	3月31日	I 地区発掘調査終了(面積:372m ²)	
	3月	II 地区上層発掘調査開始	
	3月	II 地区一時埋め戻し(面積:495m ²)	
平成12年度	6月15日	「瑞慶覧(12)工場建設に係る文化財発掘調査業務委託」契約締結	
	7月10日	II 地区上層発掘調査再開	
	10月31日	II 地区上層発掘調査終了(面積:495m ²)	
	11月	爪形文土器包含層の発見	
	11月～3月	爪形文土器包含層の範囲確認試掘調査(T.P①～T.P④ 面積:480m ²)	
平成13年度	6月29日	「瑞慶覧(13)工場建設に係る文化財発掘調査業務委託」契約締結	
	9月11日	アメリカ合衆国同時多発テロ	
	12月26日	III地区基地造成土掘削中にオイル汚染土確認→発掘調査の中止	
	3月	III地区オイル汚染土範囲確認調査	
平成14年度	4月	II 地区ガソリンスタンド建設予定地の設計変更	
	9月24日	「瑞慶覧(14)工場建設に係る文化財発掘調査業務委託(その1)」契約締結	
	12月1日	II 地区上層、ガソリンスタンド建設予定地設計変更分の発掘調査開始	
	1月31日	II 地区上層、ガソリンスタンド建設予定地設計変更分の発掘調査終了(面積:119m ²)	II 地区上層終了
	2月	III地区工場建設予定地設計変更	
	2月28日	「瑞慶覧(14)工場建設に係る文化財発掘調査業務委託(その2)」契約締結	
	3月	III地区基地造成土及び第I層掘削	
平成15年度	4月1日	III地区発掘調査開始	
	9月30日	III地区発掘調査終了(面積:1,313m ²)	III地区終了
	9月	II 地区土留工事及び下層(爪形文土器包含層)までの掘削	
	10月1日	II 地区下層発掘調査開始	
	1月31日	II 地区下層発掘調査終了(面積:282.5m ²)	II 地区下層終了
	2月	II 地区鋼矢板の撤去及び埋め戻し	
平成16年度	5月31日	「瑞慶覧(16)工場建設に係る文化財発掘調査業務委託」契約締結	
	8月1日	I 地区設計変更部分の発掘調査開始	
	9月31日	I 地区設計変更部分の発掘調査終了(調査面積:31.5m ²)	I 地区終了
平成17年度	6月30日	「瑞慶覧(17)工場建設に係る文化財発掘調査業務委託」契約締結	
	3月31日	報告書刊行	

第1図 年度別調査区域



第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

新城下原第二遺跡は沖縄県宜野湾市字安仁屋前原544番地及びその周辺に所在する。現在は在沖米海兵隊基地キャンプ瑞慶覧内となっている。那覇より58号線を北上し、北谷町北前ゲートから基地内に入るとすぐ前面に広がっている。遺跡範囲の大半が宜野湾市に所在するが、一部北谷町にまたがる。宜野湾市教育委員会による分布調査の結果明かとされた遺跡で、今回の事業に先立ち那覇防衛施設局から埋蔵文化財について有無の照会を受けて同教育委員会が実施した試掘調査の結果、北谷町にもまたがることが判明した。

遺跡は沖縄本島中部に所在し、北は嘉手納町、東北は沖縄市・北中城村、東は中城村、東南は西原町、南は浦添市の2市2町2村に接しており、西側は東シナ海に面している。

遺跡周辺の地形は北谷町の白比川河口を中心として、海岸線が弓なりに湾曲し、その後背には低地が扇状に広がり、東側の丘陵へと続く。海岸から沖に向かってはイノーと呼ばれる平坦な礁原が広がり、サンゴ礁がよく発達しているが、近年の開発により埋立地が広がり変貌を遂げている。かの有名なインディアン・オーラー号はこの発達したルーフにおいて座礁・沈没した。遺跡はこのような海岸低地に立地し、第四紀完新世の沖積層からなる。後背に琉球石灰岩からなる丘陵があり、近くを普天間川が流れしており、シリカーカー・ヒージャーガー・ナカマグワーナヌースカーラー・カーグラー等の湧水も豊富である。

現在の遺跡はキャンプ瑞慶覧基地造成土に覆われており、標高は中心のⅡ地区を基準として約4.5mである。時期別の遺跡の標高は、旧表上はおよそ約4m、貝塚時代後期は約3m、貝塚時代早期は約0mである。基盤はクチャ層で、最も深いところでは-3.5mで確認された。琉球石灰岩は調査区の最も海側であるⅠ地区で確認されている。

第2節 歴史的環境

本遺跡の周辺は最も古い時代では、「大山洞人」と呼ばれる大山洞穴で確認された男性の下顎骨が有名である。貝塚時代前期から後期の遺跡は宜野湾市の西側中位石灰岩段丘面、比屋良川・普天間川流域、海岸低地に集中して確認され、内陸の高位段丘面は僅かである。今回の調査によって出土した爪形文土器は宜野湾市では始めて確認された最も古い土器形式であり、宜野湾市の歴史に新たな1ページを加えるものである。爪形文土器発見例は、平成17年度に現地説明会が行われた那覇市の箕輪原C遺跡の事例を加えて12遺跡となり、当該時期の様相がわかりつつある。

北谷町では、近年注目を浴びている伊礼原C遺跡から爪形文土器をはじめ条痕文土器や室川下層式土器、曾畠式土器等の貝塚時代早・前期段階の土器が多量に出土している。残念ながら新城下原第二遺跡では曾畠式土器が確認されていないが、室川下層式土器や条痕文土器が僅から見られるため、近くに同様の遺跡が存在する可能性がある。本遺跡も伊礼原C遺跡も水源が豊富な海岸低地に立地し、場所も近く共通な要素を多くもつことは注目される。

次の時代では伊波・萩原式土器や仲原式土器が貝塚時代後期の川跡やその周辺から少量出土している。周辺やその丘陵には喜友名遺跡群・新城下原遺跡・普天間後原遺跡等が存在することから、あるいはこのような遺跡から流れてきたものの可能性もある。

貝塚時代後期は多量の遺物が出土しており、イモガイ集積も確認された。新城下原第二遺跡が所在する低地付近には北谷町側で大道原A・B遺跡・玉代勢原遺跡・後原遺跡等の遺跡が確認されており、この沖積地一帯が貝塚時代後期の絶好の立地条件であったことが伺える。

グスク時代では本遺跡からは水田遺構が確認された。この時代の広大な沖積地から水田遺構が確認されたことは稀有な例と思われる。周辺では新城下殿遺跡・安仁屋トゥンヤマ遺跡・喜友名遺跡群が存在するため、あるいはこのような遺跡を形成した人々によって形成されたものかもしれない。

近世・近代を経て、戦前までこのあたり一帯は水田や畑が盛んに行われた。本遺跡でも、グスク時代以降は一度使用されない時期をはさんで、基地造成が実施される直前まで耕作土層が厚く堆積して確認されている。

このように、本遺跡は貝塚時代早期、貝塚時代後期、グスク時代の耕作地、近世・近代の耕作地、と長期的に人々の活動の場となっていたことがわかった。



第2図 沖縄本島の位置



貝塚時代早期（前Ⅰ期）の遺跡と位置図

- 1. 鹿島地大室原貝塚（名護市）
- 2. 仲泊遺跡（恩納村）
- 3. 大久保跡遺跡（波谷村）
- 4. 渡良知東原遺跡（波谷村）
- 5. 野田貝塚群B地點（喜平町）
- 6. 伊礼原C遺跡（北谷町）
- 7. ヤブツ糞穴遺跡（うるま市与那城）
- 8. 城間古墓群（瀬長市）
- 9. ナヂフチャ糞穴遺跡（瀬長市）
- 10. 鮫越原遺跡（波賀敷村）
- 11. 黒磯原C遺跡（那覇市）
- 12. 新城下原第二遺跡（宜野湾市）



★ 貝塚時代早期（前Ⅰ期）

▲ 貝塚時代前期（前Ⅱ～V期）

● 貝塚時代後期

■ グスク時代

× 近世・近代

「後兼久原遺跡」2003 北谷町教育委員会及び
「宜野湾市文化財情報図」1991 を参考に作成

第3図 周辺の遺跡分布

周辺遺跡の凡例 (1 ~ 45 は北谷町・46 ~ 60 は宜野湾市の遺跡)

- | | | | | |
|-------------------|--------------------------------------|---------------------|----------------|-------------|
| 1. 砂辺サークバル貝塚 | 2. 砂辺サークバル遺跡 | 3. 砂辺貝塚 | 4. 砂辺ウガン遺跡 | |
| 5. カーシーノボントン遺物散布地 | 6. クマヤー洞穴遺跡 | 7. 浜川千原岩山遺物散布地 | | |
| 8. 砂川ウガン遺跡 | 9. 上・下勢頃区古墓群 | 10. 伊礼原A遺跡 | 11. 伊礼原B遺跡 | 12. 伊礼原C遺跡 |
| 13. 伊礼原D遺跡 | 14. 伊礼原E遺跡 | 15. 伊礼伊森原遺跡 | 16. 大作原古墓群 | 17. 千原遺跡 |
| 18. 平安山原A遺跡 | 19. 平安山原B遺跡 | 20. 桑江ノ殿遺物散布地 | 21. 桑江遺物散布地 | |
| 22. 小堀原遺跡 | 23. 後兼久原遺跡 | 24. 前原古島A遺跡 | 25. 前原古島B遺跡 | 26. 伊地差久原古墓 |
| 27. 前原古墓群 | 28. 池グスク | 29. 吉原東角双原遺物散布地 | 30. 白比川河口遺物散布地 | |
| 31. 北谷城 | 32. 北谷城第7遺跡 | 33. 北谷番所址 | 34. 山川原古墓群 | 35. 玉代勢原遺跡 |
| 36. 長老山遺物散布地 | 37. 稲千原遺跡 | 38. 北谷城遺跡群 | 39. 後原遺跡 | 40. 横瀬原遺跡 |
| 41. 大道原A遺跡 | 42. 大道原B遺跡 | 43. インディアン・オーク号の座礁地 | 44. 塩川原遺跡 | |
| 45. 上勢頭古墓群 | 46. 新城下原第二遺跡 (平成 11 ~ 16 年度の発掘調査の位置) | | | |
| 47. 新城下殿遺跡 | 48. 新城下原遺跡 | 49. 安仁屋トゥンヤマ遺跡 | 50. 普天間下原洞窟遺跡 | |
| 51. 普天間グスクニー遺跡 | 52. 普天間フィールー丘陵古墓群 | 53. 普天間カンジャースウイー古墓群 | | |
| 54. 普天間後原遺跡 | 55. 普天満宮洞穴遺跡 | 56. 野嵩ウガンヌカタ遺跡 | 57. 伊佐後原第二遺跡 | |
| 58. 伊佐後原第一遺跡 | 59. 喜友名遺跡群 | 60. 喜友名後原・勢頭原丘陵古墓群 | | |



第4図 調査区位置

第3章 調査区と基本層序

第1節 調査区とグリッドの設定

今回記録保存をすることとなった提供施設の設計では、3箇所においてガソリンスタンドや車両整備工場を建設する計画があった。そのため、それぞれの建物建設場所を便宜的にI地区からIII地区と呼称した。調査は総面積2,762.5m²で、内訳はI地区403.5m²、II地区上層614m²、II地区下層282.5m²、III地区1,313m²、T.P.①144m²、T.P.②48m²、T.P.③144m²、T.P.④144m²となっている。II地区下層はII地区上層に、T.P.②はIII地区に含まれるため、総面積には加算していない。

グリッドはII地区的当初設計を基準とし、I地区～III地区までの調査区全体を網羅するように4mピッチで北東・南西のラインを「イロハニホヘト…」で表現し、北西・南東ラインを「1 2 3 4 …」の数字で表現した。そのため、I地区とIII地区は調査区に対して斜めのグリッドとなった。

ただし、II地区下層の爪形文土器包含層の調査からはこのグリッドを使用せず、調査区の南側を基準としてA～Fまでの8m×6m（調査区の幅）を単位とした全く別のグリッドを設定した。これは既存のグリッド設定では長方形の調査区に対して斜めに畦を残すしかなく、調査を進める上で支障をきたす恐れがあったからである。

第2節 基本層序と遺跡の概要

本遺跡は先史時代から近世・近代までの複合遺跡である。また、低湿地遺跡のため層序が複数確認された。第I層～第XVII層まで確認され、第XVII層は琉球石灰岩、第XVIII層はクチャ層となっている。琉球石灰岩は海側であるI地区で確認され、II・III地区はクチャとなっている。爪形文土器包含層は第IV層で、II地区で確認された。貝類遺体が最も多く、次いでイノシシ骨を中心とした動物遺体、そして爪形文土器と無文土器がそれに続き、石器や貝製品・骨製品は僅かに確認された。爪形文土器の時期の後、第V・VI層は海砂・白砂が2.5m以上堆積しており、その地域一帯が一時期海となっていた（海進）ことがわかる。海が再び沖に移動した後（海退）、第V層からは陸性の砂が堆積しており、貝塚時代後期の遺物を多量に出土する。阿波連浦下層式土器からアカジョンガ式土器の前段階と考えられる土器群の時期まで確認されており、最も出土量が多かったのは浜屋原式土器である。また、この時期には川が流れていることが確認された。III地区第III層からはグスク時代と考えられる耕作土が確認された。貝塚時代後期の包合層である第V層に影響を与えており、擬似畦畔による区画が残っていた。第II層は黒色で水分を多量に含んだ植物遺体層であり、I地区からIII地区まで広く確認されたが、最も高密度で堆積しているのはIII地区である。細蓮弁文碗青磁が数点確認された。水田耕作の後、この地域一帯が湿地となっていたことを示すと考えられる。第I層は耕作土であり、近世・近代になると再び水田や畑が営まれていたことを示す。

以下、各層の状況を述べる。

第I層： 近世から近代までの耕作土。I a層とI b層に細分された。本稿における記述では上面・下面としていることもある。イネのプランツ・オパールが僅かに検出された。以下細分された各層序について述べる。

a層…暗褐色土（10Y3/4）。粘性でしまりがある耕作土層。I地区～III地区まで全体で確認できた。II地区では上面でキャンプ瑞慶覧基地造成直前のキャタピラ痕や道路跡が検出され、戦争時のものと思われる銃身が出土した。

b層…I地区～III地区で確認された。I地区・II地区では水田跡の畦畔が検出された。遺物は近世・近代の沖縄産陶器、本土産磁器などが出土した。I地区では第I層下部で琉球石灰岩の岩盤が確認でき、上面で炉跡が検出された。他、後期土器や瓦、沖縄産陶器、本土産磁器等が混在して出土している。近世以降の耕作土層である。

第II層： オリーブ黒色土（2.5Y3/1）。ピート（植物遺体）が濃い密度で堆積し土壤化した層。I地区～III地区で確認された。粘性が強く、草など湿地に生息する植物遺体が顕著にみられた。細蓮弁文碗が出土した。土壤を分析した結果、880±40BPの数値が得られた。イネのプランツ・オパールが僅かに検出された。

第Ⅲ層： 黒褐色シルト（2.5Y3/2）。I 地区～Ⅲ地区で確認されたが、粘性が強い場所があるなど堆積状況に違いが見られたため a～e に細分した。a～c 層はⅢ地区、d 層は I 地区、e 層は II 地区で確認された層である。水田耕作土と考えられ、下層（第Ⅳ・V 層）を巻き込み搅拌する状況が確認できた。第Ⅲ層直上では刀子が出土したが、残念ながら保存状態と保存方法が悪かったため、ボロボロに崩壊してしまった。おおいに反省する。貝塚時代後期の遺物を主体的に包含する層だが、グスク時代において水田耕作土となったと考えられる。以下、細分した各層について述べる。

a 層…Ⅲ地区で確認された層で下層（第V層）の巻き込み（以下、搅拌と記述する。）が若干見られる水田耕作土。貝塚時代後期の遺物を少量包含する。a 層の掘削中、水田耕作時に使用したと考えられる木杭が多量に確認された。この木杭は第V層に残る疑似畦畔を中心として確認された。この木杭を分析した結果、 940 ± 40 BP の数値が得られた。

b 層…Ⅲ地区で確認された。下層の搅拌が顕著に見られる水田耕作土。イネのプラント・オパールが僅かに検出された。貝塚時代後期の遺物を少量包含する。直上で検出された炭化材を分析した結果、 1090 ± 40 BP の数値が得られた。

c 層…Ⅲ地区で確認された。b 層と同じで搅拌が見られるが、第V層ではなく川跡3 の最上層の覆土である灰色粘土層を巻き込むため b 層とは区別した。

d 層…10cm程度の石灰岩が混じった粘性の強い層。貝塚時代後期の遺物を含む包含層で貝溜まりが検出される場所もあった。しかし、広範囲には広がらず、確認できない場所もあり、近世の耕作の時に削られた可能性もある。I 地区で確認された層。

e 層…第IV層及び第V層を巻き込む搅拌が若干見られる水田耕作土。貝塚時代後期の遺物を包む包含層である。II 地区で確認された。

第IV層： 黒褐色細砂（2.5Y3/1）。色は上層のⅢ e 層に、質は下層のV層に酷似している。貝塚時代後期の遺物を多量に包含する層である。II 地区で確認された。

第V層： 暗オリーブ細砂（5Y4/4）。ニービが風化し、流されて堆積した層と考えられる（神谷厚昭氏のご教授による）。水ですぐ削れてしまうほど柔らかい。Ⅲ地区から I 地区に向かって薄くなる。Ⅲ地区的直上では疑似畦畔が区画と規則性を持って検出された。水田耕作時に使用したと思われる多量の木杭も確認された。貝塚時代後期の遺物を多量に包含する層である。TP③からは開元通宝が出土した。

第VI層： 白砂層。I 地区～Ⅲ地区の全地区で確認された。海岸砂丘砂層と思われる。海進に伴って地域一帯が一時期砂丘を形成していたことがわかる。基本的に無遺物層だが、貝塚時代前・中期のものと思われる少量の土器片が混入している。

第VII層： 海砂層が厚く堆積する。第VI層は砂が主体であることに対して、第VII層は珊瑚のバラスや貝類、砂利が主体となる。I 地区～Ⅲ地区で確認された。この地域一帯が一時期海進し、海となっていたことを示すと思われる。無遺物層。

第VIII層： オリーブ灰砂層（5GY5/1）。II、Ⅲ地区で確認された。砂層で貝、木片が若干出土する。無遺物層。海水の影響を受ける汽水域となっていたと考えられる。第VIII層上面で口が閉じた状態のシレナシジミが多数検出されたが、この頃もぐりこんだ可能性が高いと思われる。堆積するチドリマスオを分析した結果、 5530 ± 50 BP の数値が得られた。

第IX層： 爪形文土器・無文土器包含層。II 地区で調査を実施した。クチャ塊が混じる。爪形文土器や無文土器に伴い、多量のイノシシ骨を中心とした動物遺体や、シレナシジミ、夜光貝、サラサバティ、牡蠣等の多種多様の貝類遺体が出土した。質の違いや混入物等から a、b、c の 3 層に細分した。以下、細分した各層について述べる。

a 層…オリーブ灰色砂質シルト層（2.5YG）。3 cm 程度のクチャ塊や、貝の生痕により第VIII層の砂、5 mm 程度の礫が混じっている。多量の木片が出土した。爪形文土器や動物遺体、貝類遺体等の遺物は a 層の下部から徐々に多く出土はじめる。

b 層…灰色砂質シルト層（7.5Y5/1）。a 層に対して若干粘性が強く、第VIII層の砂は混じらなくなる。この層が遺物出土量としては圧倒的に多い。また、木幹が確認されており、木幹を中心として根が縱横無尽に張り巡っていた。イノシシの骨を分析した結果、 6080 ± 50 BP の数値が得られた。

c層…黒褐色シルト層（7.5YR3/2）。時間が経ち乾燥すると黒褐色（7.5YR3/1）に変色する。植生痕が全体的に顕著に見られ、その覆土にb層の砂、灰色粘土（7.5Y7/1）が角柱状に層の約半分の割合で入っている。遺物もa、b層に比べると極端に減少するが爪形文土器・無文土器、貝類遺体、動物遺体ともに少量出土した。

第X層： 灰色細砂層（7.5YR5/1）。II地区で確認された。しまりがなく混入物もない。無遺物層。汽水域的な環境であった可能性が高い。

第XI層： 褐灰色シルト層（10YR4/1）。II地区で確認された。木片を含む他、3～5cm程のクチャ塊が混じっている。無遺物層。

第XII層： しまりのない黄・灰色系の細砂で、無文土器1点、動物遺体が出土した。II地区で確認された。堆積状況から2層に分け、以下、各層について述べる。

a層…灰オリーブ細砂（7.5Y5/2）に褐色粘土粒（10YR4/4）、クチャ塊が混じる。しまりはない。直下で無文土器が1点出土した。

b層…灰オリーブ細砂（7.5Y5/2）。しまりはなく混入物も入っていない。

第XIII層： 灰色、褐色系の粘土層で、混入物や質、色の違いでa～eの5層に細分した。層全体としては水湿地的で還元的な環境であったと思われる。II地区で確認された。以下、細分した各層について述べる。

a層…灰色質シルト（5GY4/1）。1cm未満の貝を含み、横方向にラミナ状に砂利が見られ、均一にクチャ塊が混じっている。また樹根痕と思われる茶褐色土の堆積が所々見られた。

b層…黄灰色粘質シルト層（2.5Y4/1）。しまりがあり、2～3cm程の軽石、木片が混じっている。また若干クチャ塊も見られた。

c層…黄灰色粘質シルト層（2.5Y4/1）。b層と比べ粘質が強くなる。Aグリッドの第XIII c層上部では、イノシシの骨が集中して出土した。イノシシの骨を分析した結果、6410±50BPの数値が得られた。

d層…灰オリーブ色粘土層（5Y4/2）。無遺物層。

e層…灰色粘土層（5Y4/1）。5mm以下のクチャ塊、木片が混じっており、顕著にカワニナが入っているのが確認された。淡水性の水湿地的な環境と考えられる。

第XIV層： オリーブ黄色粘土（7.5YR6/3）及びクチャ塊混灰色粘土層（7.5Y4/1）。基盤層であるクチャの直上で確認された層。II地区で確認された。標高が高い場所（A～Cグリッド）ではイノシシの骨が多量に出土した。陸域で好気的な環境と考えられる。Aグリッド出土のイノシシの骨を分析した結果、6020±50BPの数値が得られてしまった。この結果については、地層の疊重関係と逆転しており、検出時の層序判断に誤りがあった可能性がある。

第XV層： 褐色粘土層（7.5YR4/3）。II地区で確認された。標高が高い場所（C・Bグリッド）でクチャの隙間に堆積していた層。動物遺体が出土した。

第XVI層： 地山。琉球石灰岩。I地区的第I層で確認された。

第XVII層： 地山。クチャ層。I地区的半分、II・III地区で確認された。

川跡： I～III地区でそれぞれ1つずつ検出されており、I地区は川跡1、II地区は川跡2、III地区は川跡3と呼称した。川跡は上層とは異なる土が堆積し、1層～3層に分割される。覆土からは後期土器が主体となって出土する。川跡2の底からはイモガイの集積構造が2基検出された。川跡1の2層上面からは後述する貝塚時代後期土器Ⅳ類（大当原式土器とアカシャンガー式土器の中間的な様相）がつぶれた状態で出土した。遺物は周辺の第Ⅲ～V層に比べて比較的大型の土器片が出土した。また、遺物は磨耗をほとんど受けておらず状態が良い。川跡内からは多数の海性貝類が出土しているが、これらは貝塚時代後期に捕獲され食用とされた貝類と考えられる。以下、各層について述べる。

1層…灰色粘土層。III地区のみで確認された層で、川跡3の最上面に堆積している。不純物がほとんどふくまない粘土層にカワニナが多量に含まれている。第Ⅲ層における耕作の結果、巻き込まれている。

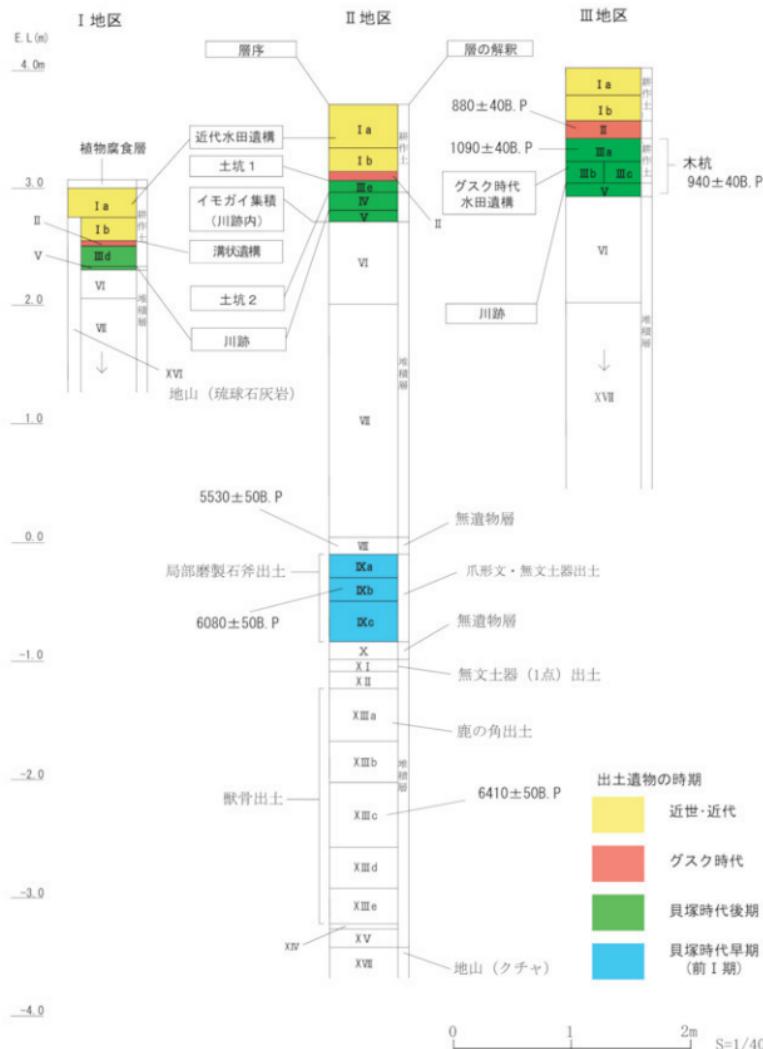
2層…黄褐色混土砂利層。I地区・II地区的川跡1・2の最上面の層である。色調や砂の粒子からV層が混じって出来た層だと思われる。

3層…黒褐色混砂利層。II地区的川跡2でイモガイ集積が2基検出された。また、比較的保存状態の良い後期土器や貝類遺体が出土した。

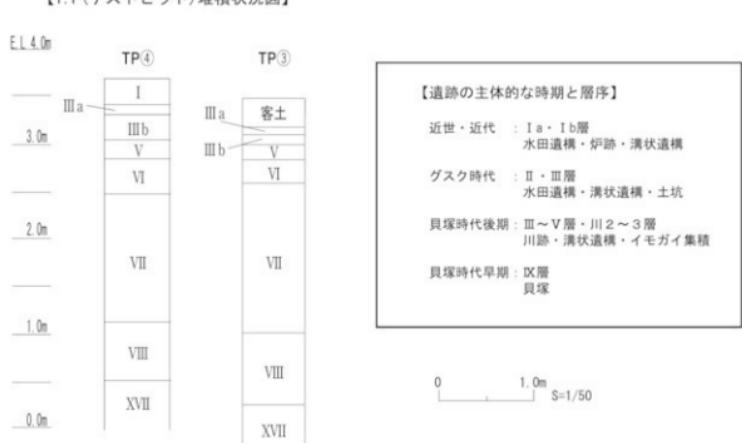
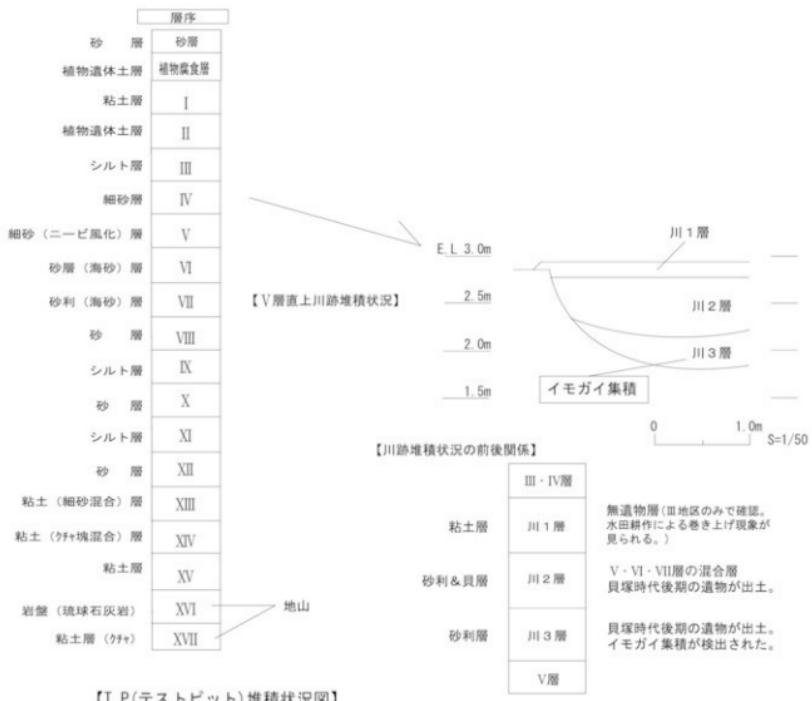
第5図 調査範囲とグリッド設定



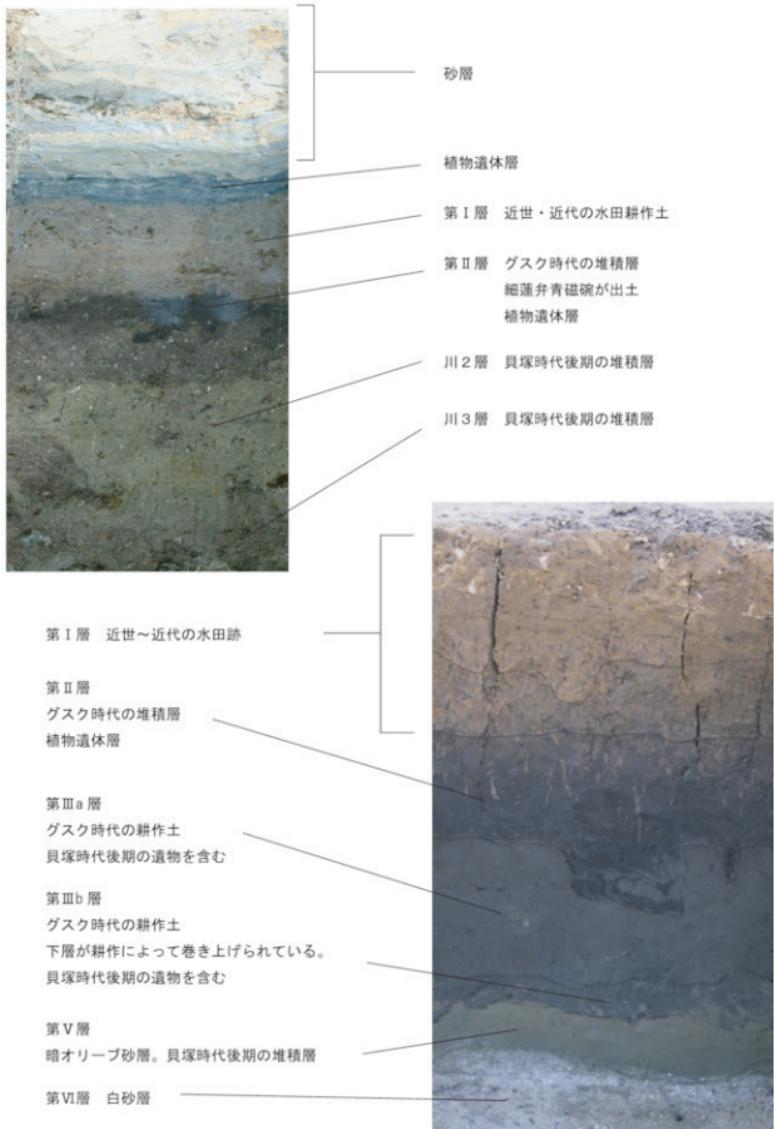
新城下原第二遺跡（I～III地区）基本層序

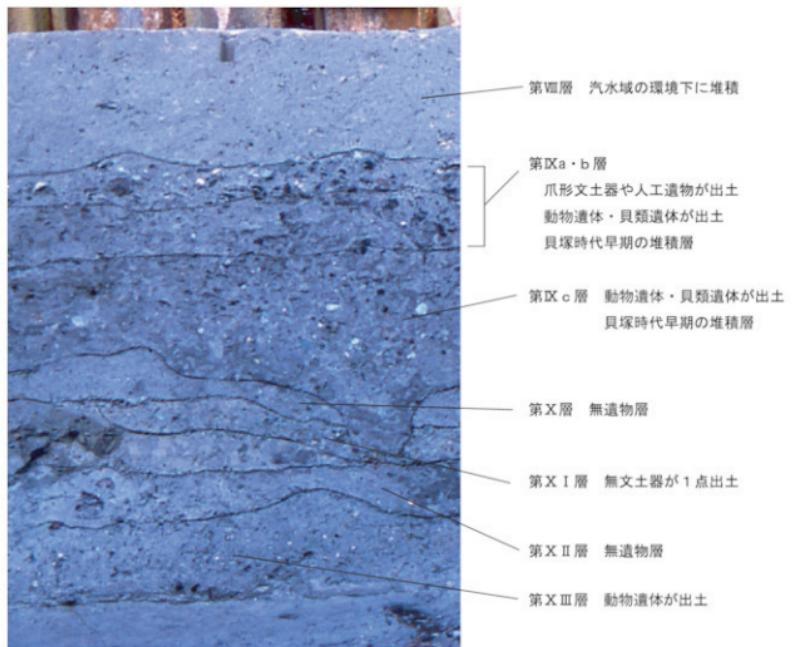


第6図 基本層序模式図 i (I地区～III地区)



第7図 基本層序模式図 ii (川跡及びテストピット3・4)





図版3 基本層序 ii

第2表 遺物出土状況

出土地	種類	數	陶質土器	鐵器	骨器	蚌器	漆器	玻璃	木器	貝塚時代小字層					中期時代小字層					瓦器										
										新石器	中石器	後石器	不明	I	II	III	IV	I~III	IV	伊達式	天王式	須文	印文	土器	石器	瓦器	瓦器	瓦器		
1号		171	5	5	1					2	60	16	8	673	122	3	1						1	26	1	26	2	1	966	
日暮		3	5							3				2														14		
五瀬		10								5	2	1	36	113	22													177		
田瀬										1				22	2	1												26		
田瀬										1																		1		
田瀬										20	10	1	126	3							1							161		
田瀬										1	5	26	1	12	286	6	4											344		
田瀬										1	1	41	6	56	828	20	31											996		
川前瀬	(1863)	1																											1	
川前瀬	(1861)									3	14	2	1	1							1								24	
川前瀬	(1862)									9	55	9	11	132	8	4				2								227		
川前瀬	(1863)									12	4	2	69	4	4					1								86		
川前瀬	(1861)									2	18	103	61	15	496	5	1	4	16		7	5	2	3	2	278				
川前瀬	(1862)									4	65	7	10	186	1	3			1								4			
川前瀬	(1863)										1			2														0		
V層		20								1	10	214	36	74	947	19	10	1	6	1	1	4	2	1	2	1	1360			
V層		3								2	5	1	11														22			
V層																													0	
漆器																													0	
玉器																													128	
玉器																			22	2	2	2	2	2	2	2		33		
玉器																			3									6		
玉器不明																			1									15		
X層		1	26	1						2	1	6	57	7	17	302	10	6	1	14	6	9	2	1	2	1	1	1		
層不明		1	9	49	1	2	2	5	67	153	243	427	88	66	6	14	125	46	38	12	3	14	24	11	6	1	2	12	5	
合計		207	5	9	49	1	2	2	5	67	153	243	427	88	66	6	14	125	46	38	12	3	14	24	11	6	1	2	12	5

第4章 遺構

新城下原第二遺跡は複数の時期によって形成された複合遺跡であり、近世・近代から貝塚時代早期の爪形文土器の時期まで遡る。確認された遺構とその時期は以下のとおりである。

(1) 戦前・戦後 → 第1節

キャンプ瑞慶覧基地造成前のキャタピラ痕、道路跡・・・(II地区第I層上面)

(2) 近世・近代 → 第1節

畦の検出による水田跡・・・(I地区第I層下面、II地区第I層下面)

溝状遺構・・・(I地区第I層下面)

畝跡・・・(I地区第I層)

(3) ゲスク時代 → 第2節

耕作土の確認・・・(III地区第III層)

擬似畦畔の検出による水田跡の区画・・・(III地区第V層直上)

(4) 貝塚時代後期 → 第3節

川跡1・・・(I地区第V層上面で検出)

川跡2・・・(II地区第IV層上面で検出)

イモガイ集積・・・(II地区川跡底面)

川跡3・・・(III地区第V層上面で検出)

(5) 貝塚時代早期 → 第4節

貝塚・・・(II地区第VI層)

今回の調査によって把握された情報をもとに本遺跡の形成過程を概観する。基盤には琉球石灰岩がI地区の一部でのみ確認され、その他II地区の残り、III地区はクチャである。基盤の地形はクチャ層(第XⅥ層)で、山側であるIII地区からI地区に向かって傾斜していく。琉球石灰岩(第XⅥ層)はI地区的海側で第I層下面から確認される。この地域は陸域となったり水域となりたりを繰り返しつつ、約6,000年にはII地区及びその周辺を中心にして爪形文土器包含層(第VI層)が堆積する。爪形文土器包含層は調査の結果、海岸近くの林縁部に形成された貝塚と考えられる。その後、海進が起こり、地域一帯は汽水域や海・海岸(第Ⅲ層～第Ⅳ層)となった。遺構は確認できなかったが、第VI層からは貝塚時代前期・中期の伊波式土器や仲原式土器等が少量出土した。海退後、地域一帯は再び川が流れようになり(川跡1～3)山砂の堆積とともに貝塚時代後期の遺物を包含する層が形成される(第V層・第IV層)。ゲスク時代になると豊富な水源と広い沖積地を利用して水田が営まれるようになる(第III層)。この時の耕作によって第V層に擬似畦畔が残された。その後、何らかの理由により水田は廃棄され地域一帯は湿地となった(第II層)。近世・近代になり再び水田や畠が営まるようになった(第I層)。

ゲスク時代と考えられる水田跡について、このような広い面積の沖積地で確認されたことは県内で初めての事例であり、今後注目される成果と考えられる。

また、爪形文土器包含層は近年県内でも少しずつ事例が増えてきており、今回の成果と合わせて貝塚時代早期の歴史・文化の復元に大きく貢献するものと思われる。遺構は確認できなかったが、散布状況を図化した。

以上のことと踏まえた上で、それぞれの遺構について各節毎に述べる。

第1節 戦後・近世～近代

II地区の発掘調査によって、基本層序の第I層上部より、戦後の基地造成直前と考えられる遺構が確認された。表土及び基地造成土をバックホウによって掘削し、手堀によって掘削を開始すると、明確なキャタピラ痕や道路が確認された。

第I層上部の調査終了後さらに掘削を進めると、I地区及びII地区において水田と考えられる何本かの畦畔が確認された。また、I地区からは石組みの畝跡も検出された。

1. 基地造成直前（第8図）

キャタピラ痕

キャタピラ痕は同じ場所を何度も通ったようで、何重も重なった状態で検出された。その跡が明確に残っている場所もあれば、わずかに痕跡が残るだけの場所もある。戦後、基地を建設する際の工事によって残った跡と考えられる。

道路

道路と考えられる遺構は、土盛によって周囲より高いマウンドを造成しており、断面台形状を呈する。斜面の法面には石積みをつくって補強している。道幅は頂部が約1mで底面の幅は約2.3mである。保存状態が悪く、石積みが残っている場所は僅かであった。戦前、この周囲にこのような道路が通っていたことはわかった。後述するように、近世～戦前においてこの沖積地一帯では水田や畠作が行われていたことから、農業用に使用する道路として整備されたものであるかもしれない。

銃身

戦時に使用したと思われる銃身そのものが検出された。この銃身が埋められたものであるのか、そのまま放置されたものであるのか確認することはできなかった。

2. 近世～近代（第9図～第11図）

水田遺構

第9図はI地区及びII地区の第I層下部で確認された水田遺構と併列の検出状況である。水田遺構と考えられる畦畔はI地区及びII地区で確認した。III地区においても、同様の耕作土が存在していたが、調査期間の関係上精密な発掘調査を実施することができなかつたため、断面によって観察した。

I地区で検出された畦畔とII地区で検出された畦畔は方形の規格性を持って同じ方向に構築されていることがわかる。

（1）I地区（第10図～第11図）

I地区では表土及び基地造成土の掘削後、調査区の西側で琉球石灰岩の岩盤がすぐに検出された。調査区の東側は耕作土となっており、南東から北西に走る幅広の大きな畦畔と、それに直角して南西から北東に走る幅が狭く小さな畦畔が確認された。

耕作土の上には砂層が厚く堆積しており、同層からは多量の瓦溜りが確認された。この層は基地造成直前か基地造成によって搅乱された層と考え基本層序に加えていい。

この層を掘削すると周辺の水位が高いせいか保存状態が良好な植物遺体層が検出された。植物遺体層は粘質で多量の水分を含む黒色である。植物の繊維が良く残っており、検出すると水分が蒸発してすぐに赤褐色に変化してしまう。そのため、変化前の状態を全体的に検出して写真記録を残すことが困難だったことから、一部づつ検出し、すみやかにその色調等の状態を写真記録に収めた（巻頭図版参照）。

第11図はI地区の水田遺構検出状況である。植物遺体層を掘削すると前述した明確な畦畔が確認できた。南東から北西に走る幅広の大きな畦畔は、幅約75cmで、直角に走る小さな畦畔を境に、南東側及びそれと対角する北東側の脇に溝が掘られている。この溝が畦畔の造成時に意図的でなく掘られたものか、意図的に掘られたものかは判断できない。

また、直角に走る小さな畦畔との交点付近には大型の石がいくつか置かれていた。さらに、畦畔の北東側脇からは10本の木杭（①～⑧・⑩・⑫）及び1本の鉄杭（⑨）が、刺さった状態で確認された。

この畦畔と直角して南西から北東に走る幅が小さな畦畔の幅は約50cmで、木杭は大きな畦畔と比べて少なく、南東側の脇から1本（⑪）確認されたのみである。

（2）II地区（第12図）

第12図はII地区第I層下部で確認された水田遺構と考えられる畦畔である。前述した基地造成直前と考えられるキャタピラ痕や道路のさらに下部から検出された。

調査区の北西側で検出された畦畔は、L字に曲がっており、南西から北東に走る畦畔の脇はI地区で確認された幅広の畦畔と同様に小さな溝が掘られている。この溝は畦畔の造成時に意図的でなく掘られたものか、意図的に掘られたものかは判断できない。畦畔の幅は南西から北東に走るものが約90cmで、南東から北西に走るものが約120cmとなっており、やや広い。

調査区の南東側ではT字状の浅い溝状遺構が確認された。この溝状遺構の、南西から北西に走る溝の中央には小さなマウンドが検出されが、これが畦畔の機能をもっていたのかどうか判断できなかった。しかし、溝状遺構内のマウンドは調査区の北西側で確認された畦畔と比較すると、溝やマウンドの向きが方形の規格性を持っているように思われる。

溝状遺構

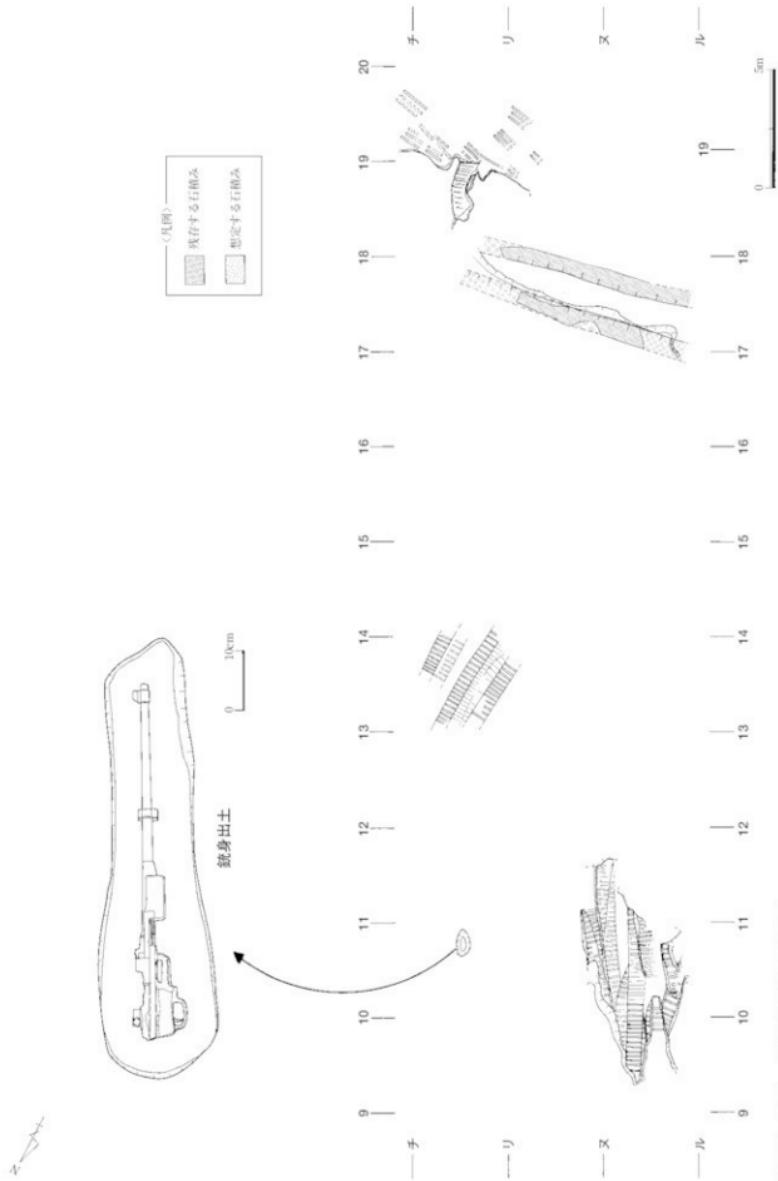
第10図はⅠ地区の調査において検出された溝状遺構である。L字に曲がっており、同時に検出された畦畔と方向性が同じ規格を持つことから、水田遺構に関係する遺構とも考えられる。

炉跡

第9図はⅠ地区の南西側で確認された長方形規格の石組炉跡である。縦215cm×横150cmの規模で砂利を底部に敷き詰め、周囲に石を組んで構築している。燃焼によって底部がなかり硬質化しており、多量の炭が確認された。周辺では耕作土が確認できなかったため、水田耕作を営んでいる頃に同時に使われていた炉跡と考えられる。

第13図は第Ⅰ層の調査に伴って出土した遺物を地区毎に分割して掲載したものである。番号は後述する遺物の章で掲載した番号と同じである。今回図化しなかった沖縄産陶器を始め、陶質土器や中国産青磁の瓶の耳・細連弁文碗の腰部、中国産の青花、貝塚時代後期や中期土器、ゴホウラ製の貝輪、円管状土製品、黒曜石やチャートの石鎌、石斧等が混在して出土した。貝塚時代中期については今回の発掘調査では明確な包含層が確認されておらず、周辺から流入したものと考えられる。青花はⅠ地区・Ⅱ地区で確認されたのみである。Ⅲ地区ではバックホウによって第Ⅰ層を掘削したこともあり、遺物は得られなかった。

第8図 近代～戦前の遺構（Ⅱ地区）



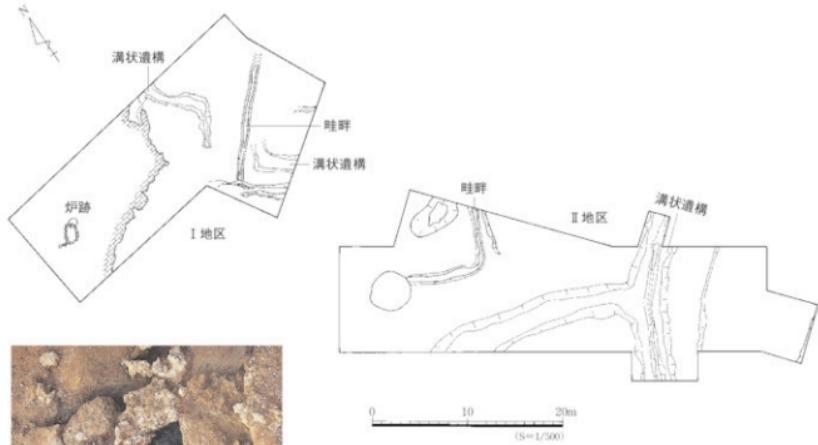


上 キャタピラ跡検出状況（I地区第Ⅰ層上面）



下 銃身検出状況（I地区第Ⅰ層上面）

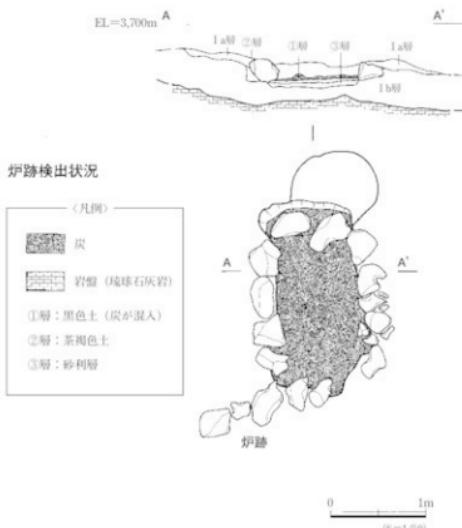
図版4 近世・近代の調査 i



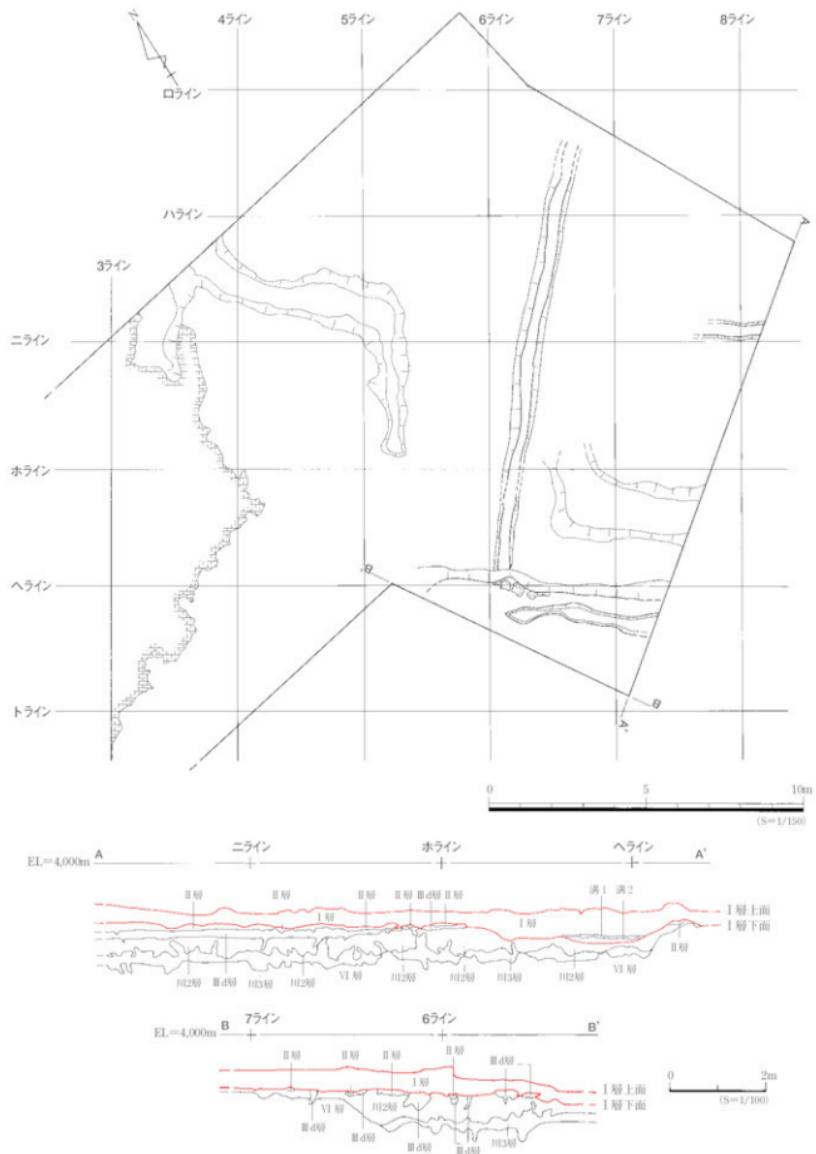
図版5 炉跡検出状況



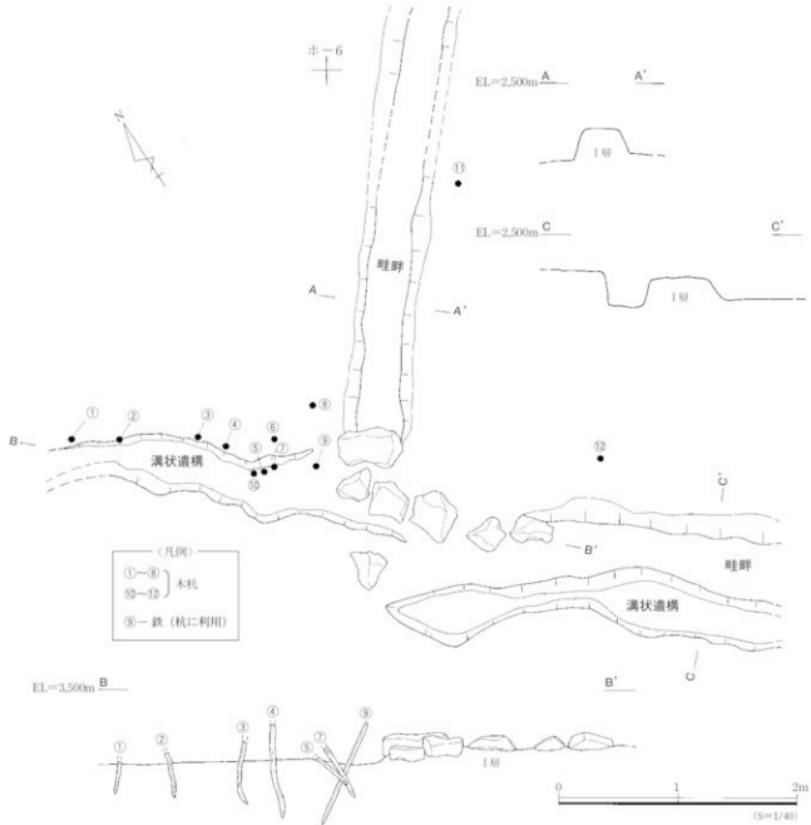
図版6 囲い石除去後



第9図 近世・近代 水田遺構・炉跡検出状況（I地区・II地区）



第10図 近世・近代 水田遺構詳細検出状況 i (I 地区)

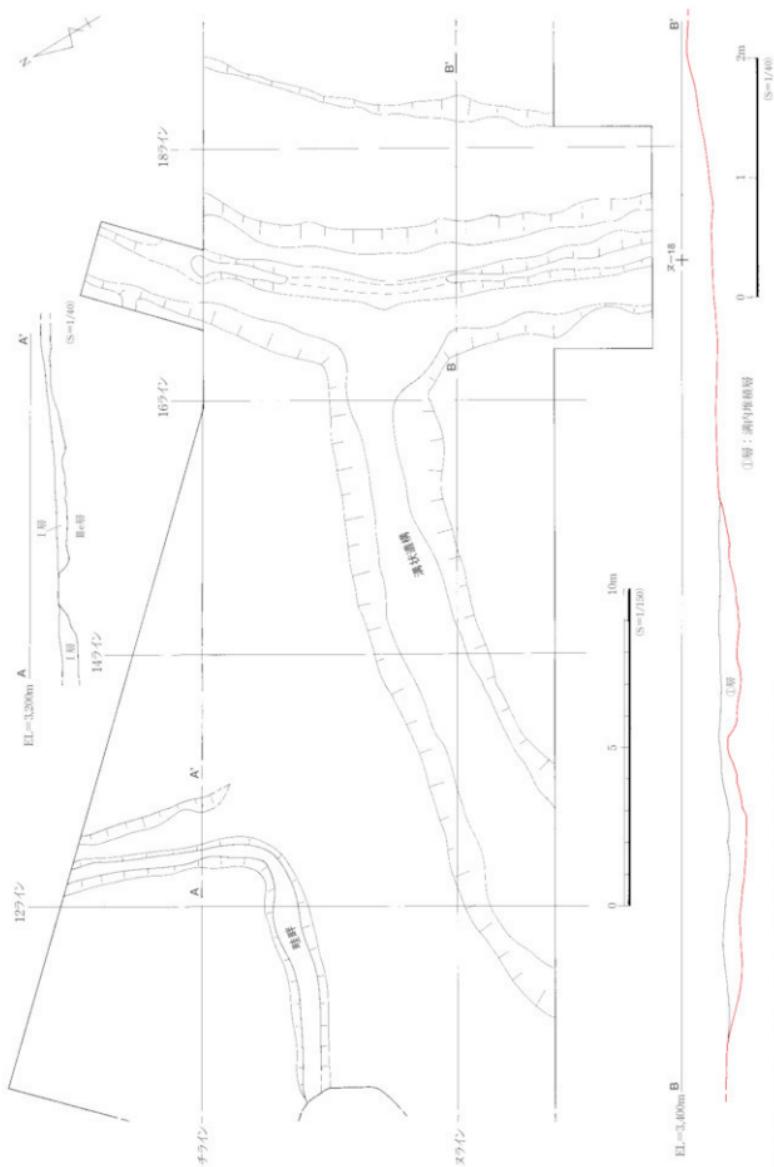


図版7 畦畔検出状況

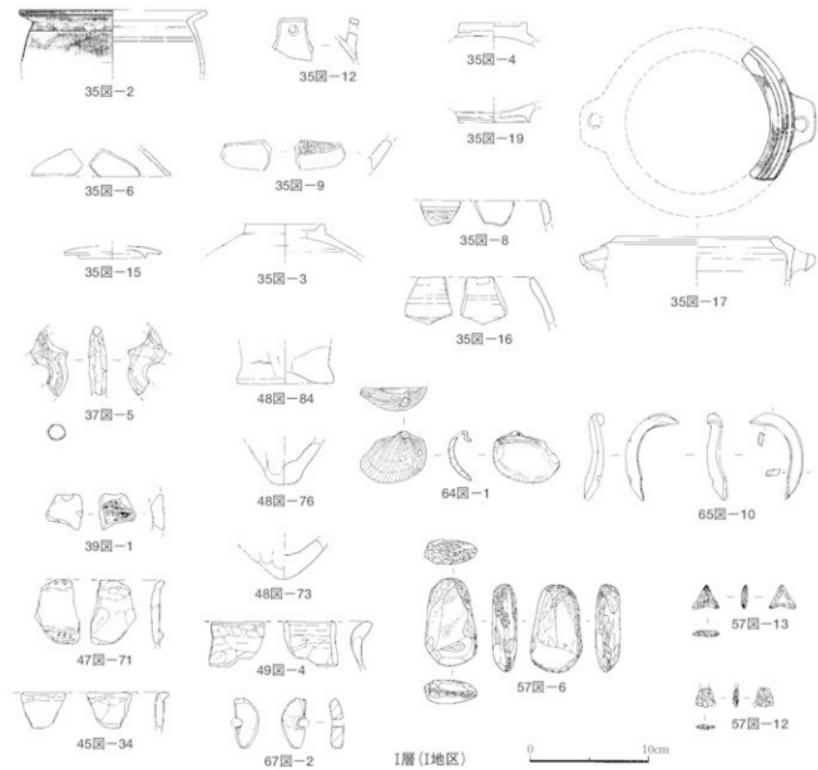


図版8 畦畔完掘状況

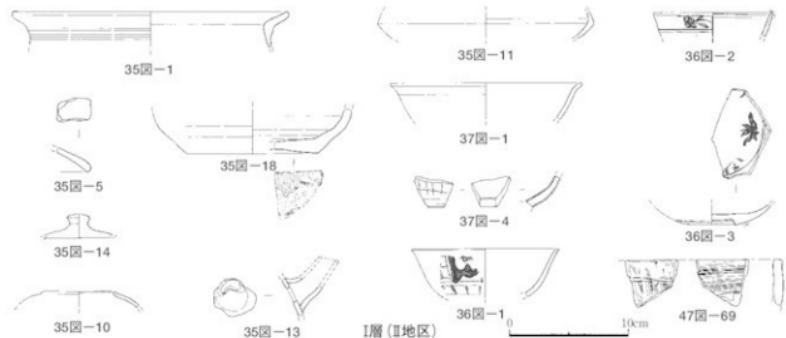
第11図 近世・近代 水田遺構詳細検出状況 ii (I 地区)



第12図 近世・近代 水田・溝状遺構詳細検出状況（II地区）



I層(I地区)



I層(II地区)

第13図 I層の出土遺物



上 畑跡検出状況（II地区第I層下面）



下 畑跡検出状況（I地区第I層）

図版9 近世・近代の調査 ii



上 真溜検出状況（I地区第4層上面）



下 畠畔検出状況①（I地区第4層下面）

図版10 近世・近代の調査 III



上 畠畔検出状況②(Ⅰ地区第Ⅰ層下面)



下 堆積状況(Ⅰ地区グスク～近世・近代)

図版11 近世・近代の調査 iv



上 木杭検出状況①（I地区第Ⅰ層下面）



下 木杭検出状況②（I地区第Ⅰ層下面）

図版12 近世・近代の調査 v



上 畜・木杭・石検出状況（I地区第Ⅰ層下面）



下 畜断面（I地区第Ⅰ層下面）

図版13 近世・近代の調査 vi

第2節 ゲスク時代

Ⅲ地区第Ⅲ層においてゲスク時代と考えられる水田耕作土が確認され、第V層直上において、区画を持った畦畔の痕跡（以下、擬似畦畔）が検出された。第Ⅲ層はⅠ地区・Ⅱ地区でも確認されているが、Ⅲ地区のような擬似畦畔は確認されなかったため、遺構として検出できなかった。この擬似畦畔に沿うように多量の木杭が検出され、交点には石が置かれていることがわかった。第Ⅲ層は貝塚時代後期の遺物を包含するため、当初は当該時期の遺物包含層として捉えていたが、平成15年度の調査によって水田耕作土であることがわかった。調査開始時、第Ⅲ・Ⅳ層の厚みを確認するため、トレンチを設けて断面の観察を行っていた時、第Ⅲ層（砂質シルト）の土の粒子が極めて均一であり、砂が所々でラミナやブロック状に混じっていることが確認された。また、第Ⅲ層の下部は第V層の砂層を顕著に巻き上げていることが確認され、水田耕作土と判断した。なお、Ⅲ地区的調査においては、4m間隔のグリッドを8m間に拡大してベルトを残し調査を進めたため、グリッドの設定については「カナ」のラインがタ・ソ・ラ・ウ・ノ・ク・マ、「数字」のラインが24・26・28・30・32・34のみとなっており、その中间のグリッドはない。したがって、「ク-24グリッド」は「ク-24グリッド、オ-24グリッド、ク-25グリッド、オ-25グリッド」の4グリッドを包括している表現となる。

擬似畦畔の成立過程

今回確認された遺構は明確な畦畔ではなく、水田のために畦畔造成を行った結果、下層にその影響を及ぼしたことによって確認された擬似畦畔である。第Ⅲ層は水田耕作土と考えられ、その痕跡が第V層で確認された。本遺跡における擬似畦畔の成立を想定する。

第14図は本遺跡における擬似畦畔の成立過程を想定した模式図である。水田造成前、Ⅲ地区には貝塚時代後期の包含層である保水性が極めて高い第V層（第IV層や他の層も存在した可能性がある）と旧表土があった。ゲスク時代において旧表土を利用して水田（畦畔）を造成した。耕作による搅拌が行われ、第V層の土まで影響を及ぼし、擬似畦畔が残った。第Ⅲ層において上部（第Ⅲa層）と下部（第Ⅲb層）に違いが見られる。これは、第Ⅲa層は耕作の制度が高く基盤層である第V層の混入度合が強いため、土の質や色調が均一となった。第Ⅲb層は搅拌をあまりうけておらず、巻き上げられた基盤層である第V層が球状に残った（第15図内の図版14搅拌状況）ためと考えられる。擬似畦畔は微妙なマウンドを持つが、そのマウンドは黒褐色の筋として確認できた（図版23下、図版24上）。

水田遺構

擬似畦畔は痕跡であるため、当時存在した畦畔の形すべてを検出できたわけではないので、当時の水田耕作時の明確なプランは不明であるが、ある程度の規則的な方形区画が確認された。区画はおむね南西から北東、南東から北西に沿っており、特に南西から北東に走る擬似畦畔は残りが良く、前述した黒褐色化も顕著に見られた。擬似畦畔沿いには木杭が並んで打たれており、交点付近には石が置かれていた。

擬似畦畔は第V層直上で確認したが、ク-24グリッド及びノ-24グリッドでは第Ⅲ層を丁寧に掘削し第Ⅲa層と第Ⅲb層の境目を検出し状況の観察を行った。

木杭には明らかに太いものと細いものがあり、太いものは20本、細いものは29本確認された。その傾向を第15図内第2表に示す。木杭の先端部はすべて切られており、細いものは斜めに1度切っただけのものが多く、太いものは最も尖った部分が中心にくるように何度も切られている。木杭の打たれる場所にも特徴がある。擬似畦畔の残りが最もよかつたのは南西から北東に走る2本ラインで、この擬似畦畔ラインに集中して多く打たれている。このため、この擬似畦畔は人間が歩けるような大畦であった可能性が高い。また、今回出土した木杭はⅡ層で木杭の頭が検出されたものや、Ⅲ層内から検出されたもの、Ⅲ層の途中で頭が切られているもの等があり、すべて同時期に打たれて使用されたものだけとは考えられない。のことから、最低でも2度の造成を行っている可能性が高い。

石が確認されたのは擬似畦畔の交点付近（第16図内図版20上擬似畦畔上の石）である。耕作土や擬似畦畔沿いでは石がまったく確認されなかったため、水田造成時における区画の目印として故意に置かれたものである可能性が高い。

この他、第V層直上では足跡や工具痕と考えられる痕跡が確認された（第16図）。これらには第Ⅲ層のよ

うな黒褐色土や、トレンチ掘りによる断面観察の際に確認された砂層が入り込んでいる。特に、工具痕と思われる直な長方形のプランは擬似畦畔沿いで集中して確認できたことは興味深い。また、円形のプランが無数に確認されたが、どのような要因で成立したものか判断できなかったため、ここでは植栽痕として報告し、この水田で作っていた作物の問題について他の事例を待って今後の課題としたい。

この他、溝状遺構が1本確認された（第17図）。断面では砂層のラミナが観察されることから、水が流れていたと考えられる。今回検出された擬似畦畔を斜めに断ち切る形で確認されており、この擬似畦畔が残った段階の水田遺構に伴うものか判断できなかった。

土層については花粉分析・土壤分析を実施した。詳細については第6章第1節に委ねるが、水田で生産していたものを知るために行った土壤分析では、第Ⅲb層の検出面より少量ながらプラントオバールが検出された。この他、プラントオバールは第Ⅰ層でも確認されており、この地域で水田を営んでいた可能性が高いことがわかった。

遺構の年代

第18図は本遺構前後の層から出土した遺物である。第Ⅱ層では細連弁文碗や外底が蛇目釉剥される竜泉窯系の碗等、中国産青磁が少量出土した。耕作土である第Ⅲ層では浜屋原式土器や大当原式土器とアカジヤンガー式土器の中間タイプのような土器、底尖土器、そして本遺跡から21点確認されたのみの開元通宝が出土した。第Ⅲ層上部からは小型で薄いナイフ状の鉄製刀子が出土したが、検出後の保存方法が悪く崩壊してしまったため、遺物として残すことができなかった。これについては大いに反省する。この刀子については図版31下の写真記録が残る。

水田や畑のような遺構は一般的に遺物量が少なく、耕作を行うため層の擾乱が大きく時期が特定できるような資料に乏しいため、年代の同定が困難とされる。本遺構においても一括資料が得られなかつたため、時期の特定は極めて困難であるが、得られた情報をもとに、推定してみる。

擬似畦畔が検出された第Ⅴ層は貝塚時代後期の包含層であり、その上に堆積していた耕作土である第Ⅲ層はそれ以降の時代に営まれた水田の結果である。このことから、水田の下限は貝塚時代後期と思われる。さらに、その上の層について注目してみる。第Ⅰ層は厚みのある近世・近代の耕作土である。第Ⅱ層は植物遺体が高密度で堆積した層で、細連弁文碗等の中国産陶器を含む。自然化学分析の結果、草などの植物が生息した湿地帯であったことがわかっている。したがって、第Ⅲ層で水田を営んだあと何らかの理由で破棄され、地城一帯が湿地帯と化したことが推測できる。さらにその上の層（第Ⅰ層）に近世・近代の耕作土が存在する。このことから、上限は近世・近代以前と思われる。結論として、水田遺構が営まれた時期は、貝塚時代後期以降で近世・近代以前のグスク時代のいずれかと想定される。

この想定を裏付けるため年代測定を行った。測定した資料は、①下層の巻込が顕著に見られた第Ⅲb層で検出された炭化物、②擬似畦畔に刺さっていた木杭、③高密度の植物遺体層である第Ⅱ層の3点である。その結果は以下のとおりである。

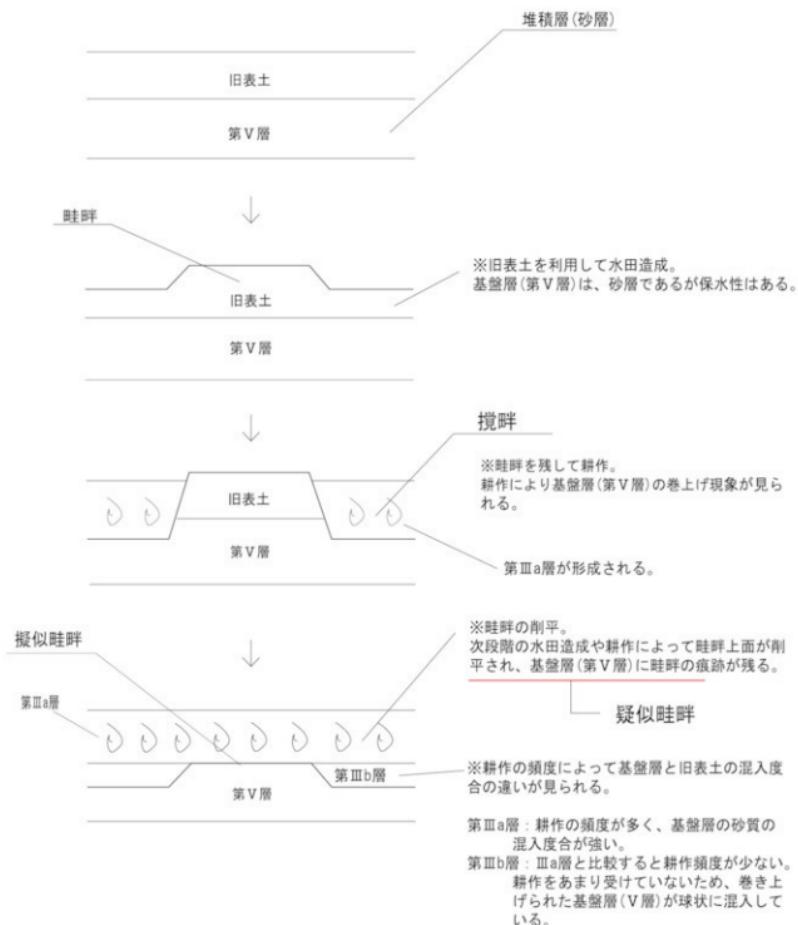
- ① 1090±40BP
- ② 940±40BP
- ③ 880±40BP

* 第6章第1節参照

この結果は、本遺跡の水田が沖縄貝塚時代末期～グスク時代初期から営まれたものであることを示唆している。考古学的には貝塚時代後期以降から近世以前のグスク時代ということまでしか年代間を狭めることができないが、その年代間をさらに狭めて裏付けうるデータとして興味深いものである（いささか古い時代となった結果ではあるが）。グスク時代においては、宜野座村の漢那福地川水田遺跡（宜野座村教育委員会1993）において水田が谷地で確認されている。本遺跡の水田遺構の検出は、広い面積を有する海岸後背の沖積地でも水田が営まれていたことを示すと思われる。

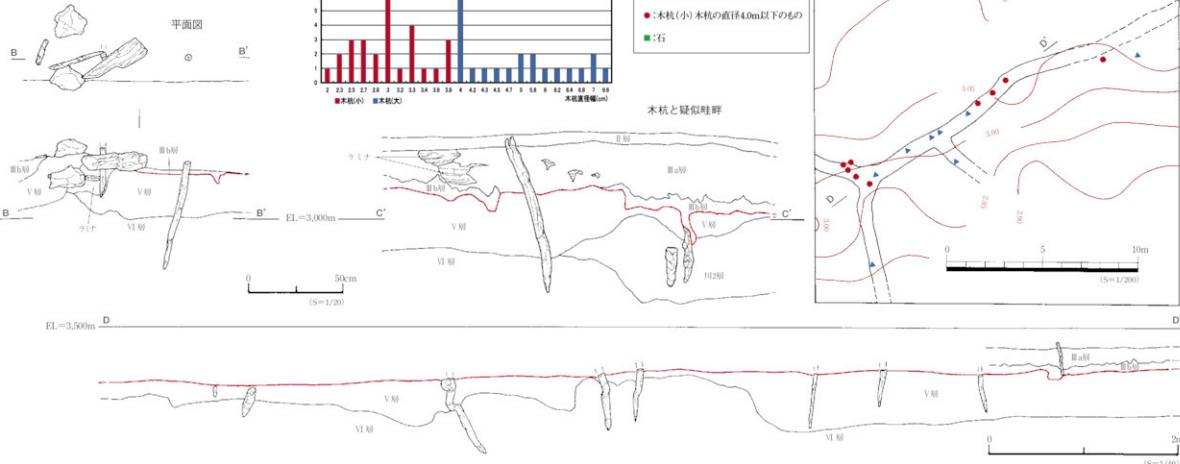
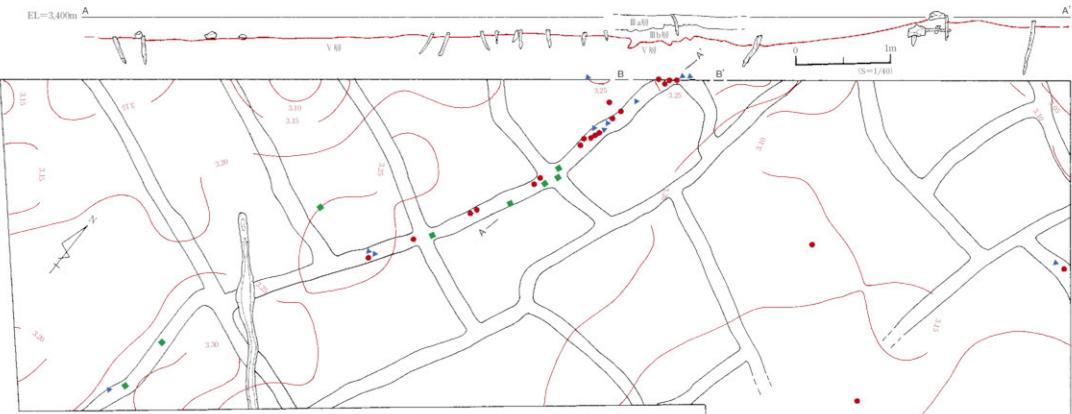
今後の課題として、本遺構のような類例の増加を待ってより詳細な資料を得ること、谷地と広い冲積地のどちらが先に水田を営む立地となったのかという、沖縄における水田開始期の立地について再検討する必要がある。また、水田のような集団で行う計画的な耕作が可能となった時代背景についても、時期的な整合性を囲いつつ検討する必要がある。

擬似畦畔成立模式図 (Ⅲ地区)

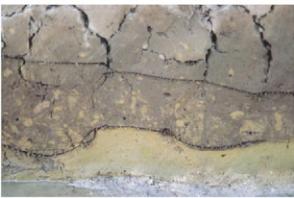


※擬似畦畔の成立過程は平成15年度のⅢ地区の調査及び、平成16年度のⅠ地区の調査の成果によって作成した。
尚、記載した層序番号は本報告書の基本層序に基づくものである。

第14図 疑似畦畔成立模式図 (Ⅲ地区)



第15図 ゲスク時代 水田遺構検出状況（Ⅲ地区）



図版14 搾拌状況



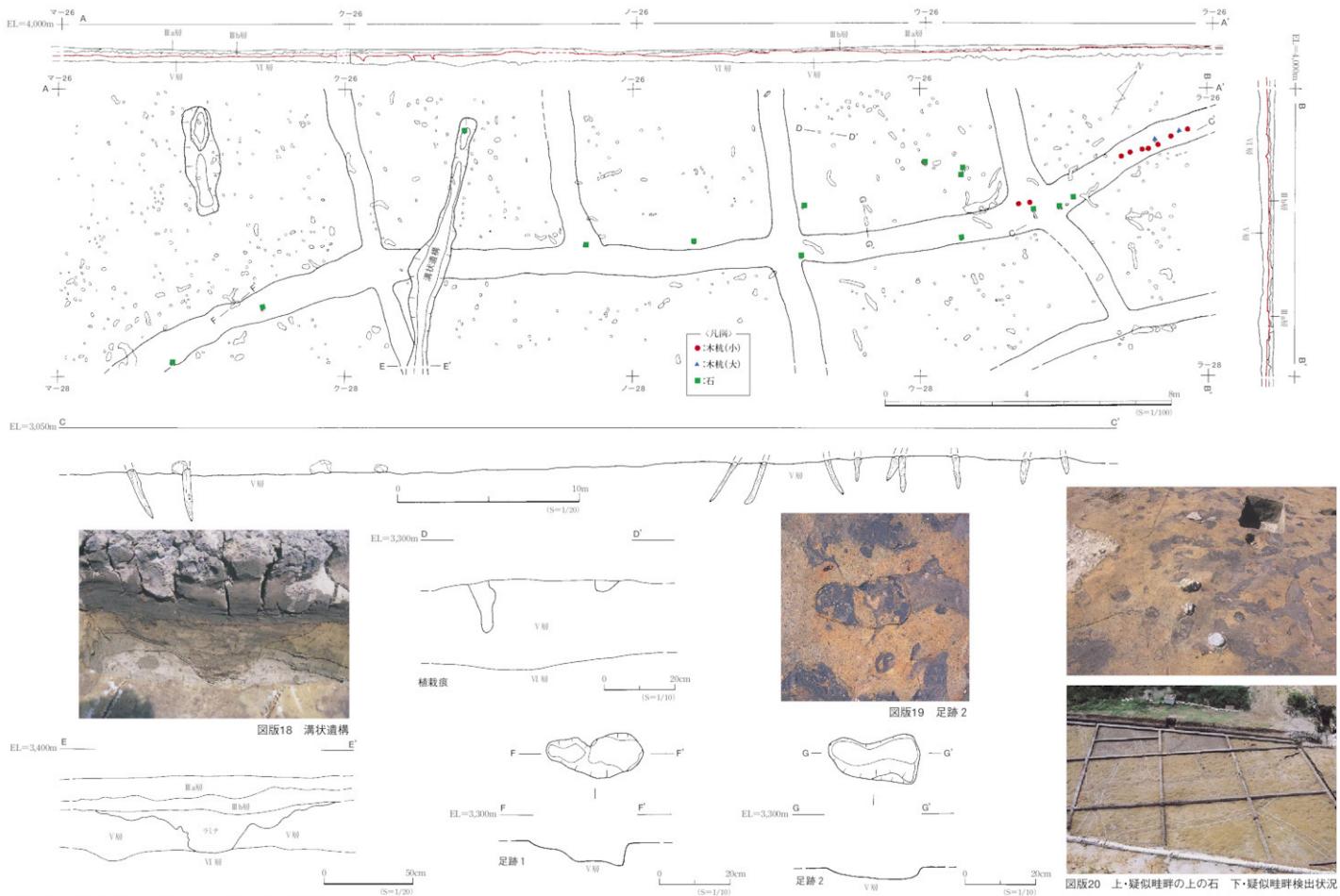
図版15 木杭（大）検出状況



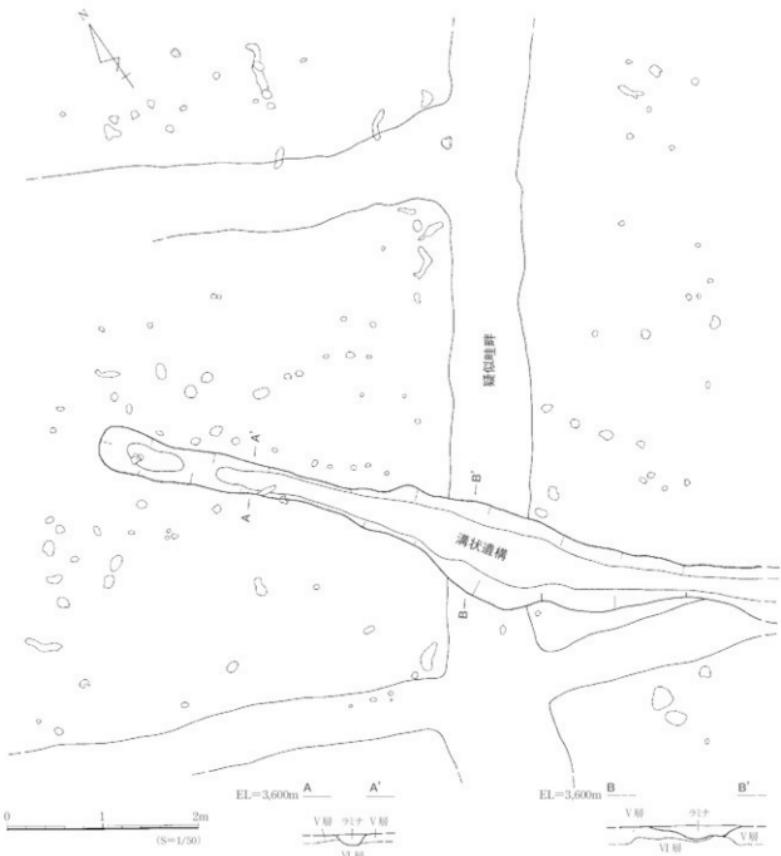
図版16 B～B'木杭検出状況



図版17 C～C'木杭検出状況



第16図 ゲスク時代 水田遺構詳細検出状況（Ⅲ地区）

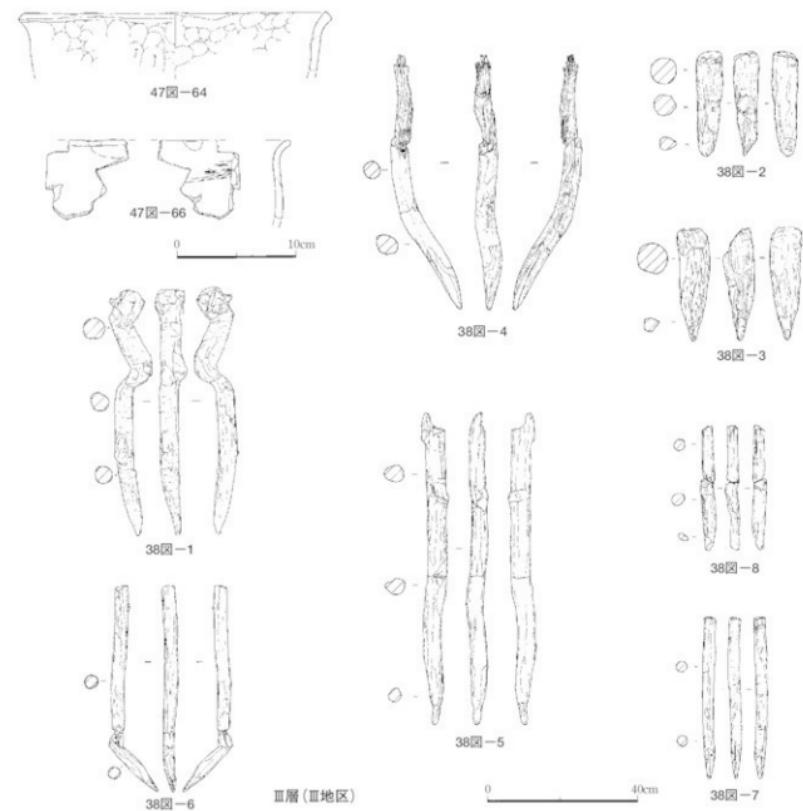
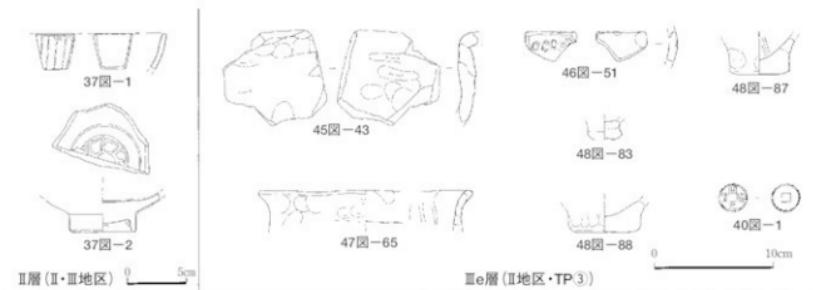


図版21 溝状遺構



図版22 溝内堆積状況

第17図 ゲスク時代 溝状遺構詳細検出状況（Ⅲ地区）



第18図 II層・III層・IIIe層の出土遺物



上 水田遺構検出状況遠景（第V層）



下 水田遺構検出状況①（第V層）

図版23 ゲスク時代の調査（Ⅲ地区）i



上 水田道構検出状況2 (第V層)



下 耕作土検出状況 (第III層)

図版24 ゲスク時代の調査 (Ⅲ地区) ii



上 水田造構検出状況③(第V層)



下 水田造構検出状況④(第V層)

図版25 ゲスク時代の調査（Ⅲ地区）iii



上 耕作土断面・砂ブロック混入状況（第Ⅲ層）



下 疑似耕作层断面（第V层）

図版26 ゲスク時代の調査（Ⅲ地区）iv



上
第V層擾拌状況（第Ⅲ層下部）



中
疑似畦畔沿いの石検出状況（第V層）



下
木杭検出状況①（第V層）

図版27 ゲスク時代の調査（Ⅲ地区）v



上
木杭検出状況② (第V層)



中
疑似畦畔に刺さる木杭検出状況



下
木杭検出状況③

図版28 ゲスク時代の調査 (Ⅲ地区) vi



上
木杭検出状況④



中
木杭検出状況⑤



下
木杭検出状況⑥

図版29 ゲスク時代の調査（Ⅲ地区）vii



上 溝状遺構検出状況（第V層）



下 溝状遺構（第V層）

図版30 ゲスク時代の調査（Ⅲ地区）viii



上
後期土器出土状況①(第V層)



中
後期土器出土状況②(第V層)



下
刀子出土状況(第III層上面)

図版31 ゲスク時代の調査（Ⅲ地区）ix



第Ⅱ層掘削中



水没状況



環境整備



道物洗浄中



第Ⅴ層検出中



道物洗浄中



沈砂地



疑似吐跡平面実測中

図版32 ゲスク時代の調査（Ⅲ地区）x

第3節 貝塚時代後期

第19図は貝塚時代後期と考えられる川跡及びイモガイ集積の検出状況である。川跡はⅠ地区からⅢ地区のすべての地区で確認された。残念ながら、これらの川跡が1本の川であったのか、何本かの川であったのか判断することができなかったが、川が埋まるまでの堆積状況や遺物出土状況はすべて同様であり同時に流れている川であると考えられる。第Ⅲ層下面か第Ⅴ層上面で検出面をおさえることができる（第Ⅳ層は川跡の上には堆積していない）。川は水が流れていた当時は海砂層である第Ⅵ層まで影響を与えており、水の力によって第Ⅱ層が深く掘り込まれている。今回の発掘調査によって最も多くの遺物が出土したものこれら川跡である。川跡から出土する上器はほとんど磨耗を受けておらず、大型の破片で出土する傾向が強い。イモガイ集積はⅡ地区の川跡2の底面付近で2基検出され、類例を見ない得意な事例となった。

川跡1

第20図はⅠ地区で確認された南西から北東に走る川跡の検出状況である。川幅は一定ではなく広がっていく。深さ約1m弱である。白砂層である第Ⅵ層が深く切られている。基本層序で述べたように、川跡は大きく3層構造になっており、川1層はⅢ地区で確認された粘土層のみである。川2層の基盤は第Ⅴ層である陸性の砂層と似似しているが、特別に多量のカワニナや砂利が混じり、砂利質となる特徴がある。恐らく、第Ⅴ層の堆積によってほとんど埋まってしまった川と思われる。Ⅱ地区やⅢ地区の川跡とも共通することだが、川底である第Ⅵ層の上にのっている川3層は黒色を呈しており、川2層に向かって波打つように不規則な層となっている。どのような要因でこのような層序になるのか理解でき。川跡の上にはグスク時代の水田耕作土と考えられる第Ⅲ層が堆積しており、この時期にはすでに川がなかったことがわかる。

第21図・第22図は川跡1及びⅠ地区の第Ⅴ層から出土した遺物である。Ⅰ地区的川2層の上面からは後述する貝塚時代後期上器IV類とした大當原式土器に後出するとと思われる上器が潰れた状態で出土した。残念ながら調査区のすぐ脇で出土したため、全部を検出することができず、底部資料が得られなかった。残りは調査区外に残っているものと思われる。この土器が周辺からの流入とは考えられないことから、川跡の埋没時期がほぼこの土器の時期で押さえられると考えている。川3層からは、保存状態の良い阿波連浦下層式土器や、文有や横耳が付く浜屋原式土器、弥生時代前期の刻目凸帶文土器や壺の頸部・底部、ゴホウラ製の貝輪や鎌状の貝製品、叩石等の石器、貝塚時代中期の仲原式土器、貝塚時代前期の室川下層式土器等が出土した。川跡周囲の第Ⅴ層からは阿波連浦下層式土器や浜屋原式土器、大當原式土器、弥生中期の壺の頸部、貝垂や貝垂等が出土した。

川跡2

第23図はⅡ地区で確認された南から北に走る川跡の検出状況である。川幅は約11m、深さ約1m弱である。川内の堆積状況は川跡1と同じである。川跡の上にはグスク時代の水田耕作土と考えられるⅢ層が堆積しており、この時期にはすでに川がなかったことがわかる。川跡2の川3層からは後述するイモガイの集積が検出された。

第24図・第25図は川跡2及びⅡ地区の第Ⅳ層～第Ⅶ層から出土した遺物である。川2層からは保存状態良好な大型の浜屋原式土器や尖底、平底の底部が出土した。川2～3層からは胴部に2条の突帯も有する得意な形状の土器や浜屋原式土器、阿波連浦下層式土器、くびれ平底、石器等が出土した。第Ⅳ層はⅡ地区でのみ確認された層で、尖底土器や石斧が3本出土した。周辺の第Ⅴ層からは、阿波連浦下層式土器や浜屋原式土器、円管状土製品、石器等が出土した。

イモガイ集積

第19図は川跡2で確認されたイモガイ集積の検出状況である。立面図・図版33～36のように川跡の底面である川3層において検出されており、極めて得意な状況であると言える。この川は白砂層である第Ⅵ層を掘り込んで水が流れおり、集積が確認されたレベルは明らかに川の周囲の第Ⅶ層上面より下位である。したがって、この集積は集積があった場所がたまたま川になったのではなく、意図的に川底に集積したものと考えるのが妥当である。

(1) イモガイ集積1

イモガイ集積1は34個のイモガイを集積している。種類と量はアンボンクロザメ23点、クロフモドキ10点、ヤナギシボリイモ1点とアンボンクロザメが多い。集積の規模は48cm×40cm程、集積の仕方は乱雑で、全体的に先端部を外側に向いている。集積されたイモガイは最も大きなもので殻長12.12cm、最も小さなもので殻長8.98cmを測る。10cmを超えるものが多く、印象的に固体の大きさの違いはほとんど感じられない。川跡の西側隅で検出された。

(2) イモガイ集積2

イモガイ集積2は20個のイモガイを集積している。種類と量はアンボンクロザメ13点、クロフモドキ7点となっており、こちらもアンボンクロザメが多い。集積されたイモガイは最も大きなもので殻長12.07cm、最も小さなもので9.01cmを測る。集積1と同様に、10cmを超えるものが多く、印象的に固体の大きさの違いはほとんど感じられない。

特筆すべきことに上下の2段に分かれた構造となっている点がある(図版34)。乱雑に並べられた下段の上には川3層が厚く入り込んでおり、さらにその上には同じく乱雑に並べられた上段の集積がある。下段は9個のイモガイを乱雑に並べており、集積としてのまとまりがかなり崩れた感がある。種類と量はアンボンクロザメが5点、クロフモドキが4点である。上段の規模は30cm×20cm程で、11個のイモガイを碗雑に並べているが、下段よりはまとまりがある。種類と量はアンボンクロザメが8点で、クロフモドキが3点である。川跡の中央部付近で検出された。

溝状遺構・土坑

II地区では川跡やイモガイ集積の他に同じ検出面で溝状遺構や2基の土坑が検出された(第23図)。溝状遺構はちょうど南北に直線的になっている。幅約90cm、深さ約20cmを測る。土坑1は半分が調査区に切られしており、形態が判然としないが、円形の可能性が高い。幅約100cm、深さ約45cmを測る。土坑2も半分以上が調査区に切られしており、形態が判然としない。深さ約60cmを測る。

これらの遺構は貝塚時代後期である第3節に掲載したが当該時期とは考えられず、土坑1は第I層が堆積しているため、近世・近代の擾乱と思われる。土坑2はグスク時代の耕作土と考えられる第III層が堆積しているため、グスク時代に形成された可能性が高い。溝状遺構は南北に延びる直線的な規格を持ち、第2節で紹介したIII地区の擬似畦畔のラインと同様の方向性を持つことから、グスク時代の水田遺構に関係する可能性が高い。

川跡3

第26図はIII地区で確認された南北に走る川跡3の検出状況である。半分が調査区の境界と接しているため、川幅は確認できなかったが、深さは約1mを測る。他の川跡と比べて、大きな木材が川の流れと直行する形で残っていた。水位が高い場所であるため、このような木材が炭化せず、保存状態が極めて良好に残っている。川跡3の上面でのみ川1層とした粘土層が堆積していた。良質な粘土でカワニナを多量に含んでいる。第III層である耕作の影響で粘土が巻き上がっている状況が観察できた。この粘土層は川跡3の上面でのみ存在していたので、周囲の土層では確認されなかった。のことから、川の上流より流されて堆積したものであることが推測できる。

第29図は川跡3及びIII地区の第V層から出土した遺物である。川2層からは浜屋原式土器、大当原式土器、薄手の平底土器、イモガイ製の貝和等が出土している。川3層からは浜屋原式土器、石器等が出土している。また、第V層からは、浜屋原式土器、くびれ平底土器。貝塚時代中期と考えられる平底土器、石斧等が出土している。

第29図は、発掘調査の過程で試掘調査を実施した試掘坑T.P③で確認された遺物である。第IV層からは浜屋原式土器や大当原式土器、尖底土器等の土器群と共に開元通宝が確認されている。第V層からは、浜屋原式土器や尖底土器、くびれ平底状土器が出土している。

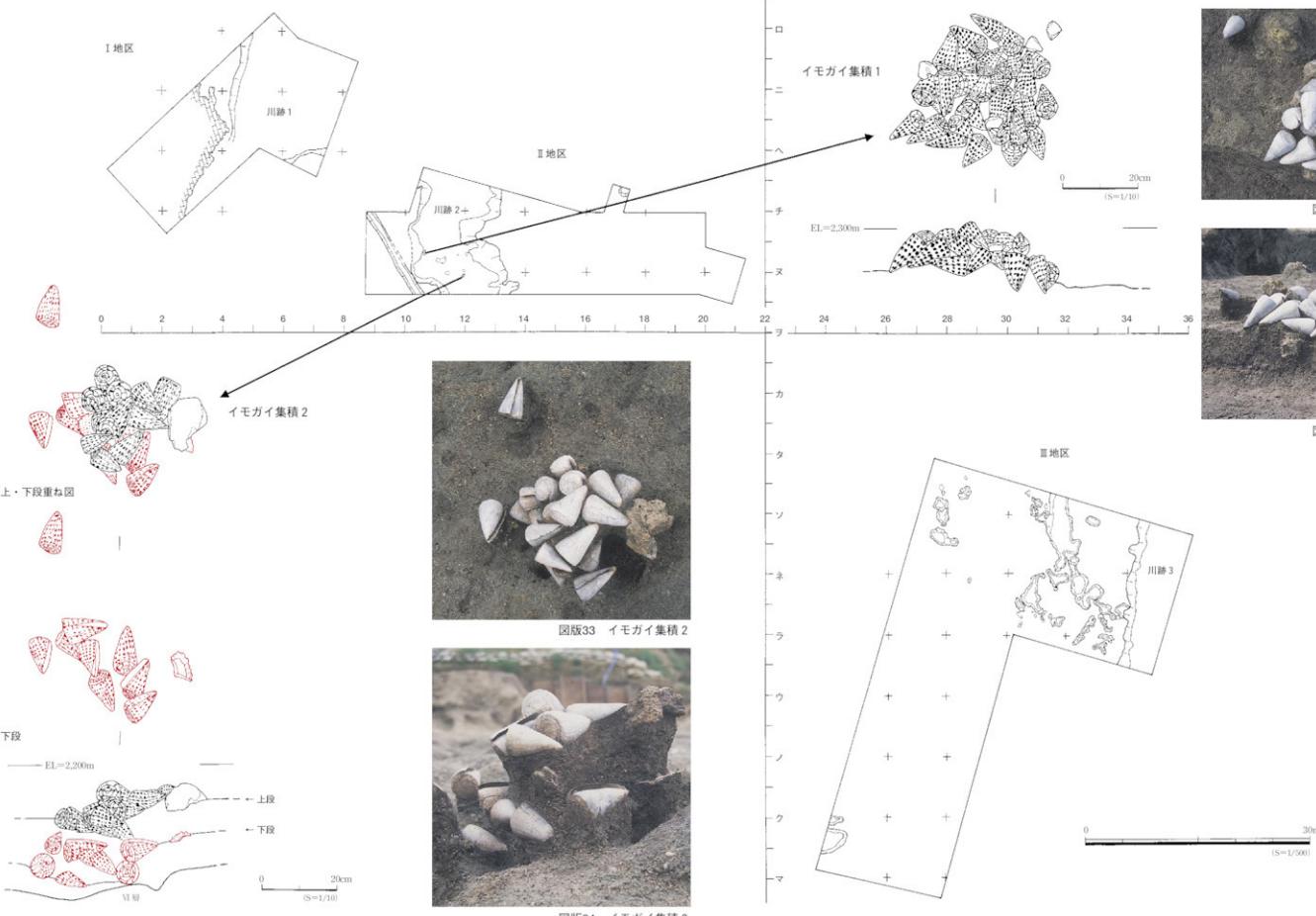
T.P③では後述する貝塚時代後期土器の口縁部・胴部IV類と底部IV類が多量に出土していることが注目できる。このトレンドの調査結果によって、口縁部・胴部IV類と底部IV類がセット関係となる可能性が高いことが想定できた。

第4表 イモガイ計測一覧（集積1）

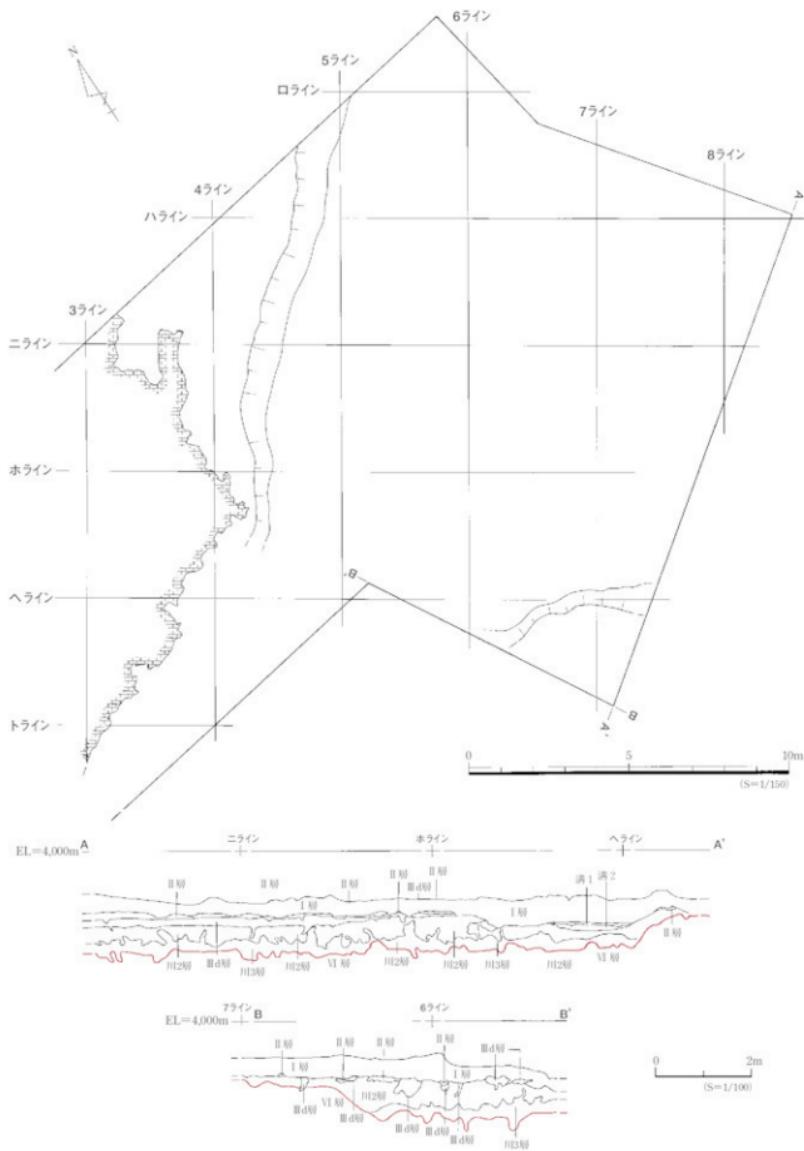
通し番号	種類	計測値(mm/g)			備考
		殻長	殻幅	重量	
1	クロフモドキ	121.2	66.3	281.4	殻頂に少し虫食い有
2	アンボンクロザメ	107.8	64.7	229.8	"
3	クロフモドキ	118.9	62.1	256.8	"
4	アンボンクロザメ	102.0	52.8	142.6	"
5	アンボンクロザメ	112.2	60.4	194.0	"
6	アンボンクロザメ	102.6	59.2	186.3	"
7	ヤナギシボリイモ	-	-	-	破片
8	クロフモドキ	105.6	63.4	265.8	殻頂全体に虫食い有
9	クロフモドキ	100.3	54.9	180.7	"
10	クロフモドキ	107.5	62.2	223.0	殻頂に少し虫食い有
11	アンボンクロザメ	105.4	61.3	196.5	"
12	アンボンクロザメ	110.5	62.1	221.0	殻頂に少し虫食い有
13	クロフモドキ	103.6	60.2	182.9	
14	アンボンクロザメ	102.4	58.3	183.6	殻頂に少し虫食い有
15	アンボンクロザメ	89.8	49.5	118.6	
16	アンボンクロザメ	95.5	55.2	168.1	殻頂に少し虫食い有
17	アンボンクロザメ	114.8	66.5	231.8	"
18	アンボンクロザメ	108.4	65.2	209.6	"
19	クロフモドキ	118.5	65.6	276.1	"
20	アンボンクロザメ	91.5	50.1	119.0	"
21	アンボンクロザメ	99.4	57.3	166.9	"
22	クロフモドキ	116.1	66.6	228.7	"
23	アンボンクロザメ	109.0	59.0	186.9	
24	アンボンクロザメ	109.4	61.9	193.1	
25	アンボンクロザメ	99.4	62.7	203.5	殻頂に少し虫食い有
26	クロフモドキ	115.7	67.3	239.5	殻頂全体及び体層の一部に虫食い有
27	アンボンクロザメ	103.6	62.5	228.0	殻頂から体層にかけて少し虫食い有
28	クロフモドキ	113.8	66.6	234.0	殻頂に少し虫食い有
29	アンボンクロザメ	102.1	56.9	184.6	"
30	アンボンクロザメ	109.4	66.9	224.2	"
31	アンボンクロザメ	113.4	62.7	213.7	"
32	アンボンクロザメ	111.5	67.1	253.8	
33	アンボンクロザメ	115.8	72.1	304.9	殻頂全体に虫食い有
34	アンボンクロザメ	90.7	52.4	136.6	

第5表 イモガイ計測一覧（集積2）

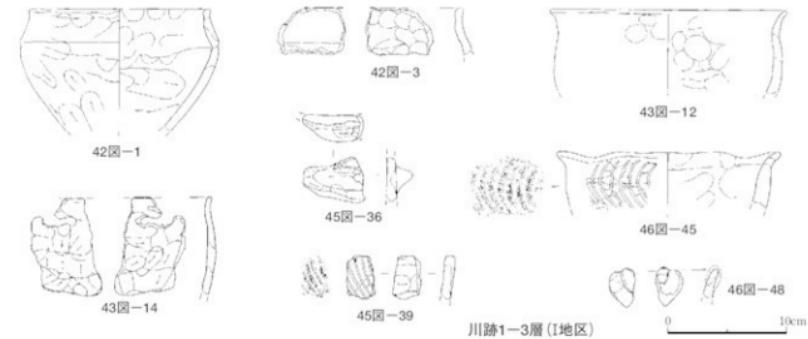
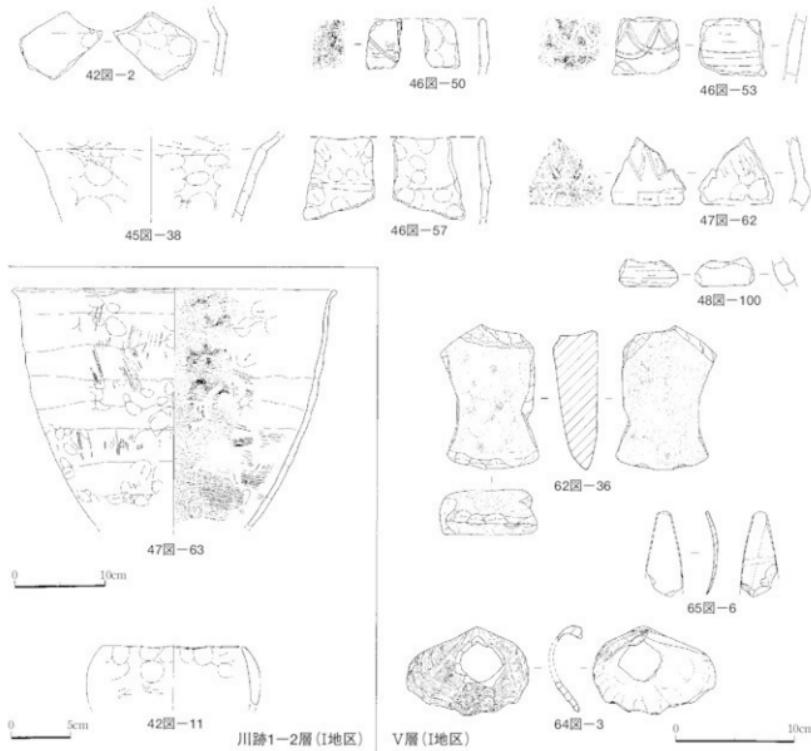
通し番号	種類	計測値(mm/g)			備考	
		殻長	殻幅	重量		
1	上段	アンボンクロザメ	90.1	52.8	142.4	殻頂に少し虫食い有
2		クロフモドキ	105.5	65.7	261.6	〃
3		アンボンクロザメ	98.8	55.1	153.8	〃
4		アンボンクロザメ	107.1	64.3	261.3	〃
5		アンボンクロザメ	114.5	62.8	259.3	〃
6		アンボンクロザメ	112.8	66.7	281.3	〃
7		アンボンクロザメ	114.8	66.0	285.9	〃
8		アンボンクロザメ	113.6	64.0	290.9	〃
9		アンボンクロザメ	107.4	64.3	257.1	〃
10		クロフモドキ	108.9	61.3	251.3	〃
11		クロフモドキ	100.7	58.0	210.5	〃
12	下段	クロフモドキ	110.0	63.8	244.6	
13		クロフモドキ	119.9	71.0	369.5	殻頂に少し虫食い有
14		クロフモドキ	100.3	59.1	186.2	殻頂全体に虫食い有
15		アンボンクロザメ	101.8	60.1	231.8	
16		アンボンクロザメ	102.1	56.8	186.1	殻頂に少し虫食い有
17		アンボンクロザメ	105.7	61.7	283.8	〃
18		クロフモドキ	120.7	65.6	258.3	〃
19		アンボンクロザメ	117.8	67.6	338.8	
20		アンボンクロザメ	107.7	64.2	244.1	殻頂全体に虫食い有



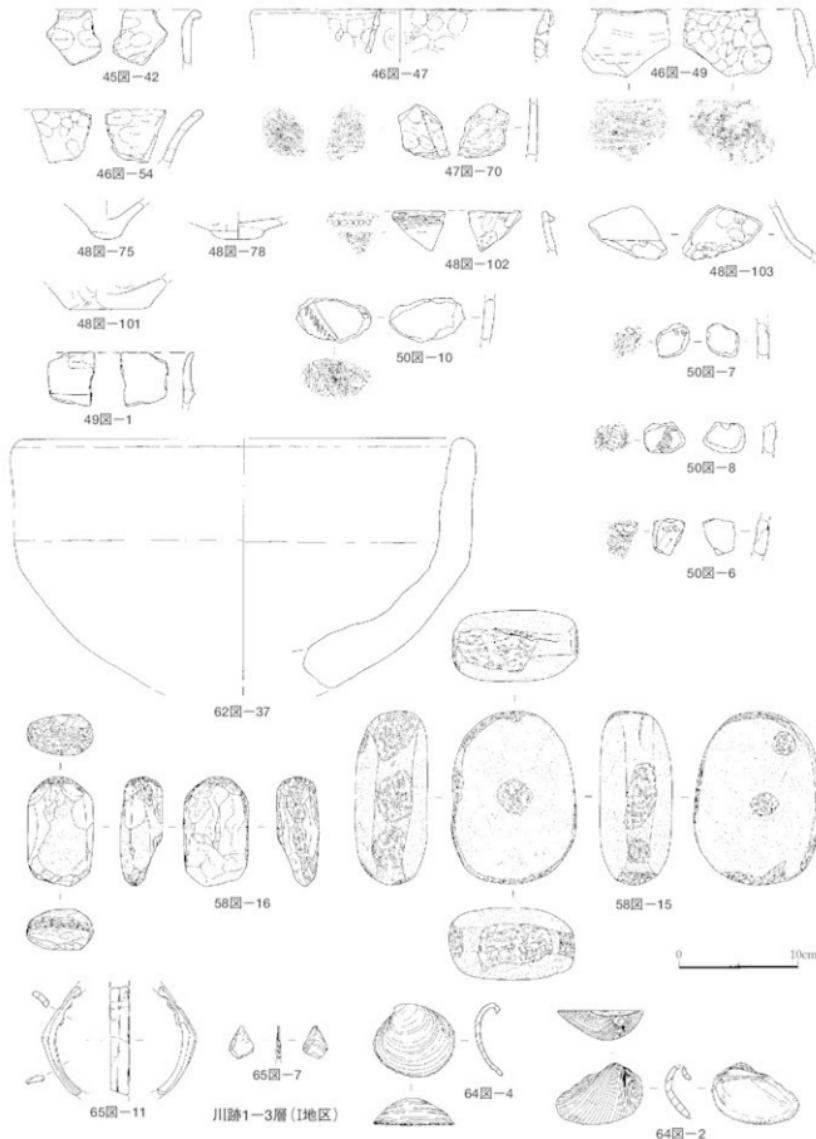
第19図 貝塚時代後期 遺構検出状況（I地区～III地区）



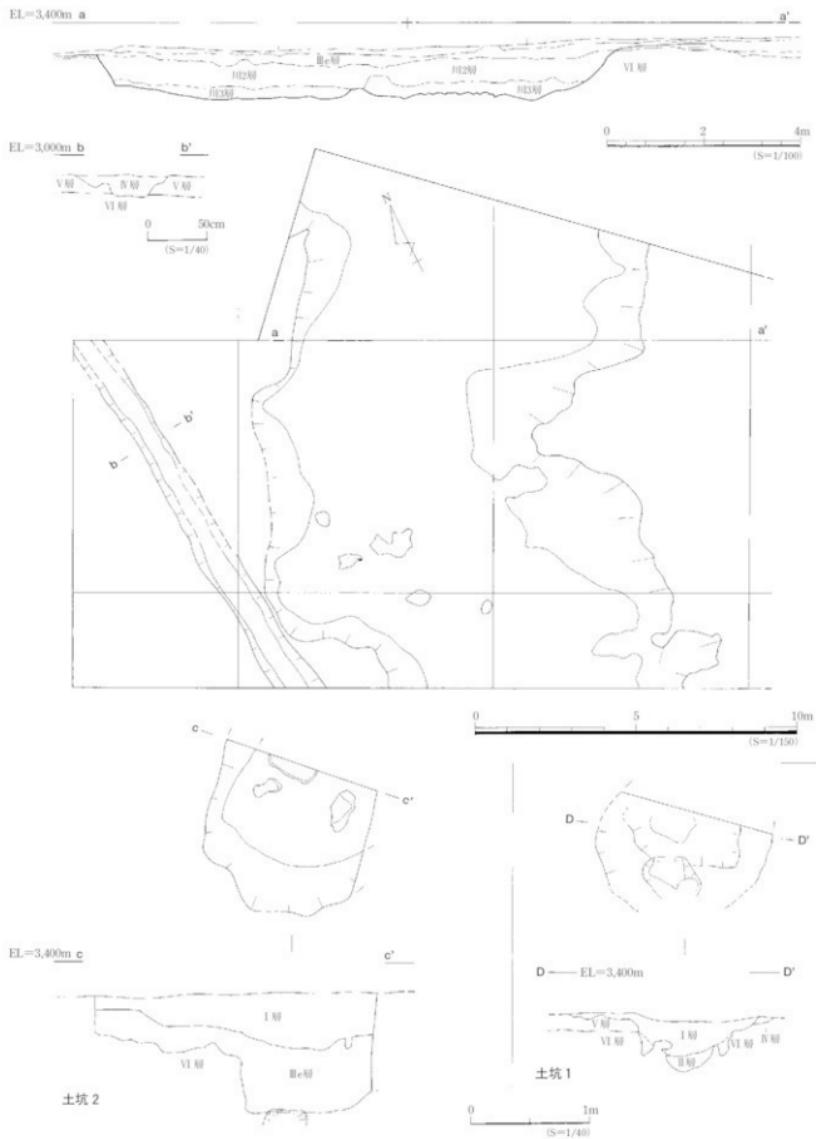
第20図 貝塚時代後期 川跡1検出状況（I地区）



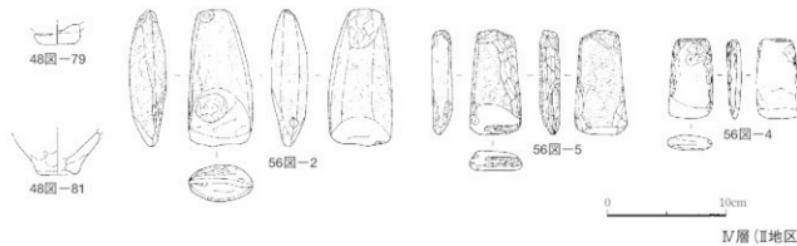
第21図 V層・川跡1—2層・川跡1—3層の出土遺物



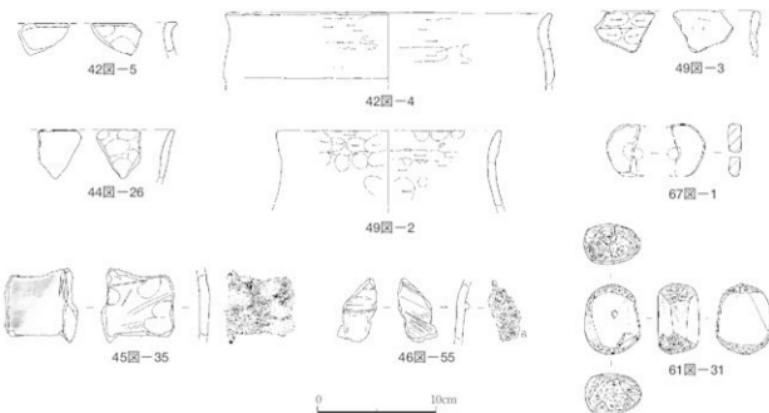
第22図 川跡1—3層の出土遺物



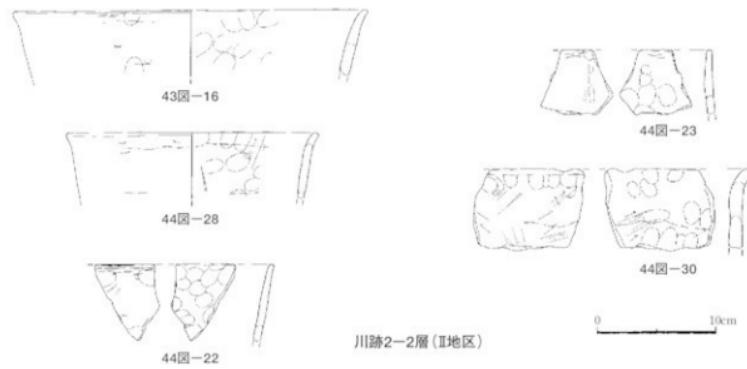
第23図 貝塚時代後期 川跡2・土坑検出状況（II地区）



IV層(II地区)

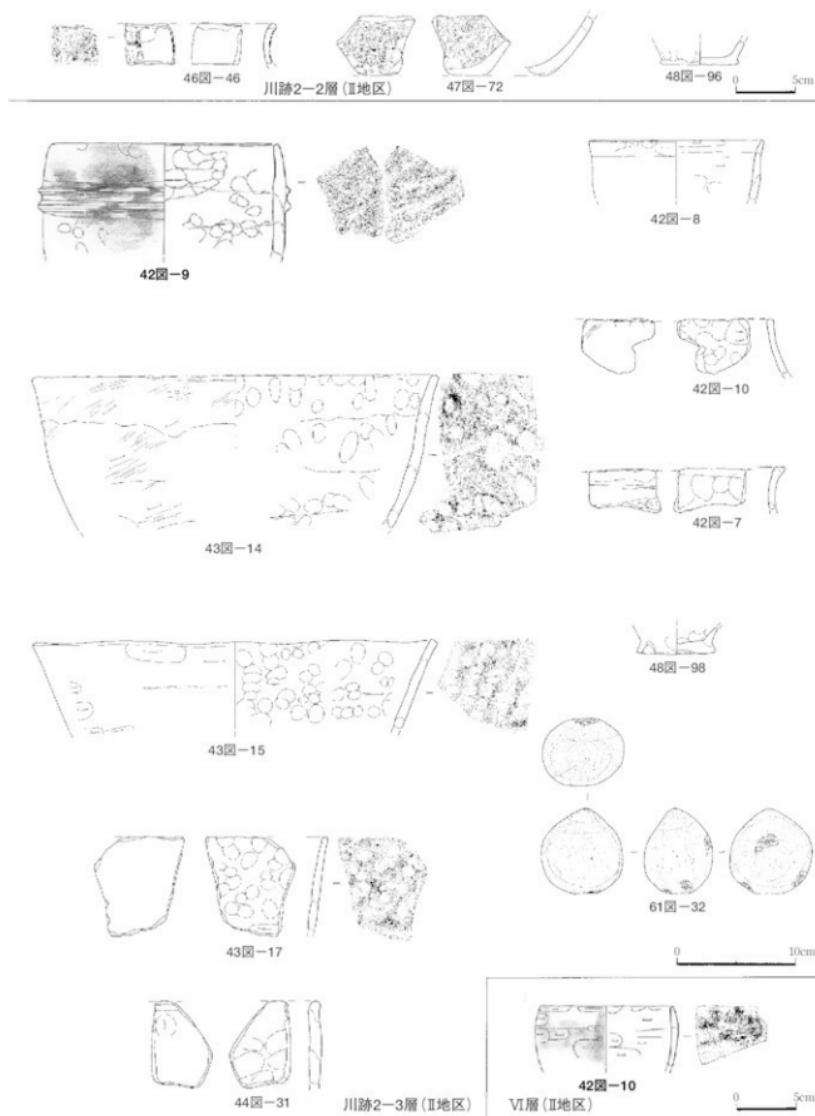


V層(II地区)

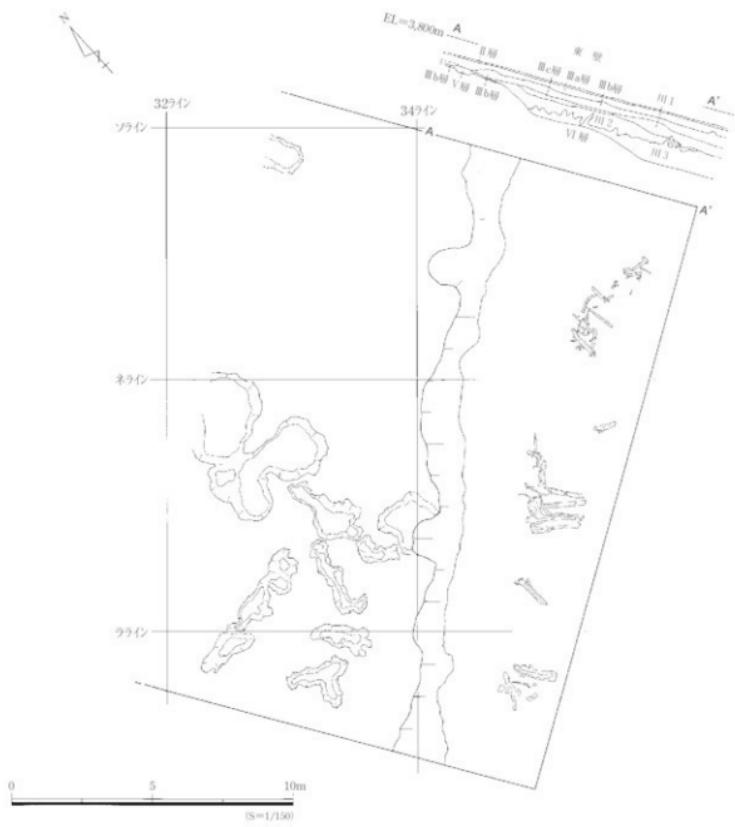


川跡2-2層(II地区)

第24図 IV層・V層・川跡2-2層の出土遺物



第25図 川跡2-2層・川跡2-3層の出土遺物

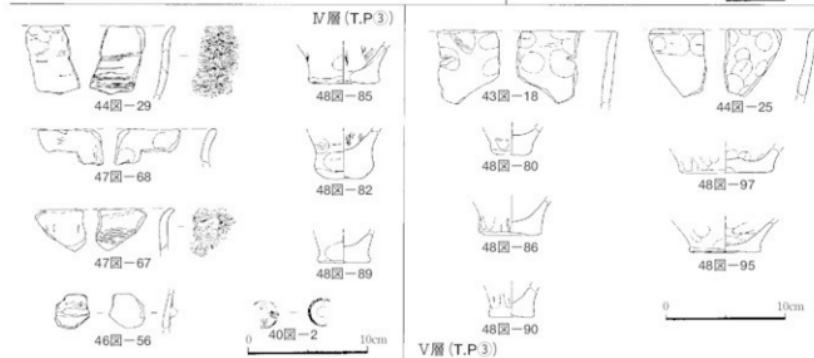
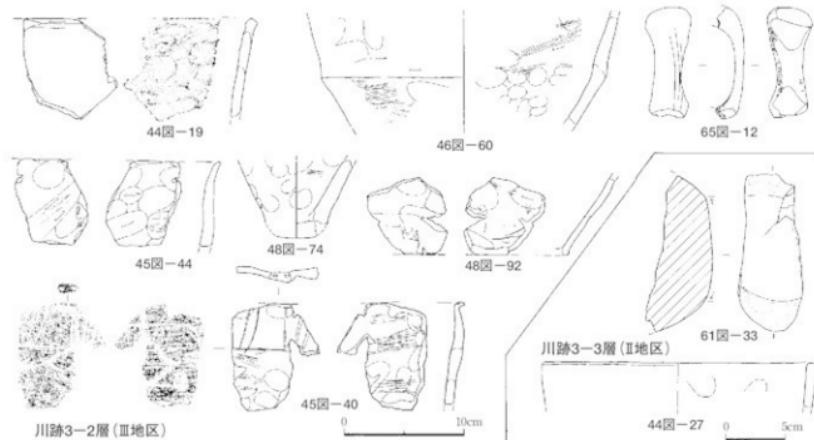
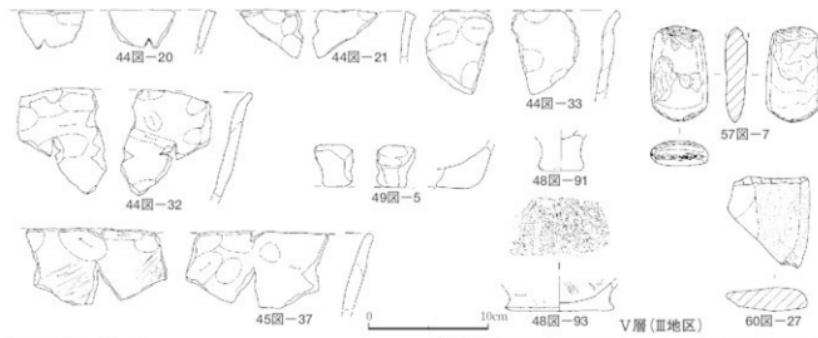


図版37 川跡近景



図版38 川跡堆積状況 西壁

第26図 貝塚時代後期 川跡3検出状況（Ⅲ地区）



第27図 IV層・V層・川跡3—2層・川跡3—3層の出土遺物



上 川跡1堆積状況①・第VI層の落込



下 川跡1堆積状況②・中央部

図版39 貝塚時代後期の調査（I地区）i



上 川跡2検出状況



下 川跡断面の記録

図版40 貝塚時代後期の調査（Ⅱ地区）ii



上 イモガイ集積①検出状況①(川跡2底)



下 イモガイ集積①検出状況②(川跡2底)

図版41 貝塚時代後期の調査（Ⅱ地区）iii



上 イモガイ集積2検出状況①（川跡2底）



下 イモガイ集積2検出状況②（川跡2底）

図版42 貝塚時代後期の調査（Ⅱ地区）iv



上 川跡3検出状況①・埋土掘削前



下 川跡3検出状況②・完掘

図版43 貝塚時代後期の調査（Ⅲ地区）v



上 川跡3堆積状況①



下 川跡3堆積状況②・多量のカワニナ混入

図版44 貝塚時代後期の調査（Ⅲ地区）vi



上
川跡3 流木出土状況



中
後期土器出土状況（第V層）



下
後期土器出土状況（第V層）

図版45 貝塚時代後期の調査（Ⅲ地区）vii

第4節 貝塚時代早期

近年、沖縄本島中南部の西海岸一帯で貝塚時代早期の遺跡が注目を浴びるようになってきている。中南部の西海岸に立地する貝塚時代早期の遺跡は、読谷村渡具知東原遺跡や嘉手納町野国貝塚B地点をはじめ北谷町伊礼原C遺跡、2005年に現場説明会がなされた那覇市箕原C遺跡、今回報告する新城下原第二遺跡の5遺跡を数える。年々、貝塚時代早期の遺跡が発見されるようになってきている。現在、県内では那覇市箕原C遺跡を含めると12遺跡の貝塚時代早期の遺跡が知られている。その遺跡は以下のとおりである。

【県内の貝塚時代早期の遺跡】

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1.名護市大堂原貝塚（沖縄本島北部） | 2.恩納村仲泊貝塚前の海岸（沖縄本島北部） |
| 3.うるま市ヤブチ洞穴遺跡（沖縄本島中部） | 4.読谷村渡具知東原遺跡（沖縄本島中部） |
| 5.読谷村大久保原遺跡（沖縄本島中部） | 6.嘉手納町野国貝塚B地点（沖縄本島中部） |
| 7.北谷町伊礼原C遺跡（沖縄本島中部） | 8.浦添市城間古墓群（沖縄本島中部） |
| 9.浦添市チヂフチャー洞穴遺跡（沖縄本島中部） | 10.那覇市箕原C遺跡（沖縄本島南部） |
| 11.渡嘉敷村船越原遺跡（周辺離島） | 12.宜野湾市新城下原第二遺跡（沖縄本島中部） |

周辺の遺跡と比較しながら当遺跡についてみていくたい。

最も近い北谷町伊礼原C遺跡は、貝塚時代早期の爪形文土器や貴重な木製品をはじめ曾畠式土器や条痕文土器、室川下層式土器といった後続の時期の遺物も多量に出土している。この遺跡も水源豊富な海岸低地に立地しており、当遺跡とも近く立地条件も類似している。

嘉手納町野国貝塚B地点は、海岸低地に立地しており下層から無文土器が出土し、ヤブチ式土器や東原式土器が出土している。当遺跡出土の爪形文土器で古手の野国タイプとされる凹線が縮位ない斜位に連続してみられる土器が出土している。また、石器も局部磨製石斧と大型の砥石などが共伴して出土している。1点だけ、磨製石鎌が出土しており、その形態に類似する貝製品が新城下原第二遺跡でも出土し、爪形文土器も野国タイプに類似する土器が局部磨製石斧と共に出土している。

読谷村渡具知東原遺跡でも、ヤブチ式土器や東原式土器が出土している。それに伴ってチャート製スクレイパーと石核、局部磨製石斧、打製石斧などが出土している。また、人工遺物のほかにイノシシ貝などといった自然遺物も多く出土している。海岸低地で汽水域に立地しており、前面には比謝川が流れている。

2005年に現場説明会がなされた那覇市箕原C遺跡でも多くの爪形文土器と石器などが得られている。詳細は今後の報告に期待したい。海岸低地に立地している。

以上のことを踏まえ、新城下原第二遺跡についてみていくたい。

新城下原第二遺跡は、海岸低地に立地しており貝塚時代早期の堆積層はⅡ地区の地表から約4m下にある標高0.0mに位置する。地表から8mほど下まで掘り下げるため、矢板で調査区を囲い発掘調査を行った。水との勝負で常に電気ポンプで水をくみ出しながら調査を行い、雨季の際は調査区がプールとなる現場であった。前年度までの調査で確認できた爪形文土器が出土する上層まで重機で検出し、無遺物層の第Ⅲ層から発掘調査を行った。残念なことに今回の調査では遺構は確認できなかった。今回確認できたのは人工遺物を含む堆積層および貝塚時代早期の古環境である。当遺跡の貝塚時代早期（第Ⅳ層）の環境は、海水の受けける状況で堆積したとは考えにくい遺物の出土状況から約6000年前には陸水域もしくは汽水域の環境であったと考えられる。このような環境には、アカザ科、ナス科、スズメウリ科、ニワトコ属（現在の分布からタウイワソクズの可能性がある）など、明るく開けた草地を形成する種類が分布していたと思われる。花粉化石が検出されず、種子遺体や木材片、炭化材、炭化物などが検出された。第Ⅳ層を検出した際に調査区全面に倒木や樹根が見られた（第30図）。第Ⅳ層は、標高0.0mで平行に堆積している。森林植生分析の結果、ヨウ属ヨウウ節やヨウウ属オハマボウ節、広葉樹が確認され、これらの植物や植物化石から海岸近くの森林縁辺部の植生を強く反映しており、当時は林縁に近かったことが示唆される（第6章第2節を参照）。それ以後の第Ⅴ層の時期（約5500年前）の環境は、周辺が汽水域、塩沢地、干潟地のように海水の影響下にあったと考えられる。その根拠として堆積物中からコゲツノブエやチドリマスオの2種の貝が得られており、前者が内湾汽水域マングローブ林の砂泥上に、後者が潮間帶の砂底に棲息する種類だからである（第6章第2節を参照）。

放射性炭素年代測定では爪形文土器と共に出土したリュウキュウイノシシ（第Ⅳ層）を分析にかけたところ測定年代が6080±50BPの測定結果が得られた。爪形文土器を含む層の上層（第Ⅴ層）では5530±

50BP、下層の第XⅢ層では6350±50BPの年代結果が得られた（第6章第2節を参照）。

出土遺物は、第Ⅸ層で樹根や倒木の間に散乱した状況で出土した。以下の層と比較すると人工遺物、自然遺物とともに多量に出土しており、人工遺物は爪形文土器（ヤブチ式土器）や無文土器をはじめ、ヤス状刺突具の骨製品や貝製鏃、有孔土製品などが出土している。石器では、局部磨製石斧やそれに伴って大小の砥石、敲打具などが得られている。貝類遺体ではシレナシジミなどが多く、シャコガイ、サラサバティ、ヤコウガイ、粒の大きなカンギクなどが出土し、シレナシジミは接合関係も確認することができた（第29図）。動物遺体では、リュウキュウイノシシが主体を占めて出土し、アオウミガメ、アカウミガメ、ケナガネズミなどとツル科、カラス類、カモ類、シギ科といった鳥類、魚類ではウツボなどが出土している。

第X層・第XⅡ層は無遺物層で、間層である第XⅠ層より無文土器1点とリュウキュウイノシシなどの獸骨が出土している。さらに下層の第XⅢ層は、海や湿地帯などの水性堆積で約2m堆積しておりリュウキュウイノシシなどの獸骨が出土している。第XⅣ・XⅤ層は、地山の泥岩（クチャ）の地形に沿って堆積しており、標高の高いC・Bグリットのところから獸骨が出土している。地山の泥岩（クチャ）がひび割れておりその隙間に堆積しているため、上層の獸骨が混入したと思われる。第XⅤ層の下に第XⅥ層が堆積しており、泥岩（クチャ）の地山になっている。遺物は出土しない。丘陵部から沿岸部に向けてCグリットから急傾斜して堆積している。もっとも深いところで標高約-4.0mである。

第XⅦ層の海側の傾斜がある、水性堆積である第XⅢ層以下の堆積で埋没し、平行堆積していく過程で海水の影響下から次第に離れ、森林緑縁に位置する環境下で人工遺物が堆積している。その後は、また海水の影響下になり条痕文土器や宝川下層式土器が出土する堆積層となっている。

新城下原第二遺跡の貝塚時代早期についてわかったことを以下に記す。

①沖縄県内の爪形文土器が出土する遺跡は、沿岸部で河口近くの海岸低地に立地している。これまで報告された中で明確な構造は検出されていない。当遺跡も同様で構造は検出されず、廃棄後の遺物が散乱する貝塚である。

②遺物では、爪形文土器と局部磨製石斧が共伴し、ヤス状刺突具といった骨製品や鏃状貝製品などといった刺す用途を持った製品が共伴して出土している。

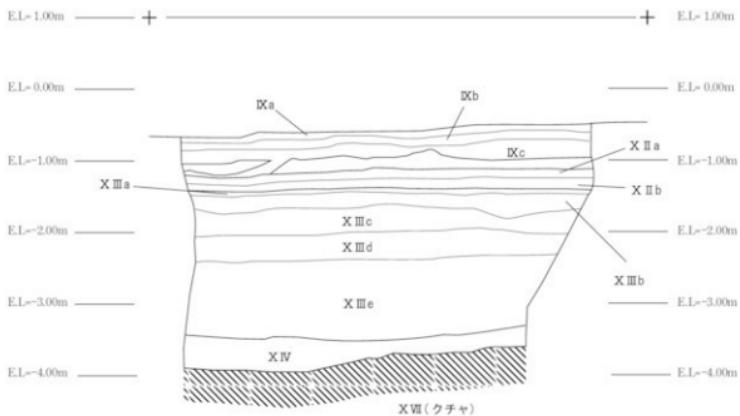
③動物遺体では、リュウキュウイノシシが主体を占めて出土し、アオウミガメ、アカウミガメ、ケナガネズミ、シカ科などとツル科、カラス類、カモ類、シギ科といった鳥類が出土した。貝類では、大型の貝（サラサバティ、シャコガイ、ヤコウガイなど）や小型の巻貝（カンギクなど）や二枚貝が出土。魚類（ウツボ等）も出土し、以上のものを食料としている。これらから、貝類の採集はラグーン内を中心とし、リーフ周辺まで行動範囲に含め、狩猟では遺跡後背にそびえている丘陵を利用していたと思われる。

④以下、貝塚時代早期頃からそれ以前の堆積状況と環境についてみていただきたい。

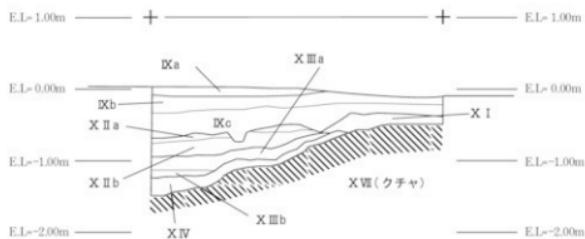
今回のII地区の調査で第XVII層の泥岩（クチャ）が丘陵側から海側に向かい傾斜している。Cグリッドの標高0mが最も高く位置しており、南北に向かって傾斜している。Eグリッドが最も深く標高約-4.0mまで斜面に堆積している。この層が基盤層となり、基盤層の凹地に平行堆積がみられる。その過程で堆積したのが第XⅦ層～第XⅢ層まで水性堆積と思われる。第XⅢ層は、泥質層でラミナが見られ、軽石、木片、カワニナ、海性の貝も混入することから低湿地帯の堆積層であると思われる。放射性炭素年代測定で6410±50BPの測定結果が得られている。第XⅡ層は、砂層であるが海との関連性は不明である。無文土器が1点出土している。第X～XⅠ層は砂層の無遺物層である。このころから基盤層の凹凸がなくなり、なだらかな平地になっている。全後間の状況を踏まえると、第Ⅸ層の時期には、遺跡周辺が陸地化しており遺物の出土状況から、貝塚としての可能性が高い。第Ⅸ層を検出した際に層一面に樹根や倒木が爪形文土器や人工遺物、獸骨、貝類遺体と伴って検出された。放射性炭素年代測定で6080±50BPの結果が得られている。第Ⅸ層はオリーブ灰砂層で貝、木片などが出土しているが人工遺物は出土していない。上層の第Ⅷ層は明確な海砂層が厚く堆積しており海進後の海底堆積と考えられる。第Ⅸ～Ⅷ層の堆積状況と花粉分析結果や出土する貝類から推察すると第Ⅷ層の時期にはマンゴロープ林付近に位置していたと思われる。シレナシジミなどの汽水域の貝が生育し、第Ⅷ層まで潜っている。そのため、第Ⅸ層の上部から二枚貝上下セットで出土している。

貝塚時代早期の遺物を含む堆積層は、海の影響を受けた地形が堆積により平坦面を形成し、陸上化した後に堆積している。その時期に森林が丘陵部から沿岸部にまで広がったと思われ、貝塚の廃棄後に汽水域になり、その後に海進により海底に没したのちに陸地化したりとして重複遺跡が形成している。

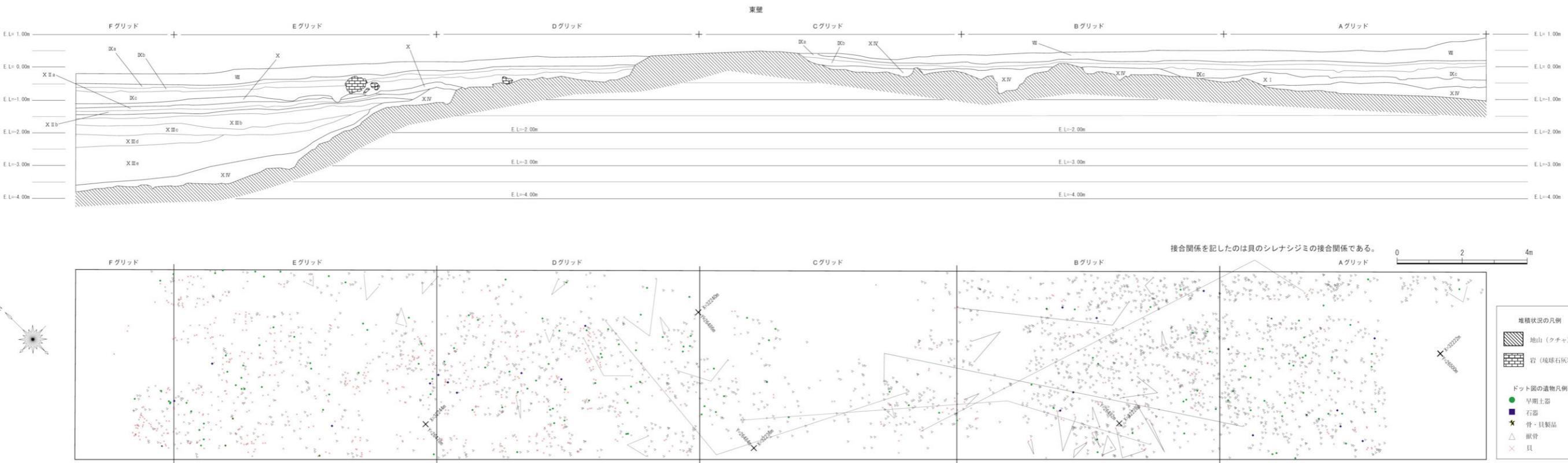
E グリット 北壁



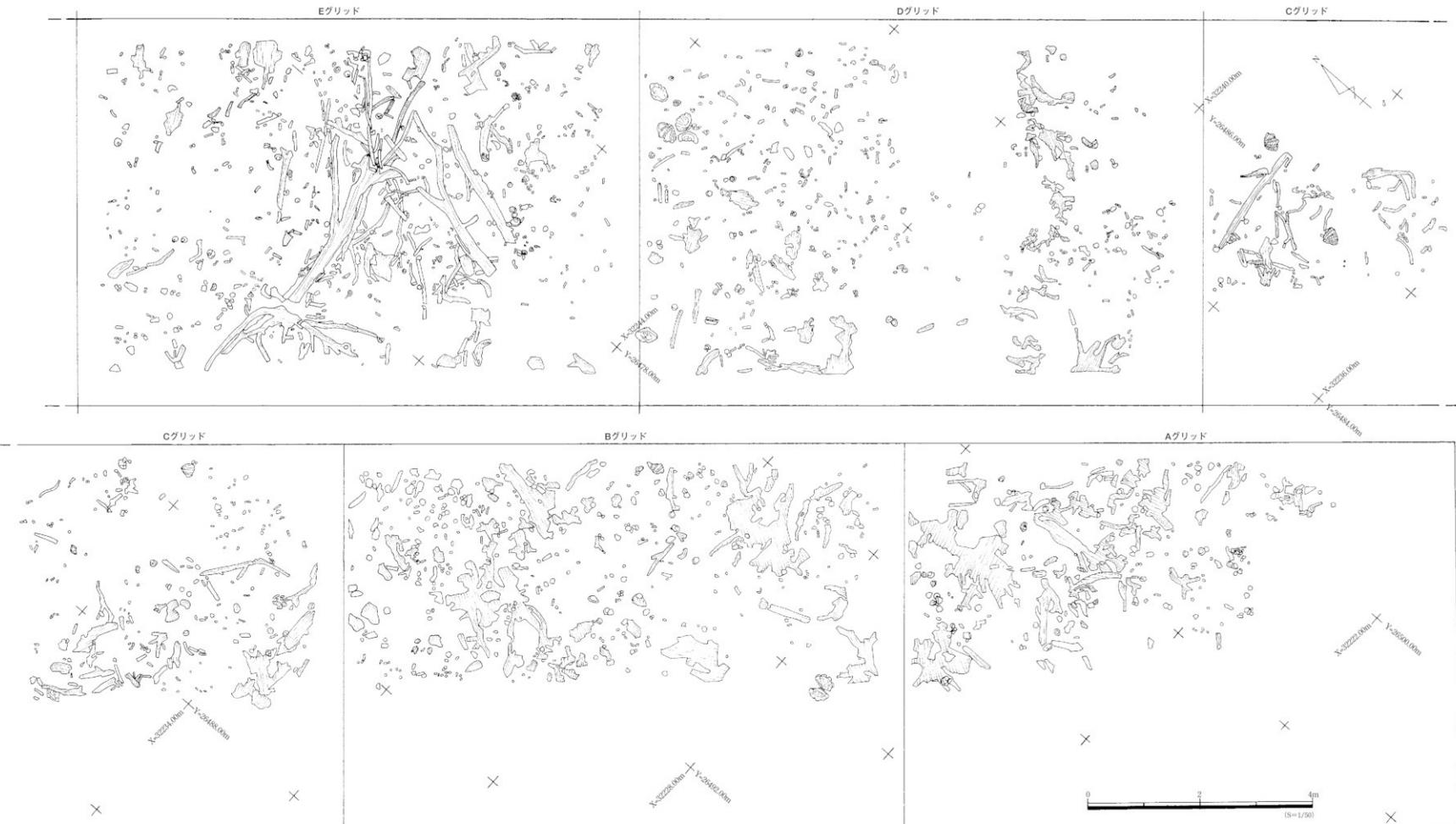
A グリット 北壁



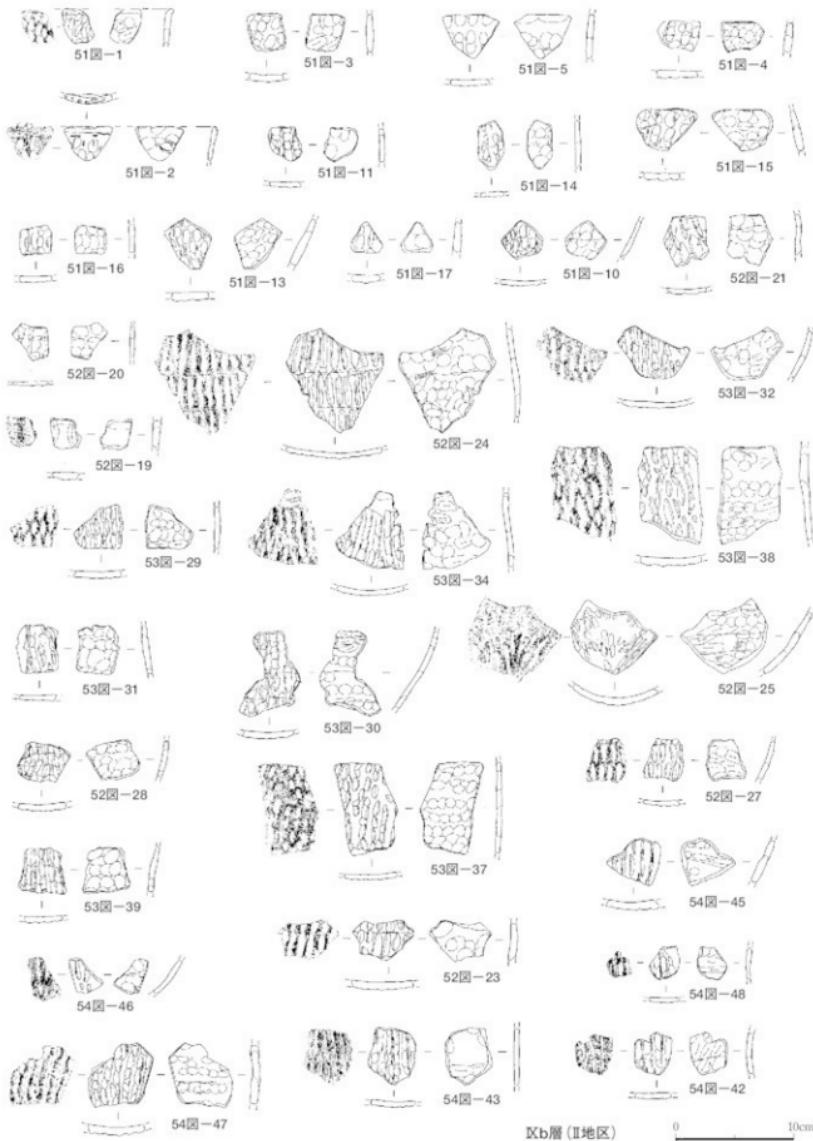
第28図 基本層序（貝塚時代早期）



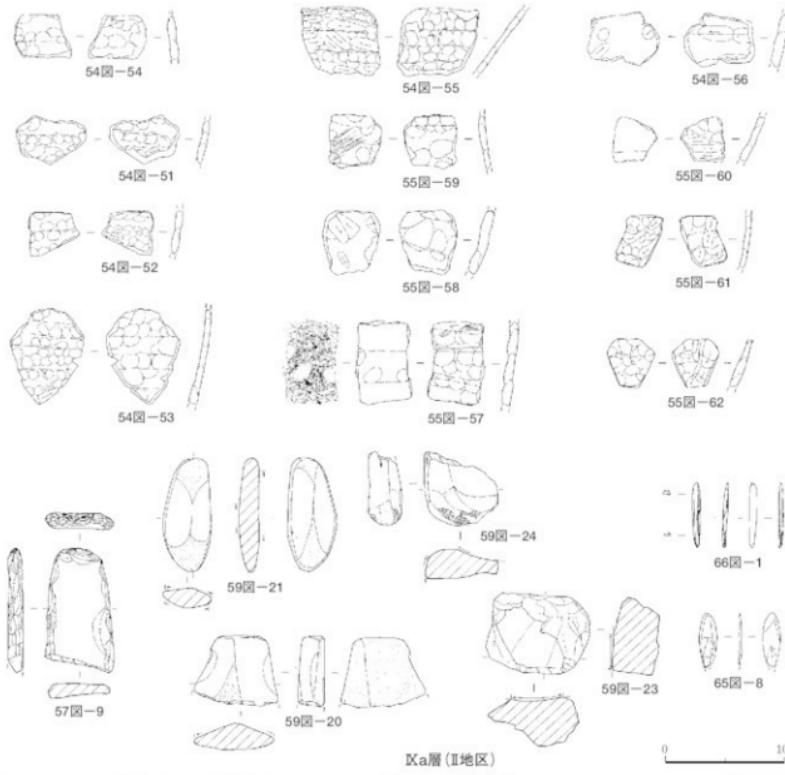
第29図 堆積層序及び遺物分布図



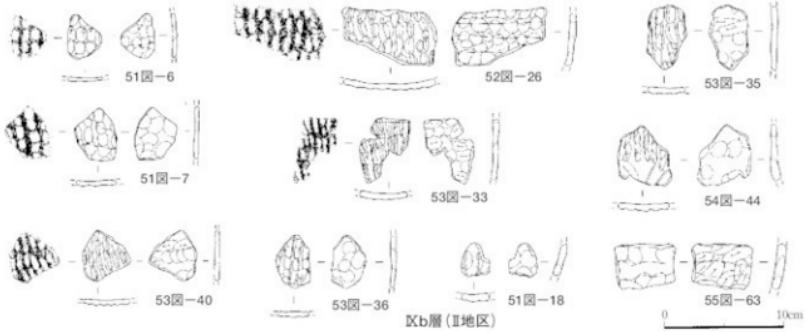
第30図 貝塚時代早期 遺物散布状況（Ⅱ地区）



第31図 IXb層の出土遺物



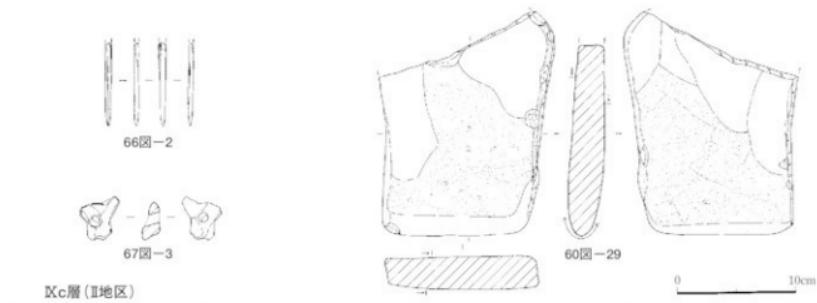
Ka層(II地区)



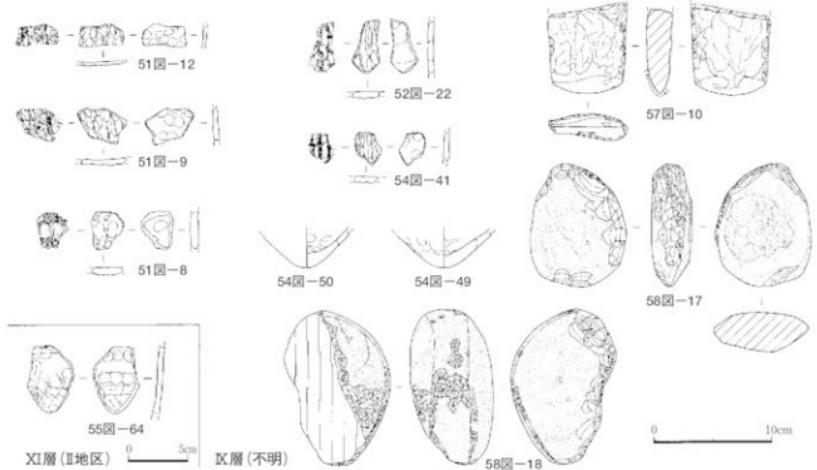
第32図 IXa層・IXb層の出土遺物



IXb層 (II地区)



IXc層 (II地区)



XI層 (II地区) IX層 (不明)

第33図 IXb層・IXc層・IX層不明・XI層の出土遺物



上 調査区近景



下 Aグリット東壁堆積状況①・南

図版46 貝塚時代の早期の調査（Ⅱ地区下層）i



上 A グリッド東壁堆積状況②・中



下 A グリッド東壁堆積状況③・北

図版47 貝塚時代早期の調査（II 地区下層）ii



上 B グリット東壁堆積状況①・南



下 B グリット東壁堆積状況②・央

図版48 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）iii



上 B グリッド東壁堆積状況③・北



下 C グリッド東壁堆積状況

図版49 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）iv



上 Dグリッド東壁堆積状況①・南



下 Dグリッド東壁堆積状況②・北

図版50 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）v



上 E グリッド東壁堆積状況①・南



下 E グリッド東壁堆積状況②・北

図版51 貝塚時代早期の調査（II 地区下層）vi



上 E グリッド東西サブレンチ・上面がⅩ層



下 E グリッド東西サブレンチ東壁・バカボー2m付近がⅩ層

図版52 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）vii



上 A グリット東壁遠景



下 D・E グリット東壁遠景

図版53 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）viii



上 E グリット遺物出土状況①・北



下 E グリット遺物出土状況②・南

図版54 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）ix



上 D グリッド遺物出土状況①・北



下 D グリッド遺物出土状況②・南

図版55 貝塚時代早期の調査（II 地区下層）x



上 C グリッド遺物出土状況①・南



下 C グリッド遺物出土状況②・北

図版56 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xi



上 B グリット遺物出土状況①



下 A・B グリット遺物出土状況

図版57 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xii



上 E グリット遺物出土状況③



下 E グリット遺物出土状況④

図版58 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xiii



上 E グリッド遺物出土状況⑤



下 A グリッド遺物出土状況①

図版59 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xiv



上 A グリッド遺物出土状況②

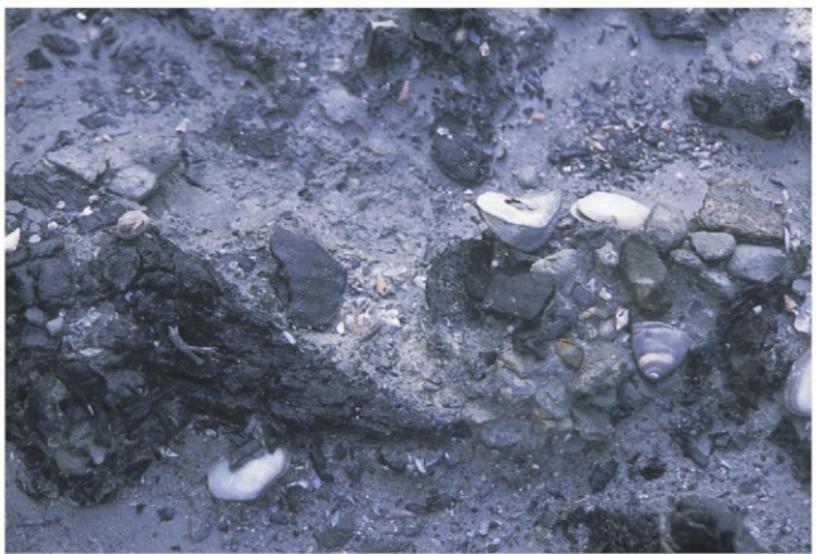


下 B グリッド遺物出土状況②

図版60 貝塚時代早期の調査（II 地区下層） xv



上 D グリッド遺物出土状況③



下 C グリッド遺物出土状況③

図版61 貝塚時代早期の調査（II 地区下層）xvi



上
爪形文土器出土状況①



中
爪形文土器出土状況②



下
爪形文土器出土状況③

図版62 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xvii



上
爪形文土器出土状況④



中
石器出土状況①



下
無文土器出土状況・XI層

図版63 貝塚時代早期の調査（II地区下層）xviii



上
石器出土状況②



中
石器出土状況③



下
石器出土状況④

図版64 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xix



上
シャコガイ出土状況①・合弁・IX層上面



中
シャコガイ出土状況②・カキ混入・IX層上面



下
シャコガイ出土状況③・合弁・IX層上面

図版65 貝塚時代早期の調査（II地区下層）xx



上
獸骨出土状況①



中
獸骨出土状況②



下
獸骨出土状況③

図版66 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xxi



上
鹿骨出土状況①



中
骨製品出土状況



下
鹿骨出土状況・XIII層a

図版67 貝塚時代早期の調査（II地区下層）xxii



上
完掘状況①・E グリット・クチャ面



中
完掘状況②・D グリット・クチャ面



下
完掘状況③・C グリット・クチャ面

図版68 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xxiii



鋼矢板設置後中間層掘削①



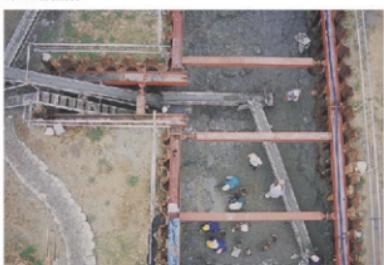
鋼矢板設置後中間層掘削②



第IX層掘削



東壁清掃



最下層確認①



最下層確認②



ベルトコンベアでの作業



土砂の運搬

図版69 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xxiv



測量



遺物取上



土層のサンプル



土層サンプル位置



スカイマスターによる撮影



調査区最下部までの深さ



フローテーション



種子の種分

図版70 貝塚時代早期の調査（Ⅱ地区下層）xxv